デジモンクロスウォーズ　絆の将と魔道の戦士

超人カットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デジモンクロスウォーズ　絆の将と魔道の戦士

【Ｎコード】
Ｎ５１３８Ｗ

【作者名】
超人カットマン

【あらすじ】
バグラ軍の皇帝「バグラモン」を倒した工藤タイキは、仲間達とデジタルワールドの復興に取り組んでいた。そんな中、不思議な声に導かれ、タイキは仲間のデジモン達と共に、魔法文化が栄える異世界「ミッドチルダ」にやってくる。彼らはそこで「機動六課」の魔道士達と出会う。
これは、タイキとデジモン達、そして機動六課の魔道士達の、友情と戦いの物語。

プロローグ（前書き）

この作品は、作者の考えたクロスオーバー小説です。本編とは一切関係ないので、本来ならクロスハート軍に加入していないデジモンが仲間になっている事があります。
なお、素人の書いた作品なので、読みにくさ諸々についてはご了承下さい。

プロローグ

デジタルワールド、それは不思議な生き物「デジモン」が住む世界。人間のネットワーク技術では確認できないところに存在し、あらゆる事物がデータで構成されている。
長いあいだ平和だったこの世界に、ある日大いなる危機が訪れた。皇帝バグラモン率いる「バグラ軍」が突如デジタルワールドに現れ、デジタルワールドをも破壊せんとする勢いでデジタルワールドを平定した。これにより、デジタルワールドは恐怖と絶望が支配すると思われた。

しかしある日、転機が訪れた。人間界から六人の子供がやってきて、その内の五人の子供がデジタルワールドの各地を侵攻するバグラ軍を蹴散らし。その後二人戦線から離れるも、三人の子供が七人の悪のデスジェネラル、悪に染まったもう一人の子供とバグラモンを討ち破り、彼らはデジタルワールドを救った。
これが、後に「伝説のジェネラル」として後世にまで語り継がれる「工藤タイキ」「蒼沼キリハ」「天野ネネ」の武勇伝である。

「貴方の……力が…必要…です…」
「！！？」
「どうしたタイキ？」
何か驚くべき事実を知ったような顔をしている「工藤タイキ」を見て、「蒼沼キリハ」が声をかけた。彼らは今、バグラ軍によって荒

らされたデジタルワールドの復興を手伝っている。
「あ、いや、なんでもない。」
タイキはこう答えて、クロスハート軍のデジモン達が作業を行っている場所へ向かっていった。
「あまり無理はするなよ。」
キリハはとりあえずタイキにこう言うと、自分のブルーフレア軍が作業している現場を見た。
彼の軍団のデジモンは真面目に作業を……していないやつもいた。
「ボムモン」や「ガオスモン」「ゴーレモン」「サイバードラモン」は黙々と働いていたが、「グレイモン」「メイルバードラモン」は空を見上げていた。
「どうしたグレイモン？メイルバードラモン？」
とりあえずキリハは、彼らに働いていない理由をきいた。万が一バグラ軍の残党か何かが攻めてくる事が分かったというのであれば、無関係なデジモンと非戦闘員を安全な場所まで逃がす必要があるからだ。
「違う。」
「俺たちに助けを求めているやつがいるようだ。」
彼らはキリハにこう答えた。
「何故その事が分かるんだ？」
キリハがたずねると、
「声が聞こえた。」
グレイモンが答えた。しかし、キリハ本人はそんな声を聞いていない。
「お前達、まさかタイキと同じ事は言わないだろうな？」
「ほっとけない、って？」
タイキのチームメイト「天野ネネ」がキリハに声をかけた。傍には「スパロウモン」「モニタモン」が侍っている。
「ところで、タイキ君がどこにいるか知らない？」

と、ネネはキリハにたずねた。
「タイキならあの辺りで作業してるはずだが、何かあったのか。」
「私は聞いてないんだけど、この子達が自分達に助けを求める声を聞いたって言うから。だからタイキ君と相談しようと。」
キリハの問いに、ネネはこう答えた。
キリハも、自分のグレイモン達も同じような声を聞いたと言っていたことをネネに伝え、タイキと合流する事にした。

「世界を…救って……」
タイキの頭に、消え入りそうなかすかな声が響いた。
「おいタイキ！どうしたんだよ！！」
間の抜けたような顔をしていたタイキに、「シャウトモン」が声をかけた。
「声が、聞こえたんだ。」
タイキはシャウトモンに説明した。
「お前やナイトモン、スパーダモンと出会った時と同じように今にも消え入りそうなやつが助けを求めてきたんだ。でも今回はメロディじゃなくて声が響いたんだ。」
「どういう事だ？ここはモニタモン達が隅々まで捜索してんだ、助けを求めるやつがいるならその時点で分かってるはずだし。そもそもメロディじゃなくて声なんて……」
シャウトモンも考え込み始めた。そこへ、先ほど合流したキリハとネネの二人と、件のデジモン達がやってきた。
キリハから、自分のグレイモン達とネネのスパロウモン達がタイキと同じように助けを求める声を聞いた、と報告を受けたタイキは、
「俺だけならともかく、他にもあの声を聞いたやつがいるとなると、ただ事じゃないのかもしれない。」
と、考えた。
「って事は、やっぱりあれか！？」

隣にいたシャウトモンは、タイキが何を言いたいのか理解したようで、勢い込んでいる。
「ああ、ほっとけない。」
工藤タイキの代名詞とも言える一言がタイキの口から飛び出した。
「受けてくださるのですね。」
その時、ネネを除くクロスハートメンバー、グレイモンとメイルバードラモンの頭の中に声が響いた。今度は消え入るような微かな声ではなく、はっきりした声だった。
「ああ、誰が相手でも助けを求めるならほっとけない。」
タイキは頭の中で声の主に語りかけた。
「ではこちらのゲートを通ってきてください。但し、私の声を聞いていない方はこちらに来ることはできません。」
この一言が響いた後、誰の頭にも声は響かなかった。代わりに、白い光を発する光球が現れた。
「キリハ、ネネ。どうやら今回行けるのは俺達とスパロウモンとモニタモン達、グレイモンとメイルバードラモンだけみたいなんだ。二人には悪いけど……」
タイキは、申し訳なさそうに二人に言った。自分一人、二人の主戦力デジモンを連れて違う場所に行くのだ。二人にとってはあまりいい事ではないだろうと思ったのだ。しかし、
「まあ、まだ倒すべき敵がいるのなら話は別だが、今ここでやるべきなのは一日も早い復興だ。俺達でも十分にできる。」
「でも、あなた達の言う声の助けに応じられるのはあなた達だけ。だから助けてきてあげて。」
二人はこう言って、自分達のデジモンを託してきた。
タイキは二人の心遣いに感謝して、デジモン達を自分の赤い「クロスローダー」に入れると。
「それじゃあ、行ってくる。」
と二人に言って、白い光球の中に飛び込んでいった。

プロローグ（後書き）

次回予告

謎の声に導かれ異世界にやってきた工藤タイキ。
彼はそこで一人の魔道士と出会い、こんな話を持ちかけられる。
「よかったらうちで働かない。」

次回、デジモンクロスウォーズ　絆の将と魔道の戦士
第一話「タイキ異世界に着く」

第一話　タイキ異世界に着く（前書き）

工藤タイキ「俺は工藤タイキ、バグラ軍との戦いで荒廃したデジタルワールドの復興をしていた俺は、ある日突然謎の声に導かれ、仲間と共に異世界へとやってきたんだ。」

第一話　タイキ異世界に着く

光の中に飛び込んだタイキは、次の瞬間街のような場所に現れた。しかし街といってもそれは過去の話であり、かなり長い間人の営みが無かったのか、今タイキが立っている道路や周りに建っている建物は、あちこちが欠けたりしてとても人が生活できるような有様では無かった。

「なんだここ？もしかしてサイバーランドに戻ってきちまったのか？」

クロスローダーより出てきたシャウトモンは、開口一発こう叫んだ。

「いや、それはないと思う。元々サイバーランドには誰も居なかったとはいえ、スプラッシュモンが倒された後、少しずつだけど他の国のデジモン達が集まってきていた。そんな中でここまで荒廃する事は有り得ない。」

「それに、サイバーランドにはもっと高い建物が多かったはずだ。」タイキの説明に、後からクロスローダーから出てきたドルルモンが付け足した。彼にとってサイバーランドは、お守りに苦労したり、敵に捕まったりと、悪い意味で思い出深い場所である。それ故、他より詳しくサイバーランドについて覚えていたのだろう。

「それならタイキ、俺がクロスローダーから出てこの場所について調べてきてもいいが？」

クロスローダーの中から声が響いた。声の主はベルゼブモン。かつてデジタルワールドがゾーンに分かれていた頃は、バアルモンというデジモンとしてバグラ軍に協力するフリーの殺し屋だった。サンドゾーンでの戦いでタイキ達を狙うも、その後元々このゾーンに存在したが、バグラ軍三元士であるリリスモンに滅ぼされた女神の戦士の生き残りである事が判明、リリスモンの放った刺客から捨て身でタイキ達を護ったとき女神に認められ、今の姿であるベルゼブモンとなり、クロスハートに協力するようになったのだ。

「いや、それはやめたほうがいい。」
しかしタイキは、ベルゼブモンの言葉に反対した。
「ここが何処か分からない以上、誰か一人が別行動を取るのは危険だと思うんだ。」
しかし、だからと言ってここで突っ立っていても何も進展しないので、とりあえず人の居る場所を探してそこに行くことにした。
では早速、とタイキが思った瞬間、背後で爆発音が響いた。
これはしめた、と考えたタイキは、すぐさま回れ右をしてその場所へと向かっていった。誰も居ない、何も無いような場所で爆発が起きる事は無い。と思ったからである。

「うぅ……どうしよう。」
現場では、一人の少女が壁に背を預け、数十体の機械兵器を相手に向かいあっていた。左手には本のような物を持ち、右手に握った長い杖を前に突き出している。
彼女の名は八神はやて。一仕事を終えて戻る時、偶然目の前の機械兵器ガジェットドローンを見つけ、一般人に危険が無いようにこの場所まで誘導し対処しようとしていたのだが、人の居ない所というのが良くなかったようで、多勢に無勢があいまって現在危機的状態にある。
「この場所じゃ、なのはちゃん達もすぐにはこれないし……」
はやてはこの状況下で、自分の目標を応援すると言ってくれた友人の事を考えていた。苦労に苦労を重ね、ようやく目標を達成できると言うときに、悪くて殉職、良くても大怪我をした私の事がニュースになったら彼女達はどんな反応をするだろう、と。
「ごめんなみんな、後の事はまかせ……」
はやてが覚悟を決めたとき、

「大丈夫か！！」
突然、赤と青のツートンカラーのTシャツと普通の長ズボンを身に付け、頭に青いレンズの入ったゴーグルをつけた少年が現れた。
はやては、突然の乱入者には驚いたが、
「君、ここは危ないよ。」
と、声をかけた。自分の失敗に他人、それも一般人を巻き込んだとあってはかなりの大問題である。
「確かにこの場は危険かもしれない。」
少年は目の前の敵を見据えて、真剣な口調で言った。
「でも、誰かが傷つこうとしているのなら、俺はほっとけない！！」
そして彼は、腰につけていた赤いマイクのような形のデヴァイスを掲げた、実際はクロスローダーなのだが、そんな物の存在を知らない彼女にはこう見えたのだ。
「リロード！！シャウトモン！バリスタモン！ドルルモン！スターモンズ！」
タイキが声の限り叫ぶと、クロスローダーが光だし中から、頭にV字型の角の生えた小竜、青いボディを持つカブトムシ型のロボット、茶色と白の毛並みを持ち頭と尻尾の先にドリルを持った超大型犬、星のような形の生き物とそれにしたがうおにぎり型の銀色のデジモンが現れた。
ガジェットドローンは、突然の新たな敵の登場に驚いたのか、一斉に砲撃を開始した。デジモン達はそれを上手く回避すると、
「いくぜ！！ラウディロッカー！！」
シャウトモンは何処からか取り出したマイク型の棍棒でガジェットを殴り倒し、
「アームバンカー！！」
バリスタモンは自身の太い腕でガジェットを殴り飛ばし、
「ドリルブレーダー！！」
ドルルモンは大きくなった尻尾のドリルに乗っかり、回転しながらガジェットに体当たりし、

「メテオスコール！！」
スターモンの指示を受けたピックモンズが、複数のガジェットに襲い掛かる。これによりあっという間に雑兵は片付き、親玉らしき大き目のガジェットが一体残った。
「アイツが親玉か！ソウルクラッシャー！！」
シャウトモンは、自分の情熱を声に変化させた雄たけびを飛ばし、
「ヘヴィスピーカー！！」
バリスタモンは、腹部のスピーカーから衝撃波を発射し、
「ドリルバスター！！」
ドルルモンは、額についたドリルを打ち出した。
ガジェットに三つの攻撃が当たり、辺りに砂煙が舞った。その砂煙が晴れたとき、ガジェットは健在であった。元から張られているシールドと、何処からか出てきている触手で防いだようだ。
「！どうするんや！！」
後ろのはやては心配そうだが、タイキはまるで動じる事は無い。再びクロスローダーを掲げると、再び声の限り叫んだ。
「シャウトモン、バリスタモン、デジクロス！！」
クロスローダーから発せられた光がシャウトモンとバリスタモンを包み込み、その光が一つになると、頭にシャウトモンの角、腹部にバリスタモンの頭部が付いた機械型デジモンが出てきた。
「シャウトモン×２！！」
シャウトモン×２は元気良く名乗りを上げた。ガジェットは触手を伸ばして掴みかかろうとするも、シャウトモン×２は素早い動きで回避すると、手刀を振り下ろして触手を切断し、バリスタモン単体で放つときよりも威力の上がったアームバンカーで、ガジェットを取り巻くシールドと一緒に光線発射口を潰し。逃がさないようにとガジェットを捕まえた。
「バディブラスター！！」
バリスタモンの頭部から発射する、二人の息がぴったり合って初めて撃つことのできる破壊光線で、ガジェットを粉々に吹き飛ばした。

「やったぜ！一丁あがり！！」
バリスタモンと分離したシャウトモンは、飛び上がって喜んでいる。
すると後ろから、
「なんか良く分からない所も多いけど、助けてくれてありがとうな。」
はやてが声をかけた。もう必要ないと考えたのか、長い杖は光に包まれた途端何処かへ引っ込み、服装も茶色を基調とした制服に変わった。
この一連の流れに、タイキ達が驚いて呆然としていると。
「とりあえず、ここじゃなんだから。うちについて来てくれる？」
とはやてに言われたので、とりあえずついて行ってみる事にした。

その後、タイキ達は完成したばかりの、明日ある部隊の隊舎となる巨大な建物に来たタイキは、明日隊長の部屋になるという部屋で、はやてと話をしていた。
タイキはとりあえず、自分の身の上と、どうやってここへ来たのかという事を簡潔に説明した。はやては、タイキが自分と出身世界が同じという事に驚いていたが、その後謎の声に呼ばれてここに来た、と言った時は、
「ようするに、次元漂流者か。」
と、言った。
「すいません、詳しい説明をしてもらえますか？」
タイキは何のことかちんぷんかんぷんなので、分かりやすく教える事を要求した。
なのではやては、
世界というのは、自分達の出身世界一つではなく、様々な文明の発

達した世界が数多く存在しており。自分がその世界の治安の管理を行う「管理局」という組織に所属していることと、ここがその次元世界の中心である「ミッドチルダ」と呼ばれる世界である事。時折、事件や事故で違う世界に飛ばされてしまう人がいて。そういった次元世界での迷子になった人を「次元漂流者」と呼んでいる。

といった内容の説明を簡潔に行った。そして、

「とりあえず、タイキ君が元々居た、でじたるわーるど、まで帰る方法はうちらが責任を持って見つける、だから。」

この世界でタイキ達の運命を決める一言を言った。

「それまでの間、うちの部隊、機動六課、で働かない？」

第一話　タイキ異世界に着く（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモン
「モニタモンの。」

二人
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「さて、本編の開始と同時に始まりましたこのコーナー。ここではこの小説に登場するデジモンを一話につき一体紹介していきます。」

モニタモン
「さて、今回紹介するのは、シャウトモンですな。」

カットマン
「シャウトモンは小竜型のデジモン。必殺技は情熱の力で生成した火炎弾を投げつけるロックダマシーと、持っているマイクで殴りつけるラウディーロッカー、殺人級の大声を上げるソウルクラッシャー。」

モニタモン
「非常に攻撃的な性格ですが、一度仲良くなれば種族を超えて友情を育むことができますな。」

カットマン

「そして、ラウディロッカーを使うときに使用するマイクは、マクフィルド社という会社で作った特注品で、シャウトモンは常にこれを持ち歩く修正がある。もし失くした暁には、自分がシャウトモンではない、というショックでショック死するらしい。」

モニタモン
「だから、シャウトモンのマイクを取り上げる事だけは絶対にしてはいけないんですな。」

二人
「次回もお楽しみに！！」

次回予告
ついに始動する機動六課。民間協力者として活動に参加する事になったタイキは、管理局のエースオブエースと、彼女の教え子である新人達と出会う。
そして、シャウトモン×４ＶＳシグナム、夢の対決が実現？

第二話「機動六課始動、お前の力を見せてみろ」

第二話　機動六課始動　お前の力を見せてみろ（前書き）

工藤タイキ「俺は工藤タイキ。ある日突然仲間達と共に異世界に飛ばされた俺は、そこで八神はやてと会い、しばらく彼女に協力することになった。」

第二話　機動六課始動　お前の力を見せてみろ

工藤タイキと八神はやてが会見した次の日、機動六課隊舎の部隊長室には二人の女性がいた。一人は八神はやて本人であり、もう一人は人形のようなサイズの銀髪の女性である。
「ようやくこの部屋も部隊長室らしくなったな。リィンにもぴったりな机が見つかってよかったね。」
はやては、初めての机を堪能する銀髪の女性に言った。彼女の本名は「リィンフォース？」八神はやてを補佐する存在である。
「リィンにぴったりサイズですぅ。」
玩具なのか、それとも何かのパーツの余りなのかは分からないが、リィン本人はこれで満足しているようだ。
すると、部隊長室の扉が開いて、女性が二人入ってきた。一人は、割と長い栗色の髪をサイドポニーで纏めた活発そうな女性。もう一人は、腰まで届く長い金髪をストレートに下ろした大人しそうな女性である。
「あ、なのはちゃん、フェイトちゃん。」
「二人ともよく似合ってるです。」
入ってきた二人の女性を、はやてとリィンは快く受け入れた。そして二人が自分と同じ、茶色を基調とした制服を着ているのを見て、昔を思い出しながら言った。
「にしても、三人で同じ制服なんて中学校以来やな。なんや懐かしいわ。」
それでも何か思い出したのか、
「でもなのはちゃんの場合、飛んだり跳ねたりできる教導隊の制服でいることのほうが多いだろうけど。」
と付け足した、
「うん、でも公式の場の時はこっちって事で。」
栗色の髪の女性ははやてにこう言うと、隣に立っている金髪の女性

と共にはやてに敬礼すると、
「本日をもって、高町なのは一等空尉と。」
まず栗色の髪の女性が始め、
「同じく、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官。」
次に金髪の女性が続き、
「両名共に、機動六課へ出向となります。」
最後に二人でしめた。
「はい、よろしくお願いします。」
はやても、二人の挨拶に笑顔で答えた。
「そういえば、昨日はやてちゃんが会ったっていう民間協力者の子って？」
突然、思いついたかのようになのはが言うと、
「あ、そうやった、まずは二人に紹介しとくね。」
思い出したかのようにはやてが言うと、
「入ってきてええよ。」
と、扉の向こうへと声をかけた。すると扉が開いて、頭に青いレンズのはまったゴーグルをつけた少年が入ってきた。
「紹介するね、民間協力者の工藤タイキ君。」
「工藤タイキです。」
はやての紹介にあわせて、タイキも名乗った。
「初めまして、私は高町なのは。」
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。」
二人も一緒に名乗った。その後、
「で、私はリィンフォース？ですよ。」
今まではやてと一緒にいたリィンフォース？が前へ出てきた。彼女が名乗ると同時に、
「何！！これは妖精か？！！珍しい早速解剖を！！！！」
全身をローブとフードで隠した謎の存在が、大量の金属器を持ってタイキの背後から現れた。謎の存在の正体は「ワイズモン」であり、特に謎ではないが。

「ひぇえぇーですぅ！！！」
突然の事態に驚いたのか、リィンフォース？は全速力で逃げるエリマキトカゲの如きスピードではやての後ろに隠れた。ちなみに、本気で走るエリマキトカゲは水の上でも走れるのだ。
はやて、なのは、フェイトの三人もこの事態には驚いたが、次の出来事には更に驚いた。
「テメェはなんでもかんでも解剖しようとすな！！」
前に出て来たワイズモン同様にタイキの背後より飛び出したV字型の角を持つ赤いトカゲが、ワイズモンを殴り倒したのだ。殴った瞬間かなりいい音がしたので割とダメージは多いはずだが、ワイズモン本人はピンピンしており、
「すまない、珍しい物が多すぎてつい好奇心が抑えられなくなってしまっていたようだ。」
と言うと、そのままクロスローダーの中に戻っていった。
「あの、ところでこちらは？」
フェイトが今までの出来事に呆然としながら、現れたトカゲについてタイキにたずねた。
「俺はシャウトモン、いずれキングになる男だぜ！！」
フェイトの問には、タイキではなくシャウトモンが答えた。言わなくてもいい事も言っていたが、
「タイキ君はこういう生き物をたくさん連れいるんや。」
はやてはこれからの事も考え、とりあえずなのはとフェイトの二人に説明しておいた。タイキ本人が言うには、自分の連れているデジモン達だけで既に一つの軍団を結成しているとの事である。
「とりあえず、そろそろ行かへん？もうみんな集まった頃やし。」
はやてにこう言われ、部隊長室にいる五人と一体は、とりあえずこれから始める部隊のメンバーが集まるロビーへ向かっていった。

ちなみに、何故タイキが機動六課に協力することになったのかとい

うと、昨日まで遡る。
「うちで働かない？」
はやてにこう言われたタイキは、
「俺個人としてはいいんだけど、みんなはどう思う。」
と仲間のデジモン達に伺いをたてた。
「俺は勿論ジェネラルを信じるぜ！」
と、シャウトモン。
「タイキガイイナライイ。」
と、バリスタモン。
「考えてもみろ、お前の判断が間違ったことがあったか？」
と、ドルルモン。
このような調子で他のデジモンも次々と賛成意見を表明し、晴れて工藤タイキは機動六課入りになった。
「それじゃあ、制服用意するから身体のサイズ計らんとね。」
と言って巻尺を用意したはやてに色々されたのも、ある意味いい思い出である。

「……とまあ、長い挨拶は嫌われるので以上で終わります。」
ロビーに集まる隊員達の前に設えられた舞台の上で簡単な挨拶をした部隊長八神はやてを、隊員達は拍手で送った。
工藤タイキは他の隊員と混じってはやての挨拶を聞いていたが、挨拶終了後はやてに話しかけられた、
「タイキ君の実力を正確に測りたいから。地図に書いてある場所まで来てくれへん。」
簡単な内容の指示と一緒に、六課隊舎の地図が渡された。その一箇所に丸が付けれていたので、タイキはその場所へ向かった。

一方のなのはは、これからこの部隊のフォワード部隊に入る事になる四人の新人達を先導していた。
「そういえば、お互いの自己紹介は済んだ？」
「はい、お互いの名前と出身と経歴と……」
なのはの問いに、なのはから見て一番右にいたツインテールの髪型の少女が答えた。
「そう、それじゃあ改めて機動六課の隊舎の案内をするから付いてきて。」
なのはは四人にこう言って、隊舎を隅々まで案内し、最後に自分が一番よく居ることになるだろう場所、演習場へ向かっていった。

「んがー！暇だぁ！！」
シャウトモンが叫んでいる。目の前には透き通るほどに青い海、天気は快晴だが、やる事が無い為シャウトモンにとっては退屈極まりないのだろう。
「落チ着ケシャウトモン！」
「騒いだところでなんにもなんねえぞ。」
そのシャウトモンを、バリスタモンとドルルモンがいさめた。最初のうちは、キュートモンと共に銀色のおにぎり型生物「ピックモン」を積み上げて遊んでいたシャウトモンだったが、すぐに飽きてしまったのだ。一方のワイズモンは、なにやらパネルをいじっていた。
「ところでワイズモン、なにやってんだ？」
タイキにたずねられたワイズモンは、
「ふむ、なるほど、これをこうすれば……」
ぶつぶつ呟きながらパネルをいじった、すると、突然目の前に広がる何も無いサッカー場のような場所が、あっという間に廃ビル街に変わった。

「すげぇー！！」
「ビルが生えたっキュ！！」
その突然の出来事にシャウトモンとキュートモンは大喜びである、
「ワイズモン、あれは一体。」
「あれはかなり精巧な立体映像だ。データさえ入力すれば、動くものであっても忠実に再現できるんだ。」
次のタイキの問いには、ワイズモンは即答した。
「それに、データを変えれば。」
ワイズモンは再びパネルをいじった、すると再び変化が起きた。これまで廃ビル街だった場所が、一瞬で森に変わったのだ。
「すげぇ！また変わった！！」
見ているシャウトモンは大喜びである、しかし、
「ちょっと！なにやってるんですか！！」
突然大きなトランクを持った、眼鏡をかけた少女に怒鳴られた。
「これは沢山電気を使うんですから！訓練する時以外は使わないで下さい！！」
今までパネルの前にいたワイズモンをどけると、パネルを操作して出てきていた森を消した。
タイキ達が、今の剣幕に驚いていると、
「あ、シャーリー！！」
どこかで聞いた声が聞こえてきた。新人達に隊舎の案内を終えたなのはが、新人達を連れてやってきたのだ。
「紹介するね、彼は民間協力者の工藤タイキ君。」
なのはが後ろの新人達にタイキの紹介をすると、
「あ、初めまして、スバル・ナカジマです。」
まず最初に、タイキから見て一番右にいる、ボーイッシュな青髪の少女が自己紹介し、
「ティアナ・ランスターです。」
次に、その隣にいるツインテールの髪型の少女、
「エリオ・モンディアルです。」

次に、その隣の少し背の低い少年、と続いていき。
「キャロ・ル・ルシエです。」
一番左にいた、大人しそうな少女が自己紹介を終えると、
「キュクルー。」
キャロの背後から、白い色の鳥のような生き物が現れた。
「この子はフリード・リヒ、私のドラゴンです。」
フリードについてキャロが紹介すると、
「デジモンではないドラゴンだと！！珍しい！！早速解剖を！！！！！」
ワイズモンの悪い癖が発動した、何処に隠していたかは不明だが大量の金属器を携えて現れたのだ。
「キュクー！！！！！」
フリードは電光石火と言えるほどのスピードで、キャロの背後に隠れた。新人フォワード四人が驚いていると、
「だからテメェは何でもかんでも解剖しようとすんな！」
ワイズモンは、タイキの近くにいたシャウトモンをはじめとするデジモン達に取り押さえれた。
「すまない、この世界は珍しい物が多すぎてつい。」
取り押えれたワイズモンは、面目なさそうに言った。
「あの、ところでそちらは？」
と、ティアナがたずねた。両隣が唖然としている中で、新人最年長の面目躍如である。
「俺はシャウトモン。」
「バリスタモン。」
「ドルルモンだ。」
「俺はスターモン、こいつらはピックモンズ。」
「イエーイ♪」
「キュートモンだっキュ。」
「ワイズモンだ。」
部隊長や分隊長と会った時とは違い、無駄の無い簡潔な自己紹介を

した。
「皆集まったんやね。」
みなの自己紹介が終わった所で、何も無かったところにモニターが展開され、はやての顔が映し出された。
「突然やけどタイキ君。演習場でスタンバイしてくれる。」
はやてが言うには、今からタイキの実力テストをするのだと言う。
「よっしゃあ、ようやく出番か！！」
今までやる事が無く、暇だと叫んでいたシャウトモンが張り切り始めた。

「それじゃあシャーリー、ターゲットはガジェット５０体でいくで。」
はやてはモニター越しで、部隊のメカニックであるシャーリーに指示を出した。
「それじゃあタイキ君、課題は今から現れる敵の全滅や、それじゃあいくで。」
はやての合図と同時に、シャーリーはパネルのキーの一つを押した。
これで５０体のガジェットが登場しテストが始まるはずだったのだが、キーを押した瞬間シャーリーがある事に気がついた。
「しまった、プログラムミスで桁が一つ多くなっています！」
その上、
「ロックが掛かってしまって全部倒すまで止められません！！」
これには、はやては勿論、その場で見ていたなのはと新人達、そして一緒にいた部隊の副隊長も驚いた。５００体といえば、たとえ自分達のように高威力の魔法攻撃をバンバン打てる魔道士であっても無傷ではすまない数である。
でも、現場のタイキ達はまったく動じなかった。彼らはこれまで、一騎当千と言っても過言ではない数多くの強豪デジモンと渡り合っ

てきたのだ。雑魚兵５００等敵のうちにも入らないのだろう、
「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、デジクロス！！」
「シャウトモン×４！！」
クロスローダーを掲げたタイキの声が響いた瞬間、彼の横にいたデジモン達が光で包まれ、その光が一つになった途端、巨大な剣「スターソード」を携えた竜戦士型デジモン「シャウトモン×４」が現れた。
「うわ！合体しちゃった！！」
「しかも凄く大きくなってる。」
見ている新人達は驚きを隠せないようである、
「スリービクトライズ！！」
シャウトモン×４は、スターソードを構えると赤いＶ字型の光線を発射した。撃たれた光線は、ガジェットの群れに突っ込み、一気に百体以上のガジェットを吹き飛ばした。
「凄い、今の一発でガジェット百体以上撃破、威力はなのはさんのディバインバスター一発に相当します。」
シャウトモン×４の戦闘データーを記録していたシャーリーはなのはに報告した。なのは本人も予想より遥か上をいく彼らの実力に驚きを隠せないようで、無言で返した。
そんな中でも、シャウトモン×４の剣劇は止まらない。頭に搭載されたバルカン砲で狙撃し、太い足で踏み潰し、スターソードで真っ二つにする。これらを繰り返す事で、ターゲットであるガジェットはどんどん数を減らしていく。そんな様子を見て、精神が高ぶるのを止められなくなっている者が居た。なのはや新人フォワードと共に様子を見ていたシグナムである。生粋のバトルマニアである彼女は、シャウトモン×４が戦っている様子を見て、いてもたってもいられないのである。自分も戦ってみたいと、
「ビクトライズブーメラン！！」
シャウトモン×４が赤いブーメランを投げつける、この一発がガジ

エットたちのとどめの一撃になったようで、ブーメランが戻る頃には、ガジェットは一体も居なくなっていた。
「よし、これで全滅……」
帰ってきたブーメランをキャッチしたシャウトモン×４が剣をおろそうとした時だった。突如何かが迫ってくる感覚を感じ、剣を構えなおした。そしてそのまま振り下ろされた剣をスターソードで受け止めた。
「まだだ、まだ私という敵が残っているぞ！！」
剣を振り下ろしたのは、バリアジャケットを身に付け愛用の剣「レヴァンティン」を携えたシグナムだった。
「いけるか？シャウトモン×４。」
恐らく簡単には退いてくれない、と判断したタイキはシャウトモン×４にたずねた。
「ああ、まだいけるぜ！！」
シャウトモン×４ＶＳシグナム、第二ラウンドが開始された。

「なあはやて、大丈夫なのか？」
新人達と共にテストの様子を眺めていた小柄な少女「ヴィータ」は、はやてに訊いた。
「いいんや、なんか面白そうやし。」
はやては即答した。いい加減な部隊長の判断に若干呆れながらも、演習場で行われている戦いに目を向けた。
シャウトモン×４が剣を振る、シグナムはそれをかわすか上手くそらすことで彼の剣を掻い潜り、ここぞという所で渾身の一撃を叩き込む。シャウトモン×４も負けじと防御し、シグナムを遠くへふっ飛ばす。シグナム自身も、自分より体格差のある相手との戦いの経験が無いわけではない。しかし、巨大なだけの獣ならともかく、一流の武人同様の動きをする獣と戦う経験はそんなに無い。なので、

大技で一気にケリを付けようとシャウトモン×４から距離を取り、カートリッジをロードした。シャウトモン×４も大技が来る事を悟り、剣に自身の力を注ぎ込んだ。そして、

「紫電一閃！！！！」

「バーニングスタークラッシャー！！！！」

二人の渾身の斬撃がぶつかり合った、その反動は凄まじく、遠くで見ていたなのは達のところまで衝撃が飛んできた。

そして衝撃と共に発生した砂煙が晴れ、そこに立っていたのは、シャウトモン×４だった。しかし、無傷とまではいかず、体中に傷を負っている。一方のシグナムは、身につけているバリアジャケットは衝撃でボロボロとなり、方膝を付いて肩で息をしていた。

「フフ、私の負けだな。」

シグナムが負けを認めた事で、シャウトモン×４は見事課題をクリアした。

「本当に凄いです、最後の一撃の威力はオーバーＳランクをマークしています。」

シャーリーは、目の前で演じられた勝負と、そこから導き出された結果を見て唖然としていた。

その後、部隊長室にてシャーリーとなのはの作った報告書を見たはやてはこう思った。

「凄い、これならあの予言も覆せるかも。」

第二話　機動六課始動　お前の力を見せてみろ（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモン
「モニタモンの。」

二人
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「さて記念すべき第二話。今回紹介するのはバリスタモン。」

モニタモン
「バリスタモンはマシーン型デジモン。得意技は太い腕で殴りつけるアームバンカー、硬い角でつつくホーンブレイカー、腹部のスピーカーから放つ衝撃波で相手を吹き飛ばすヘビースピーカーですな。」

カットマン
「硬い装甲と凄まじいパワーを持つデジモンだが、基本的には心優しいのでむやみにその力を振るう事は無い。」

モニタモン
「ところで、バリスタモンは実はダークボリューモンというデジモンだったという設定がアニメで登場しましたが、この小説では登場するんですか？」

カットマン
「それはまたのお楽しみという事で。」

二人
「それじゃあまたねー！」

次回予告
機動六課が活動を開始して数日後、新人フォワード四人にデヴァイスが渡される日がやってきた。四人がデヴァイスを受け取った瞬間、突如緊急出動がかかる。

次回「機動六課初出動」

第三話　機動六課初出動

クロスハートのデジモンと５００体のガジェット、そしてシグナムがやりあってから数日が経過した。会場となった演習場では今日も喧騒が響いていた。高町なのはが、新入り達をしごいているのである。

「じゃあ今日のまとめ、私一人対みんなでシュートイベーション。」白を基調としたドレスのようなバリアジャケットを装備したなのはが、空中から呼びかけた。

「はい！！！！」

地上からは四人の新人、そしてクロスハートのデジモン、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズの声も響いてきた。なのはは、彼らの能力や特技を考え、新人と同じポジションにつけて一緒に訓練しているのだ。デジモン達は、基本的にすることがないから、とこの訓練に参加している。工藤タイキも、かつてデジタルワールドで戦っている時は、作戦を考える時間こそあったがこのように訓練を行う時間は無かった事を思い出し、訓練には自分も参加している。ちなみに、シャウトモンはスバルと、バリスタモンはエリオと、ドルルモンはティアナと、スターモンズはキャロと、それぞれ同じポジションについている。

「五分私の攻撃をかわしきるか、私に一発決定打を与えれば合格。」

「このボロボロの状態で、なのはさんの攻撃を五分かわしきる自信有る？」

なのはが合格の条件を提示すると、ティアナは即座に他の面子に聞いた。

「無理。」

とスバル、

「同じくです！」

とエリオ、

「さすがにちょっとキツイな。だが頭数はこちらの方が多い、なんとか前半は回避に徹し、すきをみつけて一気に突撃するとするか。」とドルルモンが提案し、皆その策で行く事にした。その横でティアナが思った。
（ほんの少し味方の状態を確認し的確な策を考えるなんて、でも関係ない）
「そういえば、シャウトモン達が合体すれば一発で済んじゃうんじゃないかな？」
スバルが突然気付いたように言った。しかし、
「いや、今回はデジモンの個々の力を上げるのが目的なんだ。だからなるべくデジクロスは使わない。」
と、タイキが言った。この言葉に、スバルは少し残念そうにしていた。
「準備はいい？それじゃあいくよ！」
訓練はなのはの掛け声で開始した。最初の攻撃をかわしたスバルとシャウトモンは一番槍を狙い飛び込んでいった。
「「うぉおおぉぉー！！」」
スバルは拳を、シャウトモンはマイクを掲げて殴りかかった。しかしなのはは、右手でバリアーを展開し攻撃を防御、そのまま遠くへ弾き飛ばした。
「二人とも、いい攻撃だったけど、まだまだだよ！！」
そう言うと、バリアーを展開していた右手から複数の光弾を発射した。
「やべ、ラウディロッカー！！」
シャウトモンはマイクを振り回して飛んでくる光弾を弾き飛ばした。弾きながら思った、
（ベルゼブモンやツワーモンの光弾より速い、これでまだ手加減してるって？）
かつてベルゼブモンらと特訓していた時の事を思い出した。そうしていると、

「しまった！！」
光弾2発を見逃してしまったのだ。相手に気付かれないように弾を放つ、これも高町なのはの技術の一つである。
「え、えぇぇ！！」
スバル本人の驚きは最たるものだろう、前と横に進めない状態で光弾が飛んでくるのだから。
「ああ、もう！！」
ティアナが見かねて援護射撃をしようとしたが、出たのは弾が発射された時の音だけであった。
「ええ！弾切れ！！」
ティアナは大急ぎでカートリッジを入れ替えるも、そんな中でも光弾はスバルへと近づいていく。シャウトモンも駆けつけようとするも間に合わない、しかし、
「ドリルバスター！！」
ドルルモンが額のドリルを二発発射し、飛んでいく光弾を打ち落としたのだ。
「助かったぜドルルモン！！」
シャウトモンが礼を言うと、
「なに、仲間なら当然だろ。」
と、ドルルモンは返した。
一方エリオとキャロ、バリスタモンとスターモンズが何をしていたかというと、キャロはバリスタモンの後ろに控え、エリオはスターモンとピックモンズがデジクロスして作った「スターシューター」に乗っかり、バリスタモンがそれを引っ張っていた。
「大丈夫エリオ君、かなりスピードが出ちゃうと思うけど。」
「大丈夫だよ、スピードだけが取柄だから。」
彼らの作戦はこうである、まずはスバル、ティアナ組がなのはの注意をひき、意識を自分達側へ集中させたところで、エリオが突貫するというものである。
（そろそろだな）

とドルルモンは思ったのか、右後足でこれから突進する闘牛のように地面を蹴った。これがエリオ突貫の合図である。
「今だシスター！！」
合図を受け取ったスターモンズは、キャロに合図した。合図を受けたキャロは、エリオに速度上昇の力を与えた。
「イクゾ！！」
バリスタモンはこう言って、スターシューターから手を離した。すると、エリオは弾丸の如き勢いで飛び出した。飛んでいくエリオは真っ直ぐなのはの方へ向かっていき、見事命中した。
「うわぁぁ！！」
結果は弾き返されたようで、エリオがふっ飛んできた。しかし、
「合格だよ。」
なのはのバリアジャケットには、一箇所焦げ目がついていた。そこにエリオの攻撃が少しあたったようだ。
これにより彼らは最後の訓練を終了した。一度皆で集合した時、
「おい、なんか焦げ臭くねえか？」
突然ドルルモンが言った、
「きゅくうー」
フリードも同じように思っている、とキャロが説明した。
「あ！もしかしたら！」
スバルが思いついたかのように言った、そして屈みこむと自分の履いているローラを確かめた。
「あー、やっぱりだ。相当無理させちゃったかな。」
彼女の抱えるローラーからは煙が立ち上っている。これが焦げ臭さの正体だったようだ。
「それに、ティアナの銃の調子も悪いんじゃないか？」
ドルルモンは、ティアナに言った。
「うーん、まあ、ちょっと現場で使うにはまずかなってくらいだけど。」
ティアナは、自分の銃を詳しく確かめながらブツブツ言っている。

そんな皆を見たなのはは、
「みんなもそろそろ実戦用のデヴァイスに切り替えるべきかな。」
と思ったようで、
「それじゃあみんな、着替えたらメカニックルームまで来てくれる。渡したいものがあるから。」
と言って、訓練場を後にした。

新人四人とタイキとクロスハートのデジモン達が隊舎の前に戻ってくると、隊舎の前に黒いスポーツカーが止まっているのが目に入った。乗っていたのは、
「あ、みんな。」
「訓練終わったんやね。」
はやてとフェイトだった。二人が言うには、フェイトは外回り、はやては聖王教会へ用があるため、二人で出かけるのだという。
「タイキ君は部隊での調子はどうや。」
ふとはやてがタイキにたずねた。
「みんな絶好調です。」
「いつ事件があってもいけるぜ！」
タイキ、シャウトモンの順番で答えた。
「それは良かった。でもあまり空回りせえへんようにな。」
はやては集まっていた皆にこう言うと、そのまま車で目的地へ向かっていった。

しばらくして、訓練用の丈夫で動きやすい服装から、六課の制服に着替えたフォワード四人が、タイキ達と一緒にメカニックルームへやって来た。そこには、クリスタル型の端末がついたペンダント、

白いカード型の端末、エリオとキャロが元々持っていた腕時計とブレスレットがあった。四人の新人に渡される新デヴァイスである。
「そうでーす！設計私、協力、なのは隊長にフェイト隊長、リィン曹長にレイジングハート、そしてワイズモン。」
自称六課のメカニックの「シャリオ・フィニーノ」通称シャーリが元気よく言っている。その後、
「後これ、調べさせてくれてありがとう。」
と言うと、タイキにクロスローダーを渡した。実は訓練が終わった後、はやて、フェイトの二人とわかれてからすぐに、シャーリーからクロスローダーを見せて欲しいと言われ、こうして今まで貸していたのだ。タイキ自身も、クロスローダーの仕組みについては気になっていたのだ。
「ほんとにこれ作った人すごいよ、中は精密機械と有機体で構成されていて、それが何を意味しているのかすら私たちじゃまるで分からない。」
すると、扉が開いてなのはとリィンフォース？が入ってきた。
「どうかなシャーリ？午後からの訓練で使える？」
「はい、遠隔操作でのコントロールも可能ですし、状況に合わせて微調整すれば。」
なのはの質問に、シャーリは即答した。そして、四機のデヴァイスの詳しい説明を始めようとしたとき、突如赤い明かりが点灯し警報が鳴った。
「これって、第一級警戒態勢！？」
新人四人は勿論、なのはやリィン、シャーリも驚いた。
報告によると、山岳地帯を走る貨物運搬用のリニアレールが、多数のガジェットに制圧されたのだという。
なので、なのは、リィン、スバル。ティアナ、エリオ、キャロ、そしてタイキ達はヘリコプターに乗って現場へ向かっていった。

「はやて、本当に大丈夫？」
事件発生の報告を聞いていそいそと帰り支度をするはやてに、黒い修道服姿の金髪の女性「カリム・グラシア」がたずねた。
「大丈夫や、カリムのおかげで今六課は好きなように動かせる。」
はやてはこう答えているが、それでも心配らしく、
「でも、最近は新型のガジェットも出てきているっていうけど…」
と、言っている。
「本当に大丈夫や、みんな強いし。」
それでもはやては笑顔でこう言った。カリムは呆れたのか安心したのかは分からないが、
「シャッハ、はやてを機動六課隊舎まで全速力で届けてあげて。」
通信で部下にはやてを送る準備をするように言った。

一方、外回りの用事で高速道路を車で走っていたフェイトは、連絡を受けた場所から一番近いパーキングエリアに来ていた。車を停め外に飛び出すと、
「これから現場に向かいます。飛行許可を。」
通信で現場まで空を飛んでいく許可を求めた。
「了解、飛行許可を与えます。」
通信で許可を取ると、ポケットから三角形の黄色いアクセサリーを取り出し、
「バルディッシュザンバー！セットアップ！！」
と叫んだ。すると、服装がいつもの六課の制服から、動きやすい黒い服の上に白いコートを身につけた服装に変わり、バルディッシュ本体は変形して斧のような形になった。
この姿になったフェイトは空へ飛び出し、それこそ稲妻のようなスピードで現場へ向かっていった。

外へ出ていた隊長二人が行動を開始した頃、ヘリで現場へ向かう新人達はというと、
「今回の任務は、リニアレール内のガジェット全てを逃亡なしで殲滅し、積まれてるロストロギア、レリックの回収ですよ。」
「いきなりのハードな任務かもしれないけど、訓練どうりやれば大丈夫だからね。」
同伴しているリィン、なのはの二人から任務の内容を聞いていた。
新人の中で、スバル、ティアナ、エリオの三人は割りと落ち着いていたが、キャロだけは違った。彼女は任務の内容に不安があったのではない、自分の力に不安があったのだ。
フェイトの保護児童である彼女は、自らの生まれた里に居場所が無かったのでこうしてフェイトに引き取られたのだ。その居場所が無かった理由が、自分の力が危険すぎるから、なのである。
彼女は召喚魔法の中でも特に珍しい竜召喚を行えるうえ、召喚できる竜の中でも特に強力な竜を二体召喚できるのだ。しかし、呼び出すのはともかくとして、肝心のコントロールが上手くいかないため、危険扱いされているのだ。
「どうしたシスター！調子が悪いのか？！」
スターモンズが心配して話かけた、その後、いつだったかに少しだけ聞いたキャロの昔の話を思い出したのか。
「大丈夫だシスター、シスターの魔法でみんなを護るんだ！！」
本人は励ましているつもりなのだろう、ピックモン達と一緒にこう言っている。
「そうだよ、僕やバリスタモンもいる。きっとできるよ。」
「ウム。」
それに続いてエリオ、バリスタモンも励ました。

「うん。」
緊張は抜けないが、それでも決心はついたらしく、キャロは少し力なく返事した。
タイキ、なのは、リィンの三人は、そんな新人達の様子を見て安心していると、
「東の方角より飛行型ガジェット数十機接近。」
現場の様子を遠くから見ているロングアーチスタッフから連絡が入った。
「それじゃあ、私とフェイト隊長で空をおさえるから、レリックの回収はみんなに任せるよ。」
なのはそう言い残すと、自分のデヴァイス「レイジングハート」と一緒に飛び出そうとしたが、
「あ、待って下さい。」
と、タイキにとめられた。タイキはクロスローダーを取りだすと、
「リロード！スパロウモン！！」
と叫んだ。すると、クロスローダーから光が飛び出し、光の中から両手に銃を持った黄色い飛行機型のデジモンが現れた。
「呼んだ？！タイキ。」
ここに来てようやく出番が回ってきたので、スパロウモンは嬉しそうにしている。
「スパロウモン、この人と一緒に空の敵をおさえていて欲しいんだ。」
タイキはスパロウモンに今回の任務について説明した。
「うん、分かった！！」
スパロウモンはこう言うと、早々に飛び出し上空の敵の群れに向かっていった。
「じゃあ行ってくるね。」
なのはもスパロウモンに続き、ヘリから飛び出した。
「レイジングハート、セットアップ！！」
なのはの手元にあった赤い球体のアクセサリーが光と同時になのは

がその光に包まれ、光がやむと今日の訓練で装備していたバリアジャケットの姿になった。
「お待たせ、スパロウモンだっけ？よろしくね。」
「そういうそっちは高町なのはだっけ？こっちもよろしくね。」
空で合流した二人は、互いに挨拶を交わした。
（この人、なんかネネに似ているな）
改めてなのはを見たスパロウモンはこう思った後、先行して敵の中に飛び込んでいった。
「ウイングエッジ！！」
スパロウモンは腕の良いパイロットの乗る戦闘機のような動きで敵を上手く誘導し、両翼に仕込んだ刃物でガジェットを切り裂いた。
「アクセルシューター！シュート！！」
なのはも、自分の周りに発生させたエネルギー弾で複数のガジェットを撃ち抜いた。
「なのは、お待たせ！」
フェイトも合流し、なのは、フェイト、スパロウモンによる空中制圧が始まった。

「よし、新人共！俺のヘリじゃ近づけるのはここまでだ。」
一方の新人達は、現場への降下ポイントに来ていた。現場へ向かうのは、スバル、シャウトモン、ティアナ、バリスタモン、エリオ、バリスタモン、キャロ、スターモンズ、そしてリィンフォース？である。タイキは任務が終わるまでヘリの中で後方支援に当たることになった。
「スターズ３、スバル・ナカジマ、シャウトモン。」
「スターズ４、ティアナ・ランスター、ドルルモン。」
「「行きます！！」」

最初にスターズ部隊の二人がヘリから降り、それに相棒のシャウトモン、ドルルモンが続いた。
「俺達ノ番ダ。」
スターズ部隊の後ろで待機していたエリオ、キャロの二人にバリスタモンが言った。
「いこうぜシスター、俺達やフリードと大活躍しようぜ！！」
スターモンズも元気良く言った。
「一緒に行こう。」
最後にエリオに声をかけられ、二人で手をつなぐと、
「ライトニング3、エリオ・モンディアル、バリスタモン。」
「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエ、スターモンズ。」
「「行きます！」」
現場へと降りていく新人四人は、同時に叫んだ。
「マッハキャリバー！」
「クロスミラージュ！」
「ストラーダ！」
「ケリュケリオン！」
「「「「セットアップ」」」」
そして、スバルは動きやすい短パンと半袖のジャケットに、右手にリボルバーナックルを装備した姿。ティアナは白と黒を基調とした服装に、両手に銃を装備した姿。エリオは赤い装備の上に白いコートを身に付け、槍を装備した姿。キャロはピンク色のドレスのようなゆったりとした服装に、甲に宝石のような物がついた手袋をはめた姿になった。
スターズ部隊は車両の進行方向から見て一番後ろの車両に着地し、シャウトモンは持ち前の身軽さで柔らかく着地し、ドルルモンは右側の岩壁をつたって降りてきた。その反対側にはライトニング部隊が着地し、バリスタモンは足のバーニアを使って着地し、スターモンズは持ち前の浮遊能力で降りてきた。
新人達が改めて自分達の身につけるバリアジャケットを見て、自分

達の隊長のバリアジャケットに似ているな、と思っていると、車両の内部からガジェットの砲撃が飛んできた。この砲撃が任務開始の合図となり、四人と四体は列車の中に突撃していった。
まずスバルとシャウトモンは、ティアナ達とは別ルートで問題の車両へ行く事になり。スバルは持ち前の格闘技、シャウトモンはマイクを振り回して大暴れしている。またティアナ、ドルルモン組のほうも、得意のヒットアンドアウェイ戦法で確実にガジェットを潰している。
そんな中、彼らに連絡が入った。
「ライトニング部隊、大型ガジェットと交戦。」

ライトニング部隊も、スターズ部隊同様着実にガジェットを潰しながら問題の車両を目指していたが、その問題の車両の扉の前にその大型ガジェットが頑張っていたのだ。
「ヘヴィスピーカー！！」
バリスタモンは腹部のスピーカーから強烈な音波を発射したが、ガジェットの重さに勝つ事が出来ずまるで効いていない。次にエリオが槍で貫こうと向かっていたが、今まさに槍が突き刺さろうという瞬間、突如エリオの槍の先端の魔力が四散してしまった。ガジェットが持つ特有の対魔法用の波長「アンチマギリングフィールド」略して「ＡＭＦ」の効果である。
ガジェットは持ち前の触手でエリオを掴むと、軽々と外へ投げ飛ばした。
「エリオ君！！」
「俺達がいくぜ！シスター！」
エリオを救出しようと手を伸ばしたキャロに、スターモンズは互いの手をつないで一本のロープのような物を形成すると、一番端のピックモンがエリオの手を取り、反対側のスターモンがキャロの手を

取った。しかし、エリオの基本の体重と一緒に、ガジェットに投げ落とされた時の勢いが付加され、耐え切れずにエリオ、キャロ、スターモンズは落ちていった。
落ちていきながらキャロは思った、私がみんなを護るんだ、と。
「フリード、一緒に活躍しよう。ちゃんとコントロールしてみせるから。」
キャロの元にフリードがかけつけた時、キャロとフリードは巨大な光に包まれ。光がやんだ瞬間、落ちていっているエリオとスターモンズを白い飛翔物が救出した。
「竜魂召喚、フリード・リヒ！！」
正体は、キャロがいつも連れている竜フリードだった。しかし今回の姿はいつもの鳥のような小さい姿では無く、畳三枚分はかるくある大きくて立派な翼を持つ逞しい竜の姿となっている。
「これが、フリードのちゃんとした姿。」
「うひょー！かっけえ！！」
この姿を初めてみたエリオとスターモンズは勿論驚いている。
「ウガガガガガガ！！！」
すると、頭の上から聞き覚えのある声がした。見ると、バリスタモンが敵ガジェットの触手に捕まって、今にも落とされそうになっている。
「あ、たいへん！」
「バリスタモンが！」
キャロとエリオがこう言った瞬間、触手の拘束から開放されたバリスタモンが落ちてきた。エリオとスターモンズがフリードの背中で受け止めてから、
「さあ、反撃だぜシスター！」
スターモンズの一言で再び現場に戻って行った。そして、再び件の敵と対峙した。
「キャロ、僕とバリスタモンに強化を！」
エリオは、たった今考え付いた作戦を実行する事にして、みなに内

容を耳打ちした。そして、
「フリード、ブラストフレア！！」
フリードが口から大量の炎を吐き出した。普通の相手ならこの一発で灰になるが、ガジェットは特殊な材質の金属で出来ているので並大抵の炎ではびくともしない。だが、大量の炎に遮られ、ガジェットのカメラは前が殆ど見えない。そこに突然、エリオが飛び込んできた。
「いくぞ！！」
エリオは強化された槍を突き刺すと、ガジェットのボディに大きな切り傷を入れた。
「今だ！バリスタモン！！」
「ホーンブレイカー！！」
エリオの考えた作戦は、まずフリードの炎で相手の目くらましを行い、相手の視界が制限された所でバリスタモンに投げてもらい高速で相手のそばに近づき、自分の技で傷を与えた後、バリスタモンでとどめをさす、というものなのだ。作戦は見事成功し、バリスタモンの硬い角はガジェットに付いていた切り傷に当たり、ガジェットは真っ二つに割れ爆発した。

「どうやら、これで任務は終わりみたいですね。」
リニアレールを止めるため運転室に向かっていったリィンは、無事にリニアレールを止めスバルたちと合流していた。スバルたちも、自分達が遭遇したガジェットを全て倒し、問題のブツである「レリック」を回収し、入れ物を抱えている。
この時は皆、これで任務完了と思っていた。

この任務の様子を見ていたのは何も、機動六課の援護スタッフだけではない。ミッドチルダのある場所で一人の男がこの様子をモニタで眺めていたのだ。
「しかしドクター、よろしいのですか？いきなりここまでの戦力をつぎ込んでしまって？」
その後ろでは、一人の女性がパネルを操作しており。作業の途中、女はドクターと呼んだ男に訊いた。
「彼らは仮にも一度世界を救ったんだ。これくらいどうという事もないはずだ。」
ドクターと呼ばれた男は、気味の悪い笑みを浮かべて答えた。

「あっちの方も済んだみたいだし、ここもそろそろ終わらせようか？」
新人達の邪魔をさせないため、空の敵を相手にしていたなのは、フェイト、スパロウモンはそろそろとどめにいこうと考えた。
「アクセルシューター！」
「ハーケンスラッシュ！」
「ランダムレーザー！」
三人はそれぞれの得意技を放ち、残るガジェットを全て打ち落とした。
「二人はどれくらい倒した？」
早速スパロウモンはなのは、フェイトにたずねた。
「四十機かな。」
「私も。」
「僕と同じだ。」
それぞれ四十機という結果だった。
早速新人達のもとへ向かおうとした三人、そして新人たちのもとに驚くべき連絡が届いた。

「巨大なエネルギーを持つ飛行編隊が近づいてきます！」
言われた方向を見ると、鳥やドラゴンのような姿の巨大な生き物がここへ向かって飛んできた。

第三話　機動六課初出動（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン
「今回のテーマはドルルモン。ドルルモンは獣型デジモン。必殺技は額のドリルを飛ばすドリルバスター、とてつもないドリルの回転で発生させた竜巻で吹き飛ばすドルルトルネード、ドリルに乗って回転しながら体当たりするドリルブレーダー。」

モニタモンA
「額のドリルは自分の毛で出来ているので、取れてもまた生えてきますな。」

モニタモンB
「ドリルの回転はミキサーやドライバーにも使えますな。」

モニタモンC
「今度うちのイス直してよ。」

カットマン
「日曜大工かよ！」

全員
「それじゃあまたね！」

次回予告
突如襲来した飛行デジモンの大艦隊。やつらと渡り合う為、ついにやつらが参戦する。
次回「逆転のシャウトモン×３ＧＭ」

第四話　逆転のシャウトモン×3ＧＭ

リニアレールがガジェットに制圧されたと連絡があり、現場へ出動し見事ガジェットの全機殲滅とレリックの回収を終えた機動六課の面々に、突如驚くべき報せが入った。
「現場へ向けて強大なエネルギー反応が向かっています。」
見ると、小さな翼が生えた竜、オウムのような姿だが両手が付いた鳥、赤い体で両手が武器になっているドラゴンが群れをなして飛んできた。極めつけは彼らの群れの中央にいる、とてつもなく巨大な竜である。
「あれは！エアドラモンにパロットモン、メガドラモンじゃ！中央の巨大なドラゴンはギガシードラモンじゃ！」
ヘリの中で様子を見ていたタイキのそばで声が響いた。いつのまにかリロードしていた「ジジモン」の声だった。
「でもどうして？他の三体はともかくギガシードラモンが活動可能範囲は地上と水中だけだったはずです。」
すると、タイキのクロスローダーの中から女性の声が響いた。しかし、今はその声の疑問に応じている暇は無い。突如、ギガシードラモンの腹部が開くと、中から丸い大型ガジェットが次々と出てきた。そして下で停車しているリニアレールめがけて降下していった。
空にいたなのは、フェイト、スパロウモンの三人は、突然の援軍を食い止めようとしたが、エアドラモン、パロットモン、メガドラモンの砲撃で牽制され身動きが取れなくなった。
「なあ、もっとヘリをリニアレールに近づけられないか？」
タイキは、ヘリの操縦桿を握るヴァイスにたずねた。
「無理っすよ、これでも危険地帯ギリギリを飛んでるんすから。」
しかし、肝心のヴァイスはこう答えた。
（仕方ない）
タイキはこう思うと、なのはや新人四人がやったように飛び降りた。

そして、空中でクロスローダーを掲げると、
「リロード！メデューサモン！！」
と、叫んだ。するとクロスローダーから光が迸り、全体を白で統一した装備を身に付け、背中から巨大な白い翼を生やした女性の姿をしたデジモンが飛び出した。
彼女はタイキを空中で捕まえると、そのまま着衣を乱さず華麗にリニアレールの上に着地した。
「ありがとう、メデューサモン。」
「いえいえー、またいつでも使って下さいね。」
タイキは彼女、メデューサモンに礼を述べ、メデューサモンはそれに答えた。そしてその声は、先ほどクロスローダーの中から響いたものだった。
その直後、タイキ達とフォワードメンバーの周りに、先ほどギガシードラモンから放出された大型のガジェットが多数降りてきた。
「おいおい、さすがにまずくねえか？」
シャウトモンにしては珍しく弱音のような事を言っている。それもそうだ、リニアレールの上は狭いので×３以降のデジクロスを使えないのだから。
「大丈夫ですよ。私一人でもこのガラクタ全部フルボッコに出来ますから。」
メデューサモンは皆にこう言い放った。清楚な見た目と凛々しい声からは想像できない物騒な言い方に、この場にいる皆は一様にこう思った。
（見た目は可愛いのに、すごくもったいない）
しかし、今は呑気な事を考えていられる場合ではないので、
「リロード！ベルゼブモン！ディアナモン！」
タイキは新しく二体のデジモンをリロードした。ベルゼブモンと一緒に出てきたのは、全身を輝く銀の忍装束で包んだ、女性の姿の神人型デジモンである。この「ディアナモン」そしてメデューサモンのクロスハート加入の経緯については、後日改めて明らかになりま

す。
「二人で上空の敵を牽制して、できれば三人を助けてここまで護衛してくれないか。」
「分かった！」
「はい！」
タイキから仕事の説明を受けた二人は、早速上空の敵へと向かっていった。そして、ベルゼブモンは銃をぶっ放しながら、ディアナモンは取り出した諸刃の大鎌を弓のように使い、敵の部隊を混乱させている所を見届けると、改めて周りを見た。
「ともかく、この状況をなんとかしよう。」
タイキのこの言葉で、皆はとりあえず背中合わせになって敵に対応する事にした。
「シャウトモン、バリスタモン、メデューサモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、デジクロス！！」
タイキはクロスローダーを掲げて力の限り叫んだ。
「シャウトモン×2！！」
「メデューサモンNP（ナイプリンセス）」
シャウトモンはバリスタモンと合体した姿になり、メデューサモンはナイトモン、ポーンチェスモンズとのデジクロスで純白の鎧とドレスを身につけた姿になった。
「いくぞみんな！！」
「応！！」
タイキの掛け声と共に皆はガジェットに向かっていった。
「アームバンカー！！」
「リボルバーナックル！！」
シャウトモン×2とスバルは渾身のパンチを繰り出すも、ガジェットの硬いボディの前には余り効いていないようだ。
「グングニル！！」
メデューサモンNPも、槍に変化させた剣で一体ずつ確実にガジェットを潰していくが、数が多いのいで埒が明かない。

空の方も、なんとかベルゼブモン達はなのは達と合流するも、敵の囲み撃ちに合い、ディアナモンが作り上げた幻影のおかげで護られているという芳しくない状況になっている。
（なんとかこいつらを手短になんとかしないと。）
タイキが周りのガジェットたちをみながらこう思うと、
「俺がいくぞタイキ。」
「そろそろ俺達の出番をよこせ。」
クロスローダーの中から声が響いた。タイキは思い出した、デジタルワールドからミッドチルダに来るさいに、奴らがついて来ていた事を、
「よし！行くぞ！」
タイキはクロスローダーを掲げると、思い切り叫んだ。
「リロード！グレイモン！メイルバードラモン！」
クロスローダーから光が発せられ、中からティラノサウルス型の黒いデジモンと、青い猛禽型の戦闘機のようなデジモンが現れた。
「いくぞ！グレイモン！！」
メイルバードラモンはガジェットを一体足で掴むと、グレイモンめがけて飛んでいった。
「ホーンストライク！！」
グレイモンは角を突き出してガジェットに突進し、ガジェットを一体角に突き刺しメイルバードラモンに向かっていき、メイルバードラモンが掴まえたガジェットとぶつけ合った。
「ああ、そうだ。」
グレイモンとメイルバードラモンの戦い方を見ながら、メデューサモンＮＰもいい作戦を思いついたようで。
「ドルルモン！スターモンズ！あれやるよ！！」
と呼びかけた。
「バインド・オブ・ゴルゴン！！」
メデューサモンの眼が怪しく光ると共に、複数のガジェットの動きが鈍り始めた。彼女の眼から発せられた光を受けた事で表面の材質

は勿論、触手の間接から内部の構造に至るまで、彼方此方が石のようになっているのだ。
「ドリルブレーダー！！」
「メテオスコール！！」
ドルルモンは、巨大化した尻尾のドリルで敵に突撃し、スターモンズはその反対側から大量のピックモンを投げつけた。
二つの技がぶつかり合った瞬間、石化ガジェットの表面がみるみるうちに剥がれていき、しだいに内部構造があらわになり始めた。
これが、メデューサモン考案の「対石化ガジェット用りんごの皮むき戦法」である。
「ティアナ、とどめをお願い。」
半分以上の外殻が無くなったところで、メデューサモンＮＰはティアナに言った。
「クロスファイヤーシュート！！」
ティアナは待ってましたと言わんばかりに両手の銃から数発の光弾を放ち、ガジェットの中枢を完璧に打ち抜いた。その間にもグレイモンとメイルバードラモンが大暴れして、リニアレールのガジェット第二陣は殲滅された。

一方空中では、これまで静観するに留まっていたギガシードラモンが動き出そうとしていた。
ギガシードラモンは、リニアレールの上に集まっている機動六課のフォワード達に狙いを定め、その途端、雲の子を散らしたように前に出ていたデジモン達がギガシードラモンの前から退いた。
「ギガシーデストロイヤー！！」
ギガシードラモンの放つ破壊光線が、リニアレールの上にタイキ達めがけて飛んでいった。
「やば、シール・ザ・アイギス！！」

いち早くこの動きにきずいたメデューサモンは、すぐにみなの前に出ると、どこからか取り出した光り輝く盾を掲げた。
メデューサモンの盾にギガシーデストロイヤーが当たり、衝撃で発生した埃が静まった時、
「仮にもタンクモン４０体の砲撃にも耐えた盾なんだけど。それなのに盾には罅が入って私が翼と腕を犠牲にしてようやくこれだけ……」
メデューサモンの取り出した盾は、輝きを失い罅だらけになっていた。そして盾を持っていた両腕は傷だらけになっており、衝撃から皆を護った翼は、半分以上の羽を失っていた。そして、後ろの六課メンバー達は、重症というほどではないが皆怪我をしていた。
「次の砲撃には耐えられないよ。高威力の砲撃で一気に殲滅した方がいい。まだ全然本気の威力は出てないからすぐに第二射が来る。」
メデューサモンは苦し紛れにタイキ達に告げた。そしてタイキは考えた。何を使えば有効か、と。
「スパロウモンもベルゼブモンも居ない。この状況で……」
辺りを見回した時、割と傷の浅いグレイモンとメイルバードラモンが眼に入った。
「閃いた！！」
タイキは一つ作戦を思いついた。

その頃、ディアナモンの幻影の中では、同じようにフェイトがある事を閃いていた。そして、閃いた途端に、
「なのは！今すぐディバインバスターを放てる？！」
と訊いた。
「え？まあやろうと思えば出来るよ。」
突然の事に驚いたなのはだったが、できない事でもないのでこう答えた。

「それから、えっと……？」
次にディアナモンを見て言葉につまった。お互いに名前を知らなかったのだ。
「ディアナモンです。」
ディアナモンはすぐにこう言った。
「ディアナモン、この場所だけ幻影を解除できる？」
フェイトはスパロウモンの向いている方向を指差して訊いた。
「出来ますよ。」
ディアナモンは即答した。
「それじゃあ、ディアナモンは私が合図したらその場所の幻影を解除して、そしたらそこになのはがディバインバスターを放って。あとはみんなスパロウモンにしがみ付いていればいいから。」
フェイトは、この場にいる皆にこう説明すると、スパロウモンにくっ付いた。
特にする事を言われなかったベルゼブモンも同じように空いた手でスパロウモンの翼を掴んだ。
「今だよ！」
フェイトの合図と共にディアナモンは、フェイトに言われた場所の幻影を解除した。敵の攻撃が入ってくる前に、
「ディバインバスター！！」
なのはが得意とする、桃色の魔力光線が放たれた。突然の攻撃に驚いたのか、空中のデジモン達は一瞬だけその光線の道筋からそれた。
「行って！スパロウモン！」
その途端、幻影全てが消えたと同時に、黒と黄色の混ざった光の矢がデジモン達の間通り去った。群れの中から飛び出したスパロウモンは、そのままリニアレールへと向かって飛んで行き、そのまま激突した。
「スパロウモン・ソニックフォーム、二度と使わないようにしよう。」
フェイトは、自分の切り札である「ソニックフォーム」を自らでは

なく、スパロウモンに装備したのだ。結果、スパロウモンのスピードは一時的に増したがブレーキが利かなくなり、みんなそろって激突したのだ。
突然の結果に呆れながらも、気にする必要のある要素がもう無い、と判断した工藤タイキは、
「みんな、今から黙って俺の指示に従ってくれるか？」
と、仲間のデジモン達に訊いた。
「俺はタイキに従うぜ！」
「勿論だ。」
と、シャウトモン×2とドルルモン、
「いいだろう。」
「お前はキリハが認めた男、従うのも吝かではない。」
と、メイルバードラモンとグレイモンが答えた。
皆の答えを聞いたタイキは、クロスローダーを掲げると、
「シャウトモン×2、ドルルモン、グレイモン、メイルバードラモン、デジクロス！！」
と、叫んだ。そして四体のデジモンが光に包まれ、その光が静まると、身体の大きさは完全体のフリードの五倍はあるだろう、巨大な炎の翼を持つ飛竜型デジモンが現れた。
「シャウトモン×3GM！！」
シャウトモン×3GMは、合体が完了すると同時に飛び上がり、上空のデジモンの群れに向かっていった。
「ブレスオブペルーン！！」
そして口から吐き出した破壊光線で、ギガシードラモンの周りにいる飛行デジモンを一体残らず吹き飛ばした。
「ブリリアンスダガー！！」
最後に残ったギガシードラモンは、炎の翼でバラバラに切り裂いた。

「ギガシードラモン部隊、全滅。」
モニタの前で件の現場を眺める男に、後ろでパネルを操作していた女は淡々とした口調で言った。
「やはり、ガジェット運搬用のデジモンでは相手にならなかったか。」
男は、残念そうな印象が持てない、むしろ嬉しそうな口調で言った。

「やったねティア！初任務無事に成功だよ。」
スバルはレリックの入った入れ物を抱えながら隣を歩くティアナに言った、しかしティアナは微妙な口調でスバルの言葉に答えた。
今回の事件が、ティアナの心に影を落とした事は、まだ誰も知らない。

第四話　逆転のシャウトモン×３ＧＭ（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「さて、今回紹介するデジモンは、今話初登場。俺の考えたオリジナルデジモン、メデューサモンです。」

モニタモンＡ
「我らでは詳しいデータは分からないので、説明をお願いします。」

カットマン
「メデューサモンは女性天使型デジモン、旧デジモンシリーズらしく説明すれば、彼女はウイルス種、世代は究極体だ。必殺技は相手を石化する目で相手を破壊する「バインド・オブ・ゴルゴン」携える剣「アロンダイト」で敵を切断する「スレイ・エレイン」また携える盾「アイギス」で攻撃を防御する「シール・ザ・アイギス」イメージＣＶは大原さやかさんだ。」

モニタモンＡ
「そこまで考えてあるんですか。ではどんなデジモンなのですか？」

カットマン
「基本は誰かの上に立つか、一人で行動する孤高のデジモンだ。たまに気まぐれで誰かに従う事もあるけど、飽きたらすぐに見限って居なくなるんだと。仲良くなれれば割といい奴なんだけど。」

モニタモンB
「扱いが大変ですな。」

モニタモンC
「ところでどうやってクロスハートに入ったの？」

カットマン
「……次回もお楽しみに。」

モニタモン達
「誤魔化したな。」

ブツッ……、ガサガサガサ（テレビの砂嵐の音）

次回予告
骨董品オークションの密輸品取締りと、ガジェット襲撃のさいの安全警護のため「ホテル・アグスタ」へやって来た機動六課の面々。
そんな彼らに、ガジェットと共に巨大な襲撃者が襲い掛かる。
次回「ホテル・アグスタ、古代竜の襲撃」

五話更新記念の回

ここは、とある管理外世界のとある場所、とある部屋の中。

カタカタカタ、

ここでは一人の男がパソコンの前でキーボードを叩いていた。やがて、その男は立ち上がって伸びをしながらこう言った。

???

「よっしゃ、これで更新したエピソードは五つ。息抜きに取っておいたバカデミーでも見ようっと。自分へのご褒美にアイスも用意してと……」

彼の名は、「超人カットマン」そう、言わずと知れた（多分殆ど知られてない）この小説の作者だ。彼が憩いの時間をすごそうとした瞬間、

???

「何調子こいてんだカットマン！！」

突如、赤い服を着たピンク色の髪の娘にぶっ飛ばされた。

超人カットマン

「って！お前は今度発売される魔法少女リリカルなのはA，Sの最新ゲームの主要登場人物の一人「キリエ・フローリアン」じゃねえか！！」

カットマンは驚きの余り説明的な台詞をかました。

超人カットマン
「んで？何しに来たの？」

カットマンは体勢を整えながらキリエに訊いた。

キリエ
「決まってるじゃない、この小説でいつ私に出番が来るか訊きに来たの。」

キリエはさも当然のように言い放った。

超人カットマン
「言っておくが、この小説は「ＳｔｒｉｋｅｒＳ」を原点にした小説だぞ。Ａ．ｓの特別編のゲストキャラクターのお前に出番がある訳ないじゃん。」

？？？
「では、私の出番も当然無しと。」

すると、どこからか赤い髪で青い服を着た娘が現れた。

超人カットマン
「今度はアミティエ・フローリアンかい。」

キリエの双子の姉、アミティエが現れた。

アミティエ
「ピンクの不肖の妹が迷惑をおかけしました。」

アミティエがカットマンにこう言うと、

キリエ
「それ以前に頭にこないの、私たちの出番無いんだよ。」

キリエはアミティエにこう言った。

アミティエ
「そりゃあ……猛烈に頭にくるよ！！」

何故か爆発したアミティエに、

超人カットマン
「はいはい、今度ミッドチルダ全域で放送されるアニメの先行配信ＰＶ見せてやるから機嫌直せ。」

カットマンはブルーレイディスクを取り出して言った。そして、プレイヤーにディスクを入れると、再生ボタンを押した。

これはＰＶ風今後の展開予告である

これは、絆の物語、
（ＢＧＭ　水樹奈々　Ｐｈａｎｔｏｍ　ｍｉｎｄｓ）

工藤タイキ「ここは……」
クロスハートが飛ばされたのは、時空の海の第一世界「ミッドチルダ」彼らはそこで機動六課の魔道士と出会う。
八神はやて「うちらがタイキ君がもとの世界に戻るのに協力する、

だからそれまでうちにいてな。」
スバル「私は、皆を守る為強くなりたい。」
ティアナ「証明するんだ、ランスターの弾丸はなんでも貫ける。」
エリオ&キャロ「僕達が護る／みんなの帰る場所を。」
絆と魔道が交錯し、新たな伝説が幕を開ける

巨大な黒い竜に、スターソードでは無くハンマーを装備して立ち向かうシャウトモン×５

トライデントアーム、ギガデストロイヤーでビースト型ガジェットを吹き飛ばすメタルグレイモン

空中からディバインバスターを放つなのは

ハーケンスラッシュと素早い動きでデジモン達の中を掻い潜るフェイト

スターソードを装備し謎の騎士と戦うシグナム

チームクロスハートのあるデジモンの技をまねて、容赦のない連続パンチを放つスバル

攻撃力を持つ幻影と背中合わせになって敵を迎え撃つティアナ

完全体フリードに乗って現場へ向かうエリオとキャロ

空から巨大な魔法を放とうと構えるはやて

上記の映像が順番に流れ、ＢＧＭが終わる

緊迫感のあるＢＧＭ
彼らの前に現れる謎の少年

少年Ａ「あなた達のやり方じゃ埒があきません。ここは俺に任せて下さい。」

少年Ｂ「（はやてに耳打ちしながら）本当はそちらの粗探しに来たんですよ。」

彼らの正体、目的は一体

少年Ｂ（街の路地裏にて）「これは、ろくな事は起きないな」
少年Ａ「まさか連中は、Ｄ５を企んでるんじゃ。」

カリム「新しく予言が更新されたわ、絆の将と魔王が手を結ぶ時、偽りの竜王の野望打ち砕かれる」

カリムの預言書に追加された、この文の意味は

八神はやて「いまここで、機動六課設立の本当の意味を話すな。」

機動六課設立の本当の意味とは

そして運命の日

???「さあ、一夜限りの宴を始めようか」

謎の人物のこの一言と同時に、山が割れて竜の姿をした怪物が姿を現す。

驚愕の色に染まる機動六課の面々の顔が映った後

工藤タイキ「デジクロス！！」

（アニメ第一話のような感じ）クロスローダーを掲げた工藤タイキの声が響く

デジモンクロスウォーズ　絆の将と魔道の戦士　始まります

アミティエ
「ちょっと！何よＰＶの中の謎の少年ＡとＢ、それなら私たちが出た方が遥かに読者に分かりやすいんじゃない！！」

カットマン
「確かにそうだが、お前らはまだ情報が少なすぎるんだよ。アミティエは運命の守護者でキリエは時の操手でお互いに争っている。そんな設定のお前らが協力して何かしていたりしたら文句言われるよ。」

キリエ
「つまりその二人は最終的には味方になるわけね。」

カットマン
「げ！お前ら謀ったな！」

アミティエ
「そっちが勝手に言ったんじゃん。」

カットマン
「まあいいや、とにかく次の話だが、これから読者の方々の質問を受け付けようと思うのだが。」

キリエ
「つまり？」

カットマン
「この小説の展開や登場人物、登場人物本人への質問を募集し、このコーナーで一つ一つ回答しようと思うのだよ。当然、後者の質問はあくまで小説本編に出ているキャラクター限定だけどね。」

アミティエ
「結局私たちが天下を取る事はないと。」

カットマン
「安心しろ、実は〇〇〇して×××する企画がついこないだ持ち上がったんだ。」

キリエ
「え？！じゃあいずれ私たちがジェネ……モガモガモガ！」

カットマン
「次の話だが、この小説内で人気投票を行うんだよ。」

アミティエ
「二次創作小説では恒例のイベントですね。」

カットマン

「一票を入れる方は、感想欄に投票するキャラクターの名前を書いて下さい。但し、投票が有効になるのは小説本編に登場したキャラクターのみになるので悪しからず。」

アミティエ
「とりあえずキリエは悪さをしないよう縛っておきましたから。」

カットマン
「そうか。じゃあアミティエ、何か適当にデジモンを言ってみてくれるか。」

アミティエ
「？じゃあデッカーグレイモンとか？」

カットマン
「そうそう、こうしてデジクロスしたデジモンに票を入れた場合、そのデジクロスを構成するデジモンにそれぞれ票が入る。例えばシャウトモン×４Ｂに票を入れた場合、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ベルゼブモンに票が一票ずつ入る。」

アミティエ
「票を入れたいデジモンが二体以上いた場合の裏技って訳ですね。」

カットマン
「そういう事、でもそろそろ時間切れだから今日はここまで。」

アミティエ
「それでは今後の展開をお楽しみ下さい。」

二人

「それじゃあまたね～♪」

キリエ

「モガモガモガ（縄を解け～！！）」

最後にキリエの届かぬ叫びが響いた第一回目であった

五話更新記念の回（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「気を取り直して始めよう、今回のテーマはスターモンズ。」

モニタモンA
「スターモンは突然変異型のデジモン、必殺技は連れ歩いているピックモン達を投げつけて攻撃するメテオスコール。」

カットマン
「スターモンズは一体のスターモンを中心に、数多くのピックモンが集まって構成されているチームなんだ。落語会のような厳しい修業と上下関係を乗り越えた強者が新生代のスターモンになれるんだ。」

モニタモンB
「ピックモンは基本スターモンには絶対服従ですな。」

モニタモンC
「こりゃ大変だ。」

全員
「次回もお楽しみに！」

第五話　ホテル・アグスタ　古代竜の襲撃

リニアレールの襲撃事件から数日が経過したある日、機動六課のメンバーはヘリに乗ってある場所へ向かっていた。
「今回の仕事場所はここ、ホテル・アグスタ。」
リィンが展開したモニタに、わりと綺麗な大きめの施設の映像が映し出された。
「ここで行われる骨董品オークションの人員警護と、違法売買の取り締まり、それが今回の任務。」
なのはが搭乗している面子に仕事の内容を説明した。
「それで、何故人員警護を行うかというと、出品される骨董品をレリックと勘違いしたガジェットが攻めてくるかもしれないからです。」
その後リィンが、説明に付けたしをした。
「それで、これがレリック収集の大本とされている人物。」
その後、フェイトの展開したモニタには、不細工な訳でも気障っぽく見えるわけでも無いが、見ていると何かと腹の立つ顔の男が映し出された。
「ジェイル・スカリエッティ、違法な研究によって広く指名手配されているの。最もこの捜査は私がするんだけど。」
「とりあえず、みんなも顔だけは覚えててくれな。」
ここで、タイキに抱かれているピンク色のデジモン「キュートモン」が、
「ねえシャマル先生、下においてある荷物はなにっキュ？」
と、シャマルにたずねた。
「ああ、これね。隊長三人のお仕事服。」
と、シャマルは答えた。

数分後、機動六課メンバーはホテル・アグスタに到着し、前日から現場ではっているヴィータ、シグナム両副隊長と合流した。そして隊長三人は、
「こんにちわ、機動六課です。」
シャマルの言うお仕事服を着て、ホテルの中でも選ばれた人しか入れないオークション会場とその周辺に入っていった。いつもの制服では無く三人共ドレス姿なので、なんの違和感も無く入る事ができた。

その頃、リィンとスバル、は何をしていたかと言うと、
「リィン曹長、何しているんですか？」
スバルは自分の頭の上でパネルを操作するリィンに訊ねた。
「お仕事半分、趣味半分、この間の出動についての業務日誌を付けてるですよ。」
と、リィンは答えた。
スバル自身も、あの事件の後小さい出動が数回あったので、現場の空気には慣れたようだった。

一方ティアナは、自分が所属する部隊について考えていた。
「今の六課の戦力は無敵どころか無茶苦茶すぎる、隊長三人は普通にSランク越えの魔道士で副隊長でもAAランクは普通。スバルは訓練校は主席で卒業の優等生だし、父親と姉は管理局の歴戦の勇者。エリオはあの歳ですでにBランク所持で、キャロはたださえ珍しい召喚魔法の中でも強力で珍しい竜召喚士。」
そして、極めつけは民間協力者の工藤タイキである。彼はクロスロ

ーダーと呼ばれる不思議な機械を使い、デジモンと呼ばれる下手な召喚獣よりも強力な生き物を操り、挙句の果てには合体させて一つの戦士を生み出す。人を牽きつける魅力があるのか、デジモン達は皆彼を慕っており、凶暴すぎる為使役不可能とされるグレイモンですら彼には従うそぶりを見せている。
また、彼本人には魔道士ランクＡＡに相当するだけの魔力を持っており、持ち前の的確な判断力を用いて魔道士になれば、あっという間に出世街道をまっしぐらに進んでいくだろう。
「やっぱり、この部隊で凡人なのは私だけ。」
今になって考えれば、自分だけがこれといって飛び出た才能や特技がない事を改めて実感した。
「でも関係ない、私はここで証明する。ランスターの弾丸は何でも貫ける。」
ティアナはクロスミラージュを見つめてこう思った。

一方、ホテルの中に入ったなのは、フェイト、はやてはというと。なのは、はやてはオークション会場のホールに、フェイトは外の廊下にいた。
「さすがに会場内の警備は厳重だね。」
ちらほらと客の入りだしたホールを見渡しながら、なのははやてに言った。
「これなら、大抵のアクシデントには普通に対応できそうやな。」
はやてもなのはと同じように周りを見渡したら、出来る事なら何も起こらないことを祈った。

そしてフェイトは、廊下を歩きながら怪しい人物が居ないか確認していた。
「オークション開始まで後どれくらい？」

「2時間と23分です。」
バルディッシュの答えを耳で聞きながら、フェイトは会場へと戻っていった。

一方、ホテルより数百メートル離れた森の中に、黒いコートを着た背の高い男と黒いローブを身につけた少女が居た。
「どうしたルーテシア？お前の探し物はここにはないのだろう。」
男はルーテシアと呼んだ少女に言った。
「でも、ドクターの探し物があそこにあるって。」
少女がこう言うと、彼女に連絡があった。
「ごきげんようルーテシア。ゼストやアギトも一緒かね。」
ルーテシアが開いたモニタに映ったのは、他でもないジェイル・スカリエッティだった。
「ごきげんようドクター、探し物？」
「ああ、先ほども話したがあの建物に私の探し物があるから、探して持ってきて欲しいんだ。」
挨拶もそこそこに、スカリエッティは単刀直入に話題に入った。
「いいよ。」
ルーテシアは即答した。
「ありがとうルーテシア、今度お茶とお菓子でも奢らせてくれ。」
スカリエッティがこう言うと、ルーテシアの手の甲に付いている宝石のような物が一瞬光った。
「君のアスクレピオーズに詳しいデータを送っといた。」
すると突然、
「お話中失礼します。」
新しいモニタが開いて、紫色の髪の女性が映し出された。
「ウーノか、どうした？」

思わぬ乱入者に、ルーテシアでは無くゼストが答えた。
「そちらに”彼”は来ていませんか？」
ウーノと呼ばれた女性は単刀直入にこう訊いた。
「すまないが見ていない。」
ゼストは即答した、
一方ルーテシアは、指に止まっている画鋲に羽が生えたような生き物に少し話しかけた後、
「私の虫達が探してくれるって。」
と、ウーノに言った。
「では、よろしくお願いします。」
ウーノはこう言うと、通信を切った。
「では、健闘を祈っているよ。ルーテシア。」
そに続き、スカリエッティも通信を終えた。
「行くのか？ルーテシア。」
ルーテシアが脱いだローブを預かりながら、ゼストは訊いた。
「ゼストやアギトはドクターの事を嫌ってるけど、私はドクターは嫌いじゃないから。」
そう言うと、ルーテシアの周りに小さい虫が大量に現れた。

そして、ゼストとルーテシアがいた場所から更に数百メートル離れた場所では、他よりも少し高い木の上に竜を模ったプロレスで使うようなマスクを身につけた少年が居た。
「折角だし、俺達も参加しよう。」
数百メートル遠くにて交わされた会話を傍受していた彼がこう言うと、
「なら私が行くぞ。」
彼の腰から女性の声が響いた。
「いいのか、お前が行ったらホテルと一緒に探し物はおろかこの辺

り一体が消し飛ぶだろ。」
その後すぐに、馬鹿にするような声が響いた。
「五月蝿い！ちゃんと手加減できるわ！それに、少し戦場を引っ掻き回すだけで良いんじゃろ。」
女性の声がこう反駁すると、
「そういう事、それじゃあよろしく。」
少年はこう言って、腰につけていた水色の機械を掲げた。その瞬間、途轍もない生き物が姿を現した。

「それで、これをこうするの。」
「うーん、全然わからないっキュ。」
屋上で警備にあたっていたシャマルとキュートモンは、余りにやる事がないのであや取りをしていた。
箒をつくり、次に星をつくろうとしたら、
「敵反応?！今も増大中。」
自分の指輪型デヴァイス「クラールヴィント」に反応があった。
「みんな！敵よ！」
シャマルはデヴァイスを通して副隊長とフォワードに連絡した、

「スターズ3、了解！！」
「スターズ4、了解！！」
警備をしていたスバルとティアナは、連絡が来るなりすぐさま現場へと向かっていった。

一方、青い大型犬「ザフィーラ」と地下駐車場を警備していたエリ

オとキャロにも連絡が来た。
「では我が先行して厄介な敵を潰す。お前達は入り口前を固めるんだ。そこが護りの要となる。」
ザフィーラは、二人に的確な指示を出した。しかし、
「え、ザフィーラって喋れたの？！」
突然の襲撃より自分が喋れることのほうが余程驚きだったようだった。

副隊長が先行していってから少したった所で、驚くべき事が起こった。突如入り口を固めるフォワード四人とタイキ達の前に魔方陣が現れ、そこからガジェットが大量に現れた。
「空間転送？！サーチャー作動させます。」
ロングアーチスタッフからの連絡が入りタイキも行動を開始した。
「リロード！モニタモン！」
すると、クロスローダーの中から緑色の忍装束を身に付け、背中にリュックを背負った、頭部がテレビの形をした忍者型デジモンが現れた。
「このあたりに魔道士が居るみたいだから探して姿を写してきてくれ。」
「分かりましたな。」
タイキの指示を受けた三人のモニタモンは、ガジェットのレーダーの隙をくぐり抜けて森の中へ入っていった。
「さて、いっちょやるか！」
シャウトモンがいつものようにマイクを構えながら言ったとき、現場指揮を担当しているシャマルから連絡が入った。
「更に巨大な敵反応が接近中！」
その報告が来た瞬間、体長は以前見たギガシードラモンには劣るも、それでもなお巨大と言っても過言ではない黒い竜型のデジモンが現

れた。
「な、何あれ。」
「フリードどころかボルテールより大きいかも。」
突然の巨大な襲撃者に、ティアナとキャロは驚きを隠せなかった。
しかし、
「「か、か、か、格好いい！！」」
スバルとエリオは目をキラキラさせて喜んでいた。
「あ、あの、エリオ君。なんで喜んでるの。」
と、キャロが訊くと、
「だってドラゴンだよ、ドラゴン！この世にドラゴンとメカに興奮しない男子は居ないよ。」
エリオは若干興奮気味だった。
「な、あれはインペリアルドラモンじゃ！」
しかし、クロスローダーから出てきたジジモンは驚きを通り越して驚愕といった様子だった。
「インペリアルドラモン？」
みんな聞いたことの無い名前を聞いたので、そろってジジモンに聞いた。
「昔デジタルワールドに存在した究極の古代竜型デジモンじゃ。生き残りがおったのか！」
タイキは突然の強敵に対応する為、クロスローダーを掲げると、
「リロード！クロスハート！！」
リリモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、リボルモン、ベルゼブモン、ディアナモン、メデューサモン、そしてバグラモンとの最終決戦の後仲間になった、ブルーメラモン、ルーチェモン、ピノッキモン、スパーダモンを出現させた。その後、
「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、スパロウモン、デジクロス！！」
再びクロスローダーを掲げ叫んだ、
「シャウトモン×5！！」

シャウトモン×3以降の一本角の生えた頭部から、三日月形の角が生えたトゲトゲした頭部に変わり、左腕にスパロウモンの胴体、背中にスパロウモンの翼がついたデジモンが現れた。
「×5、上空で奴を牽制してくれ！」
「応よ！！」
タイキの指示と同時に、シャウトモン×5は空へ上がりインペリアルドラモンと交戦を開始した。

「フラウカノン！！」
「ジャスティスブリッド！！」
「グランドクロス！！」
一方地上では、フォワード四人とクロスハートのデジモンで守りを固めていた。リリモン、リボルモン、ルーチェモンの放った光弾がガジェットへ飛んでいき、敵を打ち抜くかと思ったら、ガジェットは紙一重で攻撃をかわした。
「え？いきなりどうしたの？」
「どうやら、自動操縦から手動操縦に変わったようですぞ！」
リリモンの驚きに、ナイトモンが答えた。
そんな中、後ろで援護に徹していたティアナは、
（そんな事は関係ない）
と考え、一度に大量のカートリッジを消費し、自分の周りに弾丸のカーテンを展開した。
「？！無茶よティアナ！一度にそんな量を放つなんて。」
現場の指揮をしていたシャマルは、突然のティアナの行動に驚き、ティアナに声をかけたが、肝心のティアナはそれを聞かず、全ての弾丸をガジェットに放った。
飛んでいった弾丸は、ガジェットに次々と命中していったが、たっ

た一発だが先行して敵に当たっていたスバルめがけて飛んでいった。突然の事にスバルは驚いた、自分の元にめがけて弾が飛んでくるのだから。シャマルの連絡でフォワードの戦いぶりを見に来たヴィータが全速力で向かうもとても間に合わない。もう駄目だ、と思った瞬間、タイキは、

「デジメモリ！スレイプモン！オーディンズブレス発動！！」

クロスローダーに、赤い鎧を装備した馬の姿をした騎士の絵が書いてあるメモリを突き刺した。すると、スバルの目の前に絵に書かれた騎士が現れ、左手に装備された盾で飛んできた弾丸を防ぎ、更に発生した冷気でガジェット全てを凍りつかせ身動きを封じた。

「気候すら操る聖盾ニフルヘイム、弾丸一発を防ぐには贅沢すぎるな。」

一方、上空でシャウトモン×5と戦っていたインペリアルドラモンは、地上での戦いを眺めながら言った。

「おいおい、戦っている最中に余所見かよ！！」

シャウトモン×5は、スターソードでインペリアルドラモンを斬りつけながら言った。

「まあ、今の私の力は全力のおよそ3％だ、これくらいの余裕はある。」

対するインペリアルドラモンは、巨大な爪で剣を受け止めながら答えた。

「冗談だろ！インパクトレーザー！！」

「ポジトロンレーザー！！」

シャウトモン×5は、持ち前のスピードで距離を取り、左腕に装備された銃からレーザーを発射するも、インペリアルドラモンは背中の砲台から発射されたレーザーでかき消された。

「メガデス！！」
続いて、インペリアルドラモンは口から暗黒物質の含まれた火炎を吐き出した。炎に飲み込まれたシャウトモン×５はそのまま墜落し、タイキ達の元に落ちてきた。
「×５？！」
タイキは落ちてきたシャウトモン×５を見た後、上空のインペリアルドラモンを見た。奴は攻撃しようとしてはいるが、何かを気にしているのか上空を旋回し、牽制と様子見に徹している。
（ひょっとして）
と、タイキは思うと、
「ディアナモン、地下駐車場を見に行ってくれるか。こっそりと。」
と、ディアナモンに耳打ちした。ディアナモンは、わかりましたと手振りで合図し、そのままこっそり地下駐車場へ向かっていった。
その後、上空のインペリアルドラモンを見て、
（×５Ｂじゃ奴の不意を突くことはできない。×５のスピードを損なわず一撃の威力を上げるには…）
と考え、あたりを見回した。そして、ヴィータがガジェットをハンマー型デヴァイス「クラーフアイゼン」でぶん殴っている所と、その隣で「ブリッドハンマー」を放つピノッキモンが目に入った。
「これだ！！」
と、タイキは叫ぶと、クロスローダーを掲げて、
「シャウトモン×５、ピノッキモン、デジクロス！！」
と、叫んだ。すると、シャウトモン×５とピノッキモンが合体し、背中の翼が×の字型に変わり、スターソードがピノッキモンのハンマーを取り込んで変形した武器「スターハンマー」を装備したシャウトモン×５が現れた。
「クロスアップ！シャウトモン×５！！」
そして再び、インペリアルドラモンへ向かっていった。
「ポジトロンレー…！！」
インペリアルドラモンは背中の砲台から発射するレーザーで迎え撃

とうとしたが、スピードアップしたシャウトモン×5の攻撃をくらい未遂で終わってしまった。
「いくぜ！ネオメテオバスターアタック！！」
インペリアルドラモンへの攻撃の後、素早くさらに高い場所まで飛んだシャウトモン×5は、ハンマーを掲げ急降下を開始した。そのまま背中に突っ込み、インペリアルドラモンの巨体を地面に叩きつけた。
「やったか？」
発生した砂煙が晴れた時、インペリアルドラモンは姿を消していた。
「何？！いねえ！！」
「恐れをなして逃げちゃったんでしょうか？」
ヴィータ、キャロの両名はあたりを見回しながら言った。
「いや、目的がすんだから撤退したんだろう。奴の狙いはどう考えても俺たちの気を引くことにあった。」
「え？」
タイキの分析には、皆が驚いた。

その頃、警備が手薄になった地下駐車場では、人間の大人と同じくらいの大きさの生き物が、トラックから荷物を小脇に抱えて出てきた。足元にはこれまで警備をしていたが、その生き物に倒されたのだろう人間が数人いた。
早速生き物は荷物を持ってこの場から去ろうとした。しかし、
「動かないで、動いたら粉々にするよ。」
突如背後から発生した冷気に動きを止められてしまった。ディアナモンが現れたのだ。
「逃げたいのならご自由にどうぞ。でもそれは置いて行ってもらうよ。」

二人の間に緊張感が走ったその時、
「クラクラクラ！！」
どこからかクラゲのような白い生き物が飛んできてディアナモンに張り付いた。
「あ、何なのよコイツ。え？、ちょっと待ってそこはダメ！！」
クラゲのような生き物が何をしたのかは不明だが、とにかく謎の生き物はディアナモンから逃げ出した。

「うん、とりあえず襲撃者の殲滅には成功したみたいだね。」
「そうやな、私らの出番は無かったな。」
会場内のなのはとはやては、外の部下からの報告を見ながら言った。
すると、舞台の上の演台に司会者が現れ、
「それでは、オークション開催に当たりまして、鑑定にあたって頂く考古学者の先生に挨拶を頂きたいたいと思います。ユーノ・スクライア先生です。」
件のオークションも、襲撃者が居なくなったところで始まった。

その頃、会場からしばらく離れた場所では、
「どうだった？」
竜のマスクを被った少年は、水色の機械に語りかけた。
「とりあえず、例のブツはちゃんと回収できたようです。途中妨害に入った者を妨害した時、俺の仲間が数体けがをしましたが、まあそれくらいです。」
水色の機械からは、報告をするような台詞が響いた。

「そう。」
少年はこう言った後、ホテル・アグスタの方角を向いて言った。
「工藤タイキか、もっと面白くなるといいな。」

第五話　ホテル・アグスタ　古代竜の襲撃（後書き）

カットマン
「カットマンと！！」

モニタモンズ
「モニタモンズの！！」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

モニタモンズ
「さて、今回のテーマはキュートモン。」

カットマン
「キュートモンは大きい耳を持ち、耳当てが特徴のデジモンだ。得意技は手で触れた部分の傷を瞬く間に治療する「キズナオール」とてつもない音程の歌で敵を攻撃する「ハイパーソニックウェーブ」だ。」

モニタモンA
「案外いたずら好きな性格で、時々いたずらのため人前に出てくるんですな。」

モニタモンB
「それより、シャマル先生とはどんな関係になるんですかな。」

全員
「確かに～？」

全員
「それじゃあまたね。」

次回予告
失敗をおかし、すっかり調子が落ちたティアナ。ドルルモンは彼女をどう見るのか。
次回「ティアナの失敗、ドルルモンの過去」

第六話　ティアナの失敗、ドルルモンの過去

「よーし、それはあっちへ持ってけ！」
ここは、一騒動あった後、無事にオークションを終えたホテル・アグスタ。機動六課の面々は、事後処理活動をしていた。
工藤タイキも積極的に作業に参加している。ふとそこへ、
「なあタイキ、ドルルモンを見てないか？」
リボルモンが現れタイキに訊ねた。
「ティアナと一緒にいるはずだけど…見てないのか？」
「それが、ティアナのところにも行ってみたけど、いなかったんだ。」
こう答えたリボルモンに、今度はタイキが、
「ところで、ティアナ本人はどうしてた？」
と、訊いた。彼にしてみれば今一番気になる事である。いわゆる「ほっとけない」である。
「うーん、負のオーラで覆われているみたいで近寄れなかった。」
リボルモンの答えを聞いたタイキは思った。レイクゾーンの二の舞のような事態にならなければいいが、と。

「うーん、ありませんね。」
背中に白い羽をたくさん持った天使型デジモン「ルーチェモン」は、あたりを見回しながら言った。彼は今、謎の襲撃者である「インペリアルドラモン」の痕跡を探しているのだ。
「お、これは。」

突然、一緒に同じことをしていた「ワイズモン」が声をあげた。彼の目線の先には、大きいわけではないが、金色の塊が落ちていた。
「間違えない、これはインペリアルドラモンの爪の欠片だ。」
「じっくりしらべる価値がありますね。」
二人は、サンプルを慎重に回収しながら言った。
「何か見つかったの？」
ふとフェイトが話しかけてきた。
「ああフェイトさん。重要なサンプルを調べたいんで、今度実験室を借りたいんですけど。」
これは良かったとばかりにルーチェモンは言った。
「うん分かった。今度私からシャーリに掛け合ってみるよ。」
フェイトは、ワイズモンが持っている「インペリアルドラモンの爪の欠片」を見ると、ほぼ即答と言えるタイミングで答えた。
「……ところで、あそこにいる彼は？」
今まで黙っていたワイズモンだったが、なのはと仲良さそうに会話する薄い金髪の青年を見てフェイトに訊いた。きっと自分と同じニオイがするのであろう。
「ああ、彼はユーノ・スクライア。考古学者で私たちの十年来の友人、そしてなのはの魔法の先生。」
フェイトは淡々と説明した。
「やはりな、彼とは一度いろいろ話したいものだ。」
フェイトの説明を聞いたワイズモンはこう呟いた。この時、フェイトには二人が仲良く話す構図と一緒に、フェレットとなったユーノを解剖しようとするワイズモンの構図が浮かんだのは言うまでもない。
「それにしても、なのはさんの先生にしては若すぎませんか。」
ルーチェモンは先生と言われ、英雄の息子に勉強と格闘技を教えた麺類爺や、かつては世界最強と謳われたエロ仙人のような人物を連想したのだろう。フェイトにこう聞いた。
「なのはが魔法に関わるようになったのが9歳の時だから、同い年

とはいえユーノの方が経験は豊富だったから。」
とフェイトが言うと、
「なるほど、今の二人の関係は友達以上恋人未満といったところか。」
ワイズモンが遠目に観察しながら言った。おそらく何らかの方法で二人の顔の体温や、心拍数を調べたのだろう。
「そうなんだけど二人ともまるで進展しないんだよね。二人とも仕事中毒だから。なのははうちの部隊で副隊長兼教導官だし、ユーノは無限書庫の司書長だから。」
フェイトがこう言った時、
「無限書庫ってなんですか？」
ルーチェモンが食いついた、
「いろんな次元世界の本を集めた図書館のような場所のことで…」
フェイトがここまで言った時、
「何！！この世界にはそんなに素晴らしい場所が存在するのか！！！！」
今度は目をキラキラと輝かせたワイズモンが食いついた、
「うん、今度連れて行ってあげてもいいけど……」
フェイトは半ばひいた状態で二人に言った、ルーチェモンとワイズモンは本がたくさんある書庫の様子を思い思いに連想していたからである。

この事件の後、しばらくは事件は起こらず、機動六課の面々は日々訓練漬けの生活に戻った。ある日、変化が訪れた。ティアナ一人が皆と離れ、夜中に一人で特訓をするようになったのだ。

「あんまり無理するなよ、明日の活動に差し支えるぞ。」
みかねたドルルモンは、彼女に声をかけた。
「分かってる、でもこれくらいしないと間に合わないの、凡人だから。」
ティアナは、元々強いあなたには分からないでしょう、とも言った。
対してドルルモンは、
「そんな事はねえよ、俺なんてタイキやシャウトモンがいなけりゃ何もできねえよ。」
と言った。そして、
「強くなるのはいいが、半端な力を持ったところでどう努力しようとその力は恐怖の対象にしかならない。」
こう言い残してその場を立ち去った。その後、偶然寮の入口でスバルと出会った為、思い切って訊いてみた。ティアナが強くなりたがる理由をしらないか、と。
「うーん、もしかしてあれかなぁ。」
スバルは、心当たりがある、とドルルモンに言って。ある事件について話した。

数年前、執務官を目指して努力を続ける一人の魔道士がいた。名前は「ティーダ・ランスター」といい、ティアナという幼い妹がいた。彼はある日、とある事件の犯人を捕まえようとしたが、あと一歩のところで犯人の攻撃を受け、それが致命傷となり殉職した。犯人はその後、彼との戦闘で疲労困憊となりグロッキー状態になっている所を別の管理局員に逮捕されたらしい。
しかしティーダの上司はティーダが犯人を捕まえられなかった事が不満だったようで、ティーダの最後の仕事の結果と彼の死の事を、不名誉なうえ無意味だった、と評したのだった。

「たぶん、兄の死が無意味ではないと証明したいからこそ、ああして無茶してるんじゃないかな。」

一通り話し終えたスバルはこう言って話をしめた。ドルルモンは少し考えてから、
「無茶を言うようで悪いが、明日も朝早くからあいつは自主練を開始すると思う。この時はお前も参加してくれないか。」
と、スバルに頼んだ。これに対しスバルは、
「うんいいよ、元からそのつもりだったし。」
と、ドルルモンに言った。そして、
「そういえばドルルモンって元々はタイキ達の敵だったんでしょう。なんで今は味方になっているの？」
と、訊いた。さっき答えたんだからお相子でしょう、とも言っている。
「さあな、しいて言えば面倒くさくなったのかな。仲間を大事にしようとしない軍にいるのがさ。」
ドルルモンは、かつて自分がバグラ軍を抜けるきっかけとなった戦場での出来事を思い出して、こう言うと、
「ティアナも仲間の本当の存在理由に気づいてもらえればいいが。」
と言って、タイキの部屋に向かっていった。

そしてその頃、肝心のティアナはと言うと、長い練習の中で体力に限界が来始めた。胃の中身をリバースしなかったのはほぼ奇跡であった。
（証明するんだ、兄さんの魔法は無意味なものじゃないと）
それでもなお動くのは、心に秘めた決意によるものだろう。再び立って練習を再開しようとした時、近くの窓ガラスに映った自分の顔が歪み始め、ティアナの良く知る人物の顔になった。それは自分の兄、ティーダ・ランスターの顔だった。

「兄さん、なんで？」
ティアナは驚きを隠せないようだった。対してティーダは、
「何、妹は元気かなと思って化けて出てきてみたんだ。」
と、冗談を交えながら言った。その後、
「ところで、調子はどうだ。」
と、ティアナに訊いた。
「ううん全然、まだまだ兄さんには及ばないよ。この間は失敗までやっちゃったし。」
ティアナの返答にティーダは、
「いいかティアナ、僕たちみたいな部下の失敗には二つのものがあるんだ。」
真面目な顔で言った。
「一つは正真正銘の自分の失敗、二つ目は上司の責任転嫁の皺寄せ。後者は割と多いけど、前者は予想以上にまれだったりするのさ。でもまあ、今する話でもないか。」
そしてその後、
「お前だって凡人なんかじゃない。それを嫉妬して分かろうとしない相手には、力ずくででも見せつければいいんだ。」
と言った。すると、
「そう、私は凡人じゃない。力ずくでも分からせる……」
ティアナは意識が朦朧とするのを感じた。一瞬だけ何かが入ってくる感じがしたのが最後だった。

「そう、お前は凡人じゃない、力ずくで分からせてやれ。」
ここはミッドチルダのとある場所。ここでは一人の女が鏡に向けて呟いていた。
「いい子ねティアナ、私が合図を出すまで普段どおりにしていなさ

い。」
そして、鏡に映った自分の顔を見ながらほくそ笑んだ。
「レイクゾーンのあの女の子より使えそうな子ね。しばらく自由にさせておくとするか。」

そして翌日、早起きしたティアナとスバルは早速特訓を開始した。
日頃の訓練もさることながら、自主練では手数を増やす練習をしたり、熱心に研究を重ねた。当然困難にぶち当たる事もあったが、そこはスバル、エリオ、キャロ、タイキ達がサポートし、着実に皆は繋がりを深めていったはずだった。
そして、問題の日となった。

「さて、今日は2対1で模擬戦をするよ。」
一通りの訓練の後、なのはが皆に言った。
「最初はスターズ、ライトニングはその間ヴィータ副隊長と見学だよ。」
なのはにこう言われ、スターズはバリアジャケットを装備し、ライトニング部隊の二人はヴィータ、タイキ達とホログラムのビルの屋上に上った。
「ええ、模擬戦もう始まってるの？」
すると、フェイトが慌てながらやってきた。本人いわく、自分が模擬戦を担当しようと思ってきたらしい。
「最近のなのはの訓練密度濃いからな。夜遅くまで新人どもの訓練の映像見て分析も行ってるし。」

ヴィータがこう言うと、
「いつも見てくれてるんですね。」
エリオも隣で言った。
「本当にそうかな？あいつが何を目指して指導を行っているのかしっかり新人に伝わっていないなら、まだまだあいつの指導は不完全だがな。」
しかし、ドルルモンはこう言っている。ヴィータは言い返そうとしたが、模擬戦が始まったので、そこに注目した。
スバルはいつも通り、気合で真っ直ぐなのはに突っ込んでいった。
しかしティアナは、速いと言えば速いが味方まで危なくなるような弾道の弾を沢山放っている。
「ティアナの奴どうしたんだ？」
ヴィータは早くも気が付いた、
「スバルを囮に使ってる。」
なのは本人も気が付いているだろうが、あまり気にしていないのか、それとも含むところがあるのか。模擬戦を続行している。そして、
「防御を抜いてバリアジャケットを切り裂く、一撃必殺！！」
なのはの不意を突く形で、刃のエネルギーを放出した銃を振り下ろした。
「レイジングハート、モードリリース。」
なのはは静かにこう言うと、素手でスバルの拳とティアナの刃を受け止めた。
「ねえ、私の教導ってそんなに間違ってる？」
二人にこう言うなのはの口調は、静かだが槍のように突き刺さるものだった。ティアナは言われた瞬間にその場を離れると、
「私は！何も失いたくないから！強くなりたいんです！！」
力の限り叫び、なのはめがけて大量の弾を発射した。
「頭…冷やそうか…」
なのははこう言うと、大量の弾丸と共に一発のエネルギー波をティアナに打ち込んだ。

威力を加減し、なおかつバリアジャケットで守られているとはいえ、これだけの一撃を打ち込まれたからには普通は無傷では済まない。しかし、ティアナは無傷で立っていた。一人の和装束の女に守られて。

「あらあら、せっかく見に来たのにその光景が仲間割れのところなんてね。」

現れたのは、旧バグラ帝国軍の三元士、色欲を司る魔王型デジモン「リリスモン」だった。

第六話　ティアナの失敗、ドルルモンの過去（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「今回のテーマはスパロウモン。スパロウモンは飛行機のような姿をした鳥型デジモン。必殺技は、所持した銃を乱発する「ランダムレーザー」翼に仕込んだ刀で相手を斬る「ウィングエッジ」高速で体当たりする「クラッシュムーブ」だ。」

モニタモンA
「飛んでいるときの動きを見れば、その時の調子はおろか、その時の機嫌まで分かる実に単純なデジモンですな。」

モニタモンB
「となると、やたらとアクロバットな飛び方をしていると、間違えなく浮かれてるいう事ですな。」

モニタモンC
「おやつあげたら曲芸するかな。」

カットマン

「それはともかく、スパロウモンが「ランダムレーザー」を撃つときに使う二丁の銃は「サナオリア」と言って、かのベルゼブモンが使う銃「ベレンヘーナ」を作った人が作ったんだよ。」

全員
「それじゃあまたね！！」

次回予告
突如機動六課を襲撃したリリスモン。ティアナを人質に組織を壊滅をたくらむリリスモンは、真に王たる人物についてタイキ達に言う。タイキはリリスモンの脅威から皆を守るため、全戦力を叩きこむ。

次回「リリスモンＶＳ機動六課＆クロスハート」

第七話　リリスモンＶＳ機動六課＆ａｍｐ；クロスハート

「あらあら、せっかく来たのに仲間割れの最中なんてね。」
突如現れたリリスモンは、静かな声で言った。
「リリスモンだと？！！」
「なんであいつが？」
クロスハートの面々は一様に驚いている。
「あの人だれ？タイキの知り合い？」
スバルが訊いた、
「あいつはかつてデジタルワールドに覇を唱えようとしていたバグラ軍三元士の一人リリスモンだ。」
スバルの問いに、いっしょに模擬戦を見学していたピノッキモンが答えた。
「久しぶりだねぇ、工藤タイキ。」
リリスモンはタイキの方を向いて言った。
「何のようだ、リリスモン？」
タイキはリリスモンに訊いた。
「ふふ、作戦行動よ。機動六課の戦力と顔ぶれを確かめて来いと命令をもらったの。」
と、リリスモンが言うと、
「しかしご苦労なもんだな。もういないバグラモンのためにまだ世界征服しようとしてるのかよ！」
とシャウトモンが言った。
「バグラモン？まさか、私はそんな紛い物の王に仕えるつもりはないわ。私が今仕えているのは真に王たる王、確か竜王だったかしら。」
シャウトモンの問いに、リリスモンはこう言った。
（真に王たる王？竜王？）
タイキはリリスモンの一言が気になったが、本人のいう事をそのま

ま解釈すれば、少なくとも味方としてここに来たわけではない、と考えたので。
「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ベルゼブモン、デジクロス！！」
と、クロスローダを掲げて叫んだ。
「シャウトモン×４Ｂ！！」
クロスローダーの光がデジモンたちを包み、光が弾けると、シャウトモン×４に黒い足が追加された、ケンタウロスのような姿の合成型デジモンが現れた。
これだけでは終わらない、
「メデューサモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、デジクロス！！ピノッキモン、リボルモン、ブルーメラモン、デジクロス！！グレイモン、メイルバードラモン、デジクロス！！」
次々とデジモンをリロードし、次々とデジクロスさせた。
「メデューサモンＮＰ（ナイヴリンセス）！！」
「ピノッキモンＲＭ（リボルバーメリケン）！！」
「メタルグレイモン！！」
デジモン達を包む光が次々と消え、クロスハートの戦力が現れた。
「おいおい、いくらなんでも私一人にこの戦力は大袈裟なんじゃないかい？」
リリスモンは、味方から見れば壮観とも言える光景に文句を言ったが、
「どのみち変わらないか、こちらには人質がいるからねえ。」
と言って、傍にいたティアナの首筋に自分の爪をあてがった。
「って、ただ首筋に爪を当ててるだけじゃねえか。」
ヴィータは、いざという時のためにバリアジャケットを身に着けながらリリスモンに言った。しかし、
「ううん、あれが爪というだけでもう、それこそクラナガンと同じ表面積がある隕石が落ちてきた並みに大変なのよ。」
メデューサモンＮＰは、それこそ今の比喩と同じ状況に立ち会った

観測者となったようにヴィータに言った。
「それに今のままじゃティアナの救出もできねえ。あいつが動けないと何ともならねえ。」
シャウトモン×４Ｂも困ったように言った。

「そこまでよ！！」
その時、どこからか聞いたことのある声が聞こえてきた。見ると、模擬戦を見学していたメンバーのいたビルの屋上に、バリアジャケットを身に着けたティアナが現れた。
「ええ！！」
「ティアナ？！なんで？！」
この様子を見た機動六課、クロスハートの面々は驚いた。それはもちろんリリスモンも同じである、
（なにあの子？本物はここにいるはず…）
リリスモンが、ほんの一瞬ではあるが自分の手元のティアナから目を放した。その瞬間、銀に光る矢のような何かが、リリスモンの手からティアナを救出した。
「とりあえず成功みたいですね。」
ティアナの救い主は、どんな環境に置かれても過剰着衣なんじゃないかと思われる分厚い防寒着の重ね着を脱いだ。そこから現れたのディアナモンであった。
「うまくいきましたな！！」
今までティアナが立っていた場所には、ふつうのモニタモンより少し大柄で、黒い装束を着たモニタモンが現れた。
「そうか！！だからディアナモンは「ハイビジョンモニタモン」を貸してくれ、って言ったのか！」

タイキは、以前ディアナモンがハイビジョンモニタモンを借りていった事を思い出した。ディアナモンはこんな事態になった時のために、自分の幻を見せる能力で作り上げたティアナの幻をハイビジョンモニタモンに録画させ、いざこの事態になった今、ハイビジョンモニタモンに幻ティアナを幻影という形で再生してもらい、自分が決死の救出を行ったのだ。

「でも、なんであんな厚着？無い方が動きやすいんじゃ？」

スバルが疑問を口にすると、

「よく見ていろ、その理由が今からわかる。」

と、メタルグレイモンが言った。

すると、ディアナモンが脱ぎ捨てた数多くの防寒着がドロドロと溶け始め、最終的には消えてしまった。

「ええぇ！！」

「腐って溶けちゃった？！！」

見ていた機動六課のメンバーは一様に驚いた。

「あれがリリスモンの必殺武器「ナザルネイル」触れた物質という物質を腐らせる効果があるというのは聞いたことあったけど、見たのは初めてだな。」

機動六課の面々に、どこからか現れたスパロウモンが説明した。

「そんな事より、スパロウモン！！」

ティアナを安全地帯に連れていったディアナモンの合図をもらい、

「ディアナモン、スパロウモン、デジクロス！！」

タイキはこの戦いで使う最後のデジクロスを行った。

「ディアナモンＤＳ（ダブルイバー）！！」

銀の忍装束から、金に近い色合いの軽い鎧を身に着け、クレイモア風の双剣を帯びたディアナモンが現れた。

さらにハイビジョンモニタモンとルーチェモンも戦線に加わり、リリスモンと向かいあった。

「しかし容赦の無い布陣だねぇ。でもまあいいか。」

リリスモンは構えを取って攻撃に備え、クロスハートとリリスモン

の機動六課を混ぜた因縁の対決が始まった。

最初に行動を起こしたのはルーチェモンだった。
「ディバインフィート！！」
ルーチェモンは自身の魔力を開放し、仲間たちの移動力、攻撃力を高めた。
「アクセルシューター！シュート！」
「ハーケンセイバー！！」
すぐさま、なのはとフェイトが同時に得意技を放った。
「ふん、そんな技が効くわけ…」
しかしリリスモンは、普通の存在なら回避不可能、防御でもなお難しい攻撃を余裕で退けた。だがこれだけでは終わらない。
「フリード！ブラストフレア！！」
キャロの指示を受けたフリードが、リリスモンに炎を浴びせた。不意を突かれ、リリスモンの動きが止まった一瞬のすきに、
「我が求めるは焔、機械の竜に炎の加護を。」
得意の強化魔法をメタルグレイモンにかけた。
「お願いします！」
キャロの合図とともに、
「メガフレイム！！」
メタルグレイモンは、口から鉄をも溶かす熱量を発する炎を大量に吐き出した。彼が普段戦う相手の場合、この一撃だけで終わるところだ。しかし相手はリリスモン、炎に包まれてもピンピンしていた。
「くそ！アイツは化け物かよ！！」
ヴィータは叫んだ、
「そりゃそうよ、でも本気の彼女はその化け物よりも恐ろしいよ。」

次に飛び出したのは、メデューサモンＰＮだった。
「スレイ・エレイン！！」
メデューサモンＰＮは、どこからか取り出した超巨大な剣をリリスモンに振り下ろした。しかし、リリスモンは剣を軽々と受け止め、メデューサモンＰＮを軽々とぶん投げた。
「雑魚が何人こようと結果は同じだよ。」
リリスモンがこう言った瞬間である、
「それはどうかな、だったら俺を捕まえてみな！！」
背後からシャウトモン×４Ｂの声が響いた。リリスモンは気が付くや否や攻撃を打ち込んだが、シャウトモン×４Ｂは一瞬で消えてしまった。
「残念だったな、俺はここだ。」
その後、現れたかと思うと消え、消えたと思うと現れを繰り返し、さながらモグラ叩き状態になった時。
「スターズブレイドセレストライク！！」
突如シャウトモン×４Ｂが、腰の二丁の銃を乱射しながらリリスモンに正面から突っ込んできた。普通に考えればどう考えても無謀な行いである。しかしシャウトモン×４Ｂは、リリスモンのナザルネイルが触れるか触れないか、ほんの一瞬の間にリリスモンの前から姿を消した。
「またか。」
リリスモンはこう呟いて周りを見回し、ハイビジョンモニタモンの姿を捉えた。
「そうか、これまでのシャウトモン×４Ｂはあいつの作った幻影。」
リリスモンがこう分析した瞬間、
「俺はここだ！！」
背後から本物のシャウトモン×４Ｂが現れた。
「何！？今度は本物？！」
リリスモンはうまく相手の動きに反応し、大振りに振られたスターソードを後ろに跳びながら受け、衝撃を和らげると同時に相手との

距離を取った。
「よし、最後は私！！」
距離を取ったリリスモンの前にディアナモンＤＳが現れた。大振りの双剣を二振りとも振り上げリリスモンを斬りつけようとする。リリスモンはナザルネイルを応戦しようとしたが、
「なんちゃって？」
突然ディアナモンは剣を降ろした。見ていた者は一様に驚いたが、その理由がすぐに分かった。彼女は自分の足に、スターソードが変形することで構成されるピックモンズのデジクロス「ピックワイヤー」を括りつけていたのだ。シャウトモン×４Ｂとメタルグレイモンが引くことで、ディアナモンはその場を離れ皆の元に戻っていった。
結果リリスモンの爪は空をかすめる結果に終わった。
「いくぞスバル！ヴィータ！」
「はい！！」
「応！！」
リリスモンの隙を突き、ピノッキモンＲＭ、スバル、ヴィータが突っ込んできた。ピノッキモンＲＭとスバルは渾身のパンチで、ヴィータはハンマーでリリスモンを殴り飛ばした。
「今だみんな！！」
タイキが叫ぶと同時に、
「ディバインバスター！！」
なのはは得意の高威力砲撃魔法を、
「ギガデストロイヤー！！」
メタルグレイモンは背中の翼と主砲からの破壊光線を、
「サンダーレイジ！！」
フェイトは自分のデヴァイスが発生させた雷を、
「バーストショット！！」
ピノッキモンは両手のリボルバーからの銃弾乱射を、
「フリード！ブラストフレア！！」

キャロはフリードの吐き出す渾身の火炎を、
「ブリザードブラスター！！」
ディアナモンＤＳは周りを凍りつかせる振動を発する斬撃を、
「行きますヴィータさん！グランドクロス！！」
「応よ！！」
「「連技！惑星直列！！」」
ルーチェモンとヴィータは、ルーチェモンの得意技「グランドクロス」を自身のハンマーで加速を付けて飛ばし、
「メデューサモン！ストラーダを使って下さい！！」
「はい！！グングニル！！」
メデューサモンＰＮは、エリオから借りたストラーダをグングニルに変形させて投げつけ、
「スバル殿！行きますな、雷電閃！！」
「うん！ディバインバスター！！」
ハイビジョンモニタモンは自身の得意技「雷電閃」を、スバルのディバインバスターに乗せて撃ち、
「×４Ｂフルファイア！！」
最後にシャウトモン×４Ｂが、頭部のバルカン砲、両腰の銃、カオスフレア、スリービクトライズの複合攻撃を放った。
皆の放った飛び道具は、全弾リリスモンの倒れているだろう場所に着弾した。普通ならばどんな存在であっても肉片一つ残らない、容赦ない殲滅砲撃だったが、肝心のリリスモンは立ち上がった。そして、
「傷？…私の顔に傷を？…」
自身の顔に傷が付いた事を知ったリリスモンは、
「皆殺しぃ！！！！！！！！」
と叫んで、途轍もない殺気を放った。そして、
足は両生類、体は昆虫、顔は獣の化け物へと変身した。特徴的なのは目と口で、目は顔中にびっしりと付いており、口は顔全体と同じくらい巨大だった。

「えぇえーー！！！！」
「大きくなっちゃった？！！」
「ってゆうか、姿自体変わってない。」
機動六課の面々は、突然のリリスモンの変化に驚いた。
「なるほど、あの時アイツも復活して、その時にあの姿になる事が出来るようになったのか。」
ベルゼブモンは冷静に相手を観察している。
「っていうか、何か生ゴミみたいなニオイが充満してないか。」
ピノッキモンＲＭは特徴的な長い鼻をつまみながら言った。因みにこの時、機動六課の隊舎の周囲二キロの範囲で、物を食べたり飲んだりした多くの人間が腹痛を訴えたとかないとか。
「生ゴミのようなニオイはある意味摂取物に反応する猛毒ですね。普通に呼吸で吸う分には問題ありません。」
ディアナモンＤＳは、大きく息をしながら魔獣リリスモンの生ゴミ臭について分析した。
「っていうより、早くやつをなんとかしないと、六課の隊舎はおろか、クラナガン一体がメチャクチャになるぞ！！」
シャウトモン×４Ｂの一言で、クロスハート、機動六課の面々は再び攻撃の態勢に入った。

一方、肝心のリリスモンは、
「あらやだ、私ったらまたいつの間にか爆発してた？でもまあいいいか、厄介な敵を始末できる事だし。」

と、魔獣化した肉体の中で考えていた。
そして、再び相手が自分に攻撃を加えようとしている所を見ると、
「ふうん、この姿になった私と戦おうというの？」
と考えて口を開いた。

機動六課、クロスハートの面々が再び先ほどの攻撃と同じ攻撃を放とうとした時である。魔獣リリスモンが口を開き、そこから黒い煙のような物が大量に出てきた。
「ぐえぇぇ、臭え！！」
流れてきた気体のあまりの異臭に、皆は一様に鼻をつまみ、挙句の果てにはニオイが目に染みて涙を流すものもでも現れた。
「かすかに腐卵臭がしますから、恐らく硫黄の成分を含む気体かと。」
今にも意識が飛びそうになる悪臭の中で、ディアナモンは必至に分析を行った。
「そんな事より、これをなんとかしないと！！」
フェイトは息苦しそうにディアナモンに言った。
その時、
「硫黄の成分があるなら燃えるよね。」
フェイト、なのはは知らないが、他のメンバーが良く知る声が響いてきた。
「メガデス！！」
次に声が聞こえた時、機動六課勢のいた場所に巨大な爆風が発生した。爆風が収まってから、奇跡的に無事だった皆が空を見ると、黒を基調とした体に赤い翼をもつ巨大な竜「インペリアルドラモン」がいた。

「っておい！！あのガスを燃やすなら最初に何か言え！！！！」
ヴィータが空に向けて叫んだ時、インペリアルドラモンの背中から二つの影が降りてきた。
一つは、黒い甲冑のような装備を身に着け、両手に剣を携えた武人のような姿の竜。二つ目は、その竜の背中を持っている、全身を青い鎧で固め、背中に金色の翼を十枚持つ天使のような姿をしていた。
二人が地上に降りると、真っ先にタイキの元に行き、
「君が工藤タイキ殿だね。」
と、青い鎧を身に着けた天使が言った。
「私の名はセラフィモン、そして彼はガイオウモンだ。訳があって理由は語れないが、君たちに加勢しよう。」
「うぉおおお！！ぞんぶんに暴れてやるぜ！！！！」
セラフィモンの言葉に続いて、剣を振り上げながらガイオウモンは叫んだ。
「んな！前は敵として出てきた奴の仲間をこの場だけ信じろって言うのかよ！」
彼らの言葉に、ヴィータは敵意を丸出しにして言った。それに対し、二人は静かに頷いただけだった。
「分かった、よろしく頼む。」
タイキは少し考えたが、二人に言った。
「っておい！！」
ヴィータはタイキの判断に面食らったが、
「そりゃ確かに、今は足に手は代えられない状態だけど。」
と、言った。
（いや、それを言うなら、背に腹は代えられない、だろ）
今この場にいる皆、クロスハートや機動六課の面々はもちろん、リリスモンやセラフィモン達もこう思った。
「！！ともかく、奴に対抗するため、まずシャウトモンを×４の状態にして、私たちとメデューサモン、ディアナモンをデジクロスさせてくれ。」

セラフィモンに気を取り直して作戦の説明を受けたので、
「クロスオープン！シャウトモン×４Ｂを×４にして。
言われた通り、シャウトモン×４、メデューサモンＰＮ、ディアナモンＤＳ、セラフィモン、ガイオウモン、デジクロス！！」
と叫んだ。
クロスローダの光の中から現れたのは、シャウトモン×５の翼の無いボディに純白の白い翼が六枚装備され、手にはガイオウモンの剣を取り込んだ形状に変化したスターソードを持った合成型デジモンが現れた。
「シャウトモン×５ＪＭ（ジャッジメントモード）！！」
シャウトモン×５ＪＭは飛び立つと、魔獣リリスモンに向かっていった。
「ふん、何がデジクロスしようと無駄だよ！！ダストプロミネンス！！」
魔獣リリスモンは、迎撃のためにとても臭い炎を吐き出した。しかし、
「エクセリオンバスター！！」
「バーストショット！！」
「ギガデストロイヤー！！」
なのは、ピノッキモンＲＭ、メタルグレイモンの攻撃で阻止された。
「行くぜ、アロー・オブ・セブンズフィール！！」
至近距離でシャウトモン×５ＪＭは、スターソードを弓の形状に変化させ、特殊な形状の矢を七本発射した。
飛んで行った矢は全発リリスモンに命中し、当たった個所が氷始めたり燃え始めたり、乾燥し始めたりした。
「なるほど、七つの星の特徴的な環境を命中した時に発生させる矢か。」
インペリアルドラモンの背中の上にいる、竜のマスクを被った少年はこう分析した。見ている間にも、どんどん戦況は変化していった。

「これでとどめだ！ガイアリアクター・デッドエンド！！」
シャウトモン×５ＪＭは、天まで届くんじゃないかと思えるほどの巨大な炎を発生させた剣を振り上げ、リリスモンの体を真っ二つに斬った。
「くっ！ま、まさか！！」
リリスモンは思いもしなかった結果に驚き、何故だあ！！、と叫びながら消えていった。

「うーん、やはり素晴らしい。」
ミッドチルダのとある場所にて、リリスモンのやられる場面を見ながら男は言った。
「でも勿体ないですねぇ。結構強い戦力だったんですが。」
隣で同じようにモニタを眺めながら、白いコートを羽織った女が言った。
「あのまま”彼ら”を介入させずに済ませば、厄介な連中を一網打尽にできたのに。」
しかし男は、
「そうはいかない、彼らはこれから始める劇の大事な役者だからね。」
と、モニタを眺めながら言った。

「はあ、なんとか撃退できたな。」

セラフィモン、ガイオウモンがインペリアルドラモンと一緒に去っていくところを見届けながらタイキは言った。
「またあんな奴が攻めてきたらどうなることか。」
エリオもフラフラの状態で言った。
「でもそれより気になるのが、あいつだよ。」
ドルルモンはこう言って、ある方向を見た。そこには、先ほどからずっと気を失ったままの状態のティアナが言った。

第七話　リリスモンＶＳ機動六課＆ａｍｐ；クロスハート（後書き）

カットマン
「カットマンと！」

モニタモンズ
「モニタモンズの！」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「今回のテーマはベルゼブモン。ベルゼブモンはベレンヘーナという銃を装備している魔王型デジモン、必殺技は相手の願いをかなえる代償に相手の自由を奪う「ダークネスクロウ」神速とも言われるスピードでベレンヘーナを撃つ「デス・ザ・キャノン」だ。」

モニタモンＡ
「多くを語らず誰にも群れない孤高のデジモンですな。」

モニタモンＢ
「友達はいるのかな。」

カットマン
「まあ、友達はいなくても、いつでも動ける部下はいるんじゃないか。仮にも魔”王”なんだし。」

モニタモンＣ
「今度調べてみよう。」

全員
「それじゃあまたね。」

次回予告
ひたすらに強くなりたいと望むティアナ。その姿にかつての自分や、その後の好敵手の影を重ねたなのは、タイキ、ドルルモンは、ティアナに自分の経験を語って聞かせる。
次回「強さとは、仲間とは」

第八話　強さとは、仲間とは

ティアナが目覚めたのは、リリスモンによる機動六課襲撃からしばらく立ってからだった。
「あ、起きたっキュ。」
ティアナの傍にいたキュートモンは、シャマルを連れて戻ってきた。
「キュートモンの治療術はとても優秀だから体にダメージは無いと思うけど、痛いところとかはある？」
シャマルはティアナに着替えを渡しながら言った。
ティアナは着替えを受け取った後、ふと時計を見て驚いた。午後八時をとっくにこえているのだ。外を見ると、日は落ちて暗くなっている。
「きっと疲れがたまってたんだっキュ、電源を切ったみたいに静かに寝てたっキュ。」
キュートモンは、的確とも微妙ともいえる比喩を言った。

一方、かつてデジタルワールドで行っていた死闘当然の激しい戦いを終えたタイキは、隊舎の屋上で空を見ていた。
「浮かない顔ですね。そんなに心配な事でも？」
すると、メデューサモンが話しかけてきた。
「ああメデューサモン。リリスモンについて考えていたんだ。」
タイキはこう答え、
「今回はリリスモンだったし、途中で援軍が来たからよかったけど。もしこれがタクティモンやダークナイトモン、デスジェネラルのような実力者だったらどうなっていたことか。」
と言った。つまりは、リリスモンが蘇り、こうして自分たちを襲撃

したとなると、自分たちがかつて相手した実力派デジモン達と、再び干戈をまじえる事になるのだろうと。この事を危惧しているのだ。
「大丈夫ですよ。そんな奴らを相手にしてきて、結局最後は私たちが勝ってるではありませんか。一度勝ったのならまた勝てます。」
メデューサモンは先ほどの戦いの疲れを感じさせない元気な口調で言った。その後、
「でも、今最も気になるのはそれじゃ無いんでしょう。」
口調を変えてタイキに言った。
「ああ、ティアナの事なんだ。なんだか似てるんだ、お前の前の主人に。」
タイキがメデューサモンにこう言った途端。隊舎のあちこちに警報が鳴り響いた。
「一体なにがあったんだ。」
「困りましたね、みんな先ほど決死の死闘を繰り広げたというのに。」
しばらくすると、ヴァイスが駆け足で屋上にやってきた。タイキが何かあったのかと訊ねると、
「ここの近くの海の上で何十機かのガジェットが現れたんすよ。まあここに居ればいずれみんなやって来ますよ。」
ヴァイスはいそいそとヘリコプターに乗り込みながら言った。

しばらくして、なのは達隊長陣とスバル達フォワード隊もやって来た。新人たちの中にはティアナもいた。
「とりあえず今回は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長で出動するから。みんなはシグナム副隊長と待機していて。」
部隊長との作戦相談で決まった事を簡潔に伝えたなのはは、ティアナを見ると、

「今日はティアナは出動から外れておこうか？」
と言った。
「そうだな、あの大喧噪の中で今の今まで眠り続けられたんだ。今日は万全じゃないだろ。」
ヴィータは、昼間のリリスモンとの激闘の最中、ティアナはずっと起きることが無かった事を思い出して言った。
一方のティアナは、握っていた拳をワナワナ震わせながら。
「言う事聞かないうえに、簡単に敵に操られるような奴は、使えないって事ですか。」
と言った。
「自分で言いながら分からない？まったくその通りだよ。」
なのはがこう言うと、
「訓練はちゃんと受けてますし、現場の命令だってちゃんと聞いてます！！それでも強くなる努力はしちゃいけないんですか！！」
ティアナはなのはに言った。この様子を見ているメデューサモンにしては、どちらかと言えば不愉快な後継だった。
（まったくあいつと同じだ）
こう思った瞬間、メデューサモンはティアナの前に出て、彼女の頬を思いっきり引っ叩いていた。普通の人間が行ったのなら、普通に驚く程度ですんだ一撃だったが、デジモンの力で叩いた為、ティアナの体は遠くのフェンスの近くまで飛んで行った。そして無意識のうちに、
「子供かあんたは！！少し自分の思い通りにならない程度でギャーギャー騒ぎやがって！！そんなに気に入らないきゃ出ていきなさいよ！！」
と、ティアナを怒鳴りつけていた。
「……」
初めて見たメデューサモンの本気の怒声に、機動六課の面々は勿論の事、何よりクロスハートの面々が驚いた。
しかし、そうしていても仕方ないので。

「ティアナ、何か塞ぎ込んでるみたいだけど、戻ったらゆっくり話そう！」
三人の隊長は出動することにした。なのはは必至にティアナに伝えようとしていたが、
「早く行こうぜ、メデューサモンに怒鳴られるぞ！」
ヴィータに引っ張られてしぶしぶ現場に向かっていった。
その様子を見届けてから、
「……まあ、なんだ、とりあえずロビーに戻るぞ。」
気を取り直したようにシグナムが皆に言った。
「それよりティアナは……無事みたいだな。」
ティアナのふっ飛ばされた方向を見て、ドルルモンは言った。
「まったく、あの子は”アイツ”より少しは利口だと思ったけど。」
メデューサモンがこう言うと、
「メデューサモン、確かに命令を聞くのは大事だし勝手な行動もよくない事を分かってる。でも、強くなりたいならそれ相応の努力をしてもいいと思います！！」
スバルがメデューサモンにこう言った。
「そうね、あなたのいう事に間違えは無い。でも断言してあげる。あの子、今のままじゃどう努力したって強くはならない。」
と、メデューサモンは言い放った。
「ティアナには強くなる要素が欠けている。っていう事だろ。」
メデューサモンにタイキが言った。そして、参考にしてもらうため、かつての自分のライバルについて話した。

青沼キリハ、彼はデジタルワールドに名を轟かせた通称「青の軍」ブルーフレアのジェネラルである。グレイモンを始めとする強力な竜型デジモンを数多く揃え、その力はタイキ達「クロスハート」は勿論、バグラ軍にも匹敵すると言われた勇壮な軍を率いていた。
ある日、キャニオンランドと呼ばれる場所をバグラ軍の魔の手から解放しようとした時の事である。あと一歩の所まで敵のボスを追い

詰めたキリハだったが、敵の策略により敵に捕まり、その後共に戦っていたタイキ達と離反し彼らに敵意を示した。
しかし、そんな中での仲間の説得、中でも「デッカードラモン」の決死の説得により、本当に強い者は強い仲間を持つ、という事実に気づくことが出来たことを。

「それじゃあ、本当に強い奴が強い仲間を持つ理由はわかる？」
タイキが話し終えたタイミングを見計らって、メデューサモンは皆に訊いた。声色も普段通りに戻っている。
「……」
皆は考え込んでいた。
「正解はね、言葉通りの意味で強い者は存在しないからよ。」
メデューサモンは皆に言った。
「たとえどんなに強力な戦士でも、必ず何か弱点があるものなの。その弱点を補える者がいることで初めて文字通り強力な戦士になれるの。本当に必要なのは強力な力ではなく、皆と協力すること。」
それを聞きながらシグナムは思った。何の共通点の無い烏合の衆と言っても過言ではないタイキ達が精強な軍として戦える理由はそこにあったのかと、

一方、なのは、フェイト、ヴィータがガジェットと交戦している海上のすぐ近くには、前にホテル・アグスタにやって来た黒いローブの少女、ルーテシアがいた。
「ごきげんよう、ルーテシア。」
するとモニタが開いて、ホテル・アグスタの時にもルーテシアに話を持ってきた男の顔が映し出された。

「ごきげんよう、ドクター。向こうの海でドクターの玩具が飛んでるけど何かあったの？」
と、ルーテシアに訊ねられると、
「残念ながら今日はレリックは関係ないんだ。これから花火が見れることになるからね。」
ドクターと呼ばれた男はこう答えた。そして、
「そうだ、近くに”彼”がいたら、今後は勝手な行動は極力慎んでくれ、と叱っておいてくれないか。」
と、ルーテシアに頼んだ。
「うん、いいよドクター。」
ルーテシアは二つ返事で了承し、モニタを閉じた。
「なにやら海が騒がしいけど、何かあったの。」
すると、ルーテシアの背後に龍を模ったマスクを被った少年が現れた。普通なら不審者扱いされるが、ルーテシアは彼の事を知っているらしく。
「ドクターが、勝手な行動は極力慎んでくれ、と叱っておいてくれだって。」
と言った。
「そうなんだ、それじゃあ甘んじて叱られようかな。」
少年はそう言いながらルーテシアの立っている防波堤の上に腰かけた。

一方、機動六課の隊舎では、ティアナは海を眺めながら考えていた。
結局私は兄の汚名を雪いで何をしたいのか、と、
「どうした考え事か？」

ドルルモンが話しかけてきた。
「うん、兄さんの汚名を雪いだ後何をしようかな、って。」
ティアナはこう言うと、
「そういえば、ドルルモンは何をきっかけにタイキ達の仲間になったの？」
しばらく前から気になっていた事を訊いてみた。以前も聞いたがあいまいにしか答えてくれなかったのだ。
「そうだな、あれは……」
ドルルモンは昔を思い出しながら語り始めた、

かつて自分は、先祖代々戦士の一族の元に生を受けた。そこで、常日頃から技を磨き、体を鍛えながら過ごしていた。その時、いつもこう考えた、
なんで自分たちは強くなるんだろう、と、
ある時、里を飛び出した彼は、当時デジタルワールドに覇を唱えようとしていたバグラ軍に入り、所属している三元士の中でも最強と謳われた「タクティモン」の部隊に入った。
そこで彼は一族の元で培った技を使って様々な戦場で大活躍し、あっという間にタクティモンの片腕とまで言われるようになり、「死神の風」の名で恐れられるようになった。
しかしある戦場で、彼は幼い兵士で構成された部隊の指揮をして戦っていた時、突然タクティモンに本陣まで呼び出され、本陣についた途端、４０体ものタンクモンが一斉に戦場に対して砲撃を開始し、自分の指揮していた部隊もろとも敵の主力部隊を殲滅した。
作戦的には何も間違えは無かったはずなのだが、なぜか彼には認められない結果になった。
そして後日、違う戦場で同じように犠牲になることになった部隊を独断で脱出させ、次いで自分も行方をくらました。
その後、親を探して旅をしていたキュートモンと出会い、彼と一緒に行動しているうちにタイキ達と出会ったのだ。

「実際一族の連中は分かっていたのさ。何かを犠牲にして得た強さは、敵を倒せても何かを守ることはできないと。滑稽な話だろ、俺は誇らしげに戦いながら、結局は戦うごとに一族の誇りに泥を塗っていたんだ。」
ドルルモンは、自分の思い出話を聞いているティアナに、
「なのはが戻ってきたらしっかり話をしておくんだ。あいつの思いを聞いてみろ。」
と言ってその場を後にした。

しばらくして、出動より戻ってきたなのはが現れた。
「あ、なのはさん。」
ティアナが気づくと同時に、なのはは彼女の横に座った。
「浮かない顔だけど、私がいない間にしっかり絞られた？」
と、なのはに訊かれたティアナは、
「はい、みんないろいろな経験を経て強くなっていったんだと。」
と、答えた。
「そう、じゃあ私の話も聞いてみる？」
なのははこう言って、かつての自分について語り始めた。

かつての自分は、魔法を知らないのは勿論の事、そもそも戦う事自体ありえない普通の子供だった。それでも、ある時助けたフェレットと、自分が普通より魔力が強かった、それがきっかけで魔法と出会い、プレシア事件、闇の書事件と、多くの実戦を繰り返し続けた。ある時、仲間たちと共にアンノウンの対応に出動した際、これまでの苦労がたたり一瞬の判断ミスで大怪我をした。一時は魔道士として活動するのはおろか、普通の人間として生活することもできなく

なると言われたが、無茶なリハビリで今の状態まで回復し、こうして現役として活動している事を。

「私の場合、一時”死にぞこない”って言われるくらいしぶとかったから良かったけど、みんなが私と同じようにできる訳じゃないでしょう。みんなの長所を殺さずどんな状況にも対応できるようにしたかったんだけど。私の教導地味でしょう。まるで進展があるようにじったたかったんだよね。」

一通り話したなのはは、最後にティアナにこう言った。

「明日くらいからティアナが執務官になれるように、個人戦のやり方も教えてあげるから。」

この後、ティアナが号泣する等、少し問題はあったが機動六課の面々はより強い繋がりを持つようになった。

しかし、この時は誰も知らなかった。これから第一世界ミッドチルダはおろか、次元世界すべてが危機に陥る一大事件が起ころうとしていた事を。

第八話　強さとは、仲間とは（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「今回のテーマは、この小説のチームクロスハートオリジナル構成員ディアナモン。因みにイメージCVは、魔法少女リリカルなのはシリーズでのフェイト役で有名な水樹奈々さんだ。」

モニタモンA
「ディアナモンは、ニンテンドーDS専用ゲーム「デジモンストーリ・ムーンライト」で初登場した神人型デジモン。得意技は背中の突起物を矢に変えて飛ばす「アロー・オブ・アルテミス」両足の「グッドナイトシスターズ」から月の光を放ち、浴びた相手を眠らせる「グッドナイトムーン」相手に幻覚を見せ、敵と判断すると即時斬り伏せる「クレセントハーケン」ですな。」

モニタモンB
「光と影を司る月のように、優しくも厳しい、美しくも恐ろしいデジモンですな。」

モニタモンC

「しかも絶対零度の中でも行動できますな。」

カットマン
「因みに、普段は仮面で顔を隠しているけど、素顔は輝く銀髪と美麗な顔立ちの美人らしいぞ。」

モニタモンズ
「重要なようでどうでもいいですな。」

全員
「それじゃあまたね！！」

次回予告
ある日、機動六課の新人たちに一日休みが言い渡された。タイキ達も同様で、スポーツチームの助っ人としてミッドを回ることにした。そんな中で事件の歯車が動き出す。
そして、あのキャラクターが特別出演

次回「機動六課のとある休日、前偏」

第九話　機動六課のとある休日、前偏

朝も早い時間ではあるが、機動六課隊舎の演習場は喧噪で包まれていた。なのは達教官組が、スバル達新人組を鍛えているのだ。
最後の訓練が終わってから、
「さて、みんなの今の実力だけど。二人はどう思う？」
新人四人の前で、なのははフェイトとヴィータに訊いた。
「私は合格だと思うな。」
フェイトは即答し、
「まあ、あれだけやってるんだ。これくらいは出来てもらわねえと。」
少し考えてからヴィータも答えた、
新人四人には何のことかよく分からない、
「これからはみんなのデヴァイスのリミッターを一つ外して、もっと上の訓練をしようと思うんだ。」
と、なのはが皆に告げ、
「とりあえず、次の訓練は明日からな。」
と、ヴィータが言った。
「え？明日からって？」
新人四人が訊くと、
「最近は毎日訓練漬けで、ましてこの前はリリスモンに襲撃されて大騒ぎだったでしょう。だから隊長たちと相談して、今日一日はお休みにしようって事になったの。」
と、フェイトが説明し、
「だからみんなは今日一日、町に出てくるといいよ。」
と告げた。
新人たちは皆大喜びである。それもそうである、どんなにその競技や分野の練習をするのが好きな人でも、休みを喜ばない者はいない。
「所でさ、タイキ知らねえ？」

突然、ヴィータがその場にいる皆に訊いた。
「今日だけじゃなくて、この間もいなかったろ。何かあったのか？」
タイキは今日ばかりではなく、以前にも訓練にいなかった事があるのだ。
「あ、ええと、出動中です。」
スバルは言いにくそうに言った。
「出動中って、事件は何も起きていないのに。」
と、フェイトが言うと、
「ああ、事件じゃなくて、スポーツの助っ人です。」
と、ティアナが付け足した。

そして、そのタイキがどこで何をしていたかと言うと、
ミッドチルダの首都、クラナガンにある中規模な運動場。ここでは、腕と足にサポーターを付け、ヘルメットを被った選手が、楕円型のボールを小脇に抱え走り回っている。いわゆる「ラグビー」が行われているのだ。
その中でも、特に助っ人として参加しているタイキの活躍は目覚ましかった。
「おい！七番に三人つけろ！奴を止めれば流れは変わる！！」
タイキのチームの相手チーム選手の一人が叫んだ。タイキは七番の背番号を付けて試合に出ており、今まさにボールを小脇に抱えゴールの近くまで来ているのだ。
タイキは、自分が囲まれる直前に、
「ルーク！頼むぞ！！」
と言って、同じチームの選手のルーク少年にボールを渡した。

「よし！ナイス！！」
ボールを受け取ったルークは、そのままゴールに突っ込みトライした。これでチームに点が入り、その瞬間、
「試合終了！！」
ホイッスルの音と共に、審判の声がグラウンドに響き渡り、タイキ達のチームの勝利が決まった。
「ありがとうタイキ、あのタイミングで俺にパスしてくれて。」
最後のトライを決めたルークは、涙ながらに礼を言った。
「ルークがいつもトライの練習してること知ってたから。」
タイキはルークにこう言った。
「なあ、せっかくだし正式にうちのチームに入らないか？」
喜びの中で、選手の一人がタイキに訊いた。
「タイキ、マジで才能あるよ。試合中ずっと走り回れる持久力はさることながら、あんなに相手に囲まれて周りが見えてるなんて。」
他の選手も、この試合でのタイキのプレイを振り返り、それを称賛しながら言った。
「悪い、その話はまた今度な。」
しかしタイキは、即答ともいえるタイミングで答えを出した。
選手が、なんで、と訊いている中で、
「彼はこれからバレー部の助っ人に行くんですよ。」
美の神、芸術の神、そして造形の神が一堂に会し、何日もの試行錯誤を繰り返して至った結論のように、美麗な容姿の女性が言った。
髪の色は銀なのだが、老けた感じはまるでなく、大人びた感じを醸し出している。男も女も見とれるようなこの美女は、肩からスポーツバッグを提げているのでタイキの助手か何かなのだろう。
「はい私特性のエネルギー飲料。おにぎりも作っておきましたから向かう途中で食べて下さい。」
すぐさま次の会場へ向けて走り出したタイキに、彼女は水筒を渡し、会場への道順を説明したり、次の試合で使うユニフォームを渡したりと甲斐甲斐しく働いている。

ちなみに彼女は、戦闘用の装備をはずし現代風の服装をしたディアナモンであり、特に謎ではない。

「魔法の技術の進歩と進化はすばらしいものである。しかし、それゆえに我々を襲う危機や災害も十年前とはくらべものにならない程危険度をましている。」
演台では厳つい顔をした、いかにも武闘派と言える男が演説を行っている。その様子を、放送されているニュース番組の中で見ているルーチェモンは、
「何なんですか？このシャウトモンに引けを取らない暑苦しい演説をするおじさんは？」
新鮮な野菜がたっぷり入った鱈子スパゲッティを口に運びながら、隣のテーブルについているなのは達に訊いた。ちなみに彼のテーブルには、ワイズモン、ドンドコモン、チビカメモン、ジジモン、スパーダモンが付いている。
「ああ、時空管理局地上本部総司令のレジアス・ゲイズ中将だよ。」と、フェイトが説明すると、
「このおっさん、まだこんな事言ってるよ。」
「レジアス中将は昔から武闘派だからな。」
演説を聞いたヴィータは呆れ、シグナムはルーチェモン達に補足説明をした。
「俗に言う”頑固者”カメ？」
チビカメモンが同じ席についている面々に訊くと、
「それはともかく、隅の方の席にいる三人は何者ぞい。」
ジジモンが自分の杖で、レジアスの隣にいる三人の老人をさした。
「右から、ミゼット提督、キール元帥、フィリス相談役や。管理局

を創設以来支え続けている人なんよ。」
はやてがジジモンに説明した、
「これがいわゆる”大御所”カメ？」
再びチビカメモンは同じ席にいる面々に訊ねた、
「……」
ワイズモンは画面を見ながら考え込んでいる。フードで顔は隠れているので表情はうかがえないが、きっと難しい顔をしているのだろう。
「どうしたの？ワイズモン？」
と、スパーダモンが訊くと、
「いや、あの男の事がとても気になるんだ。」
と、ワイズモンは答えた。
「怪しいとかそんな感じですか？」
ルーチェモンが訊くと、
「そんな感じではないんだ。ただ我々はあの男に振り回されそうで。」
と、ワイズモンは言った。すると、
「振り回されそうなんやなくて、実際に振り回されるで。」
と、はやてに言われた。はやてが言うには、レジアスは自分たち機動六課を目の敵にしているのだという。
「なんとしてもタイキ君の事が公になりすぎないようにしないと。それがばれたら大目玉になるからな。」
はやては最後にこう言った、

そして、スバルとティアナが町を回って買い食いをしたり。エリオ

とキャロが海辺の道を散歩している時に、タイキが何をしていたかと言うと、
クラナガンにある中規模な体育館にて、タイキはバレーの試合に参加していた。
高くジャンプし相手のボールを止め、トスでボールを高く上げ相手のコートへボールを入れようとする。そのうちにタイキの放ったスマッシュが相手のコートに入り、その瞬間試合終了のホイッスルが鳴り響いてタイキのチームの勝利が決まった。
試合終了後、タイキ達は近くの河原でぶっ倒れていた。午前中だけで二試合を一度にこなしたので、当然と言えば当然である。
「よし、二つとも勝てた。」
「はあ、ラグビーもバレーも初心者なのに、一気に二試合助っ人なんて普通ならやりませんよ。」
ぶっ倒れるタイキに、ディアナモンが言った。タイキはこの世界にきてからも、時折元の世界にいた時と同じようにスポーツの助っ人を行っている。そしてここではディアナモンが、かつての陽ノ元アカリのように彼のマネジメントをしているのだ。
「でもさ、ラグビー部のルークは今度違う次元世界に引っ越すから今回がこのチームでの最後の試合だったんだ。バレー部のケビンも折角仕事で忙しい両親が見に来てくれる試合だったのに、メンバーのけがで人数が足りなくなっちゃって。」
そして彼は、涙ながらに頼みに来た二人の姿を思い出しながら言った。
「だから、ほっとけなくて。」
「アカリさんの苦労が良く分かりましたよ。いつもこれでは我々の体力が持ちませんよ。」
タイキにディアナモンはこう言って、
「この後は何もありませんし、先ほど今日一日休みだという連絡が入りました。貰った給金使ってみんなで何か食べに行きませんか？」と、言った。ちなみにみんなとは、チームクロスハートのメンバー

の事である。
なので機動六課隊舎に戻り、皆を連れて町に出るため、タイキが立ち上がろうとすると、
「いた！ようやく見つけました！工藤タイキ！！」
薄緑色の髪の、両目の虹彩の色が違う少女に声をかけられた。
「えっと？誰だっけ？どっかで見たような？」
タイキは突然の事に驚き、自分の記憶を必至に整理した。
「ほら、この間でなくてもいいと言われたストライクアーツの個人組手の大会でタイキに負けた娘。」
ディアナモンは少しだけ覚えていたらしく、タイキにこう言った。
ちなみに、以前怪我のため出られなくなった選手の変わりにストライクアーツの大会で、団体組手部門だけでなく、本人からでなくてもいいと言われていた個人組手部門にも律儀に出場し、決勝戦で彼女に勝利したのだ。
「名前なんでしたっけ？」
とディアナモンに訊かれたタイキは必至に記憶の中を捜索し、
「確か…パインアップルとかなんとか…」
苦し紛れに浮かんだ単語を言った。そしたら、
「アインハルトです！アインハルト・ストラトス！！」
少女は自分の名を名乗り、
「工藤タイキ、あなたに仕合を申し込みます！！」
と、単刀直入に言った。
「これまで戦った相手の中で、唯一あなたが覇王流を打ち負かしたんです。今こそあの時の雪辱を……」
「いや、あれはまぐれで。普通にやって俺が君に勝てる訳ないって。」
意気込みに燃えるアインハルトにタイキがこう言うと、
「まぐれでもなんでも、あの時私に必殺の一撃を打ち込んだあなたの目は正真正銘のグラップラーでした。」
「あのですね、タイキは今日午前の間だけで二試合をこなしてるん

です。たかが格闘技やってる暇はないんです。」
アインハルトとディアナモンの間で言い合いが始まってしまった。
「たかがとはなんですか？これは格闘家の誇りとプライドをかけた……」
「何が誇りとプライドですか？っていうか同じです二つとも。」
その陰でタイキは、
（クラナ川の流れは今日も穏やかだ）
と思っていた。
するとそこへ、エリオとキャロから連絡が入った。路地裏で小さな女の子がレリックのケースを持って倒れているとの事だ。
「ディアナモン！」
タイキがディアナモンに呼びかけると、
「はい！！」
ディアナモンは素早く荷物を取り、現場へ向けて走って行った。
「え？あの、ちょっと？！」
いきなりの事にアインハルトが驚いているうちに、
「ごめん、また今度な。」
タイキはこう言い残して去って行った。
「あ、待って下さい、話はまだ……」
しかし、アインハルトの声は彼に届かなかった。
「もう。」
仕方がないのでアインハルトはいったん家に帰ることにした。この時はまだ想像もしていなかっただろう、これから二人である事件に立ち向かう事を。

第九話　機動六課のとある休日、前偏（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「さて、今回のテーマはジジモンだ。」

モニタモンA
「ジジモンはエンシェント型デジモン。デジタルワールドが創生された時から存在するといわれるもっとも古いデジモンの一体ですな。」

モニタモンB
「とても物知りで、なおかつ大樹のように老練な力を持つデジモンでもありますな。」

モニタモンC
「見た目はよぼよぼだけどね。」

カットマン
「ジジモンはクロスウォーズを始めとしていろいろな作品に登場しているけど、ただ一つ共通しているのは長老として主人公たちの前

に現れる事だな。」

全員
「それじゃあまたね。」

次回予告
一人の少女を保護した機動六課の面々は、レリックを求めて地下へと赴く。そして、レリックを探す謎の黒い少女と出会う。

次回「機動六課のとある休日、中編」

五話更新記念の回、その二（前書き）

二回目の五話更新記念の回です。
あとがきが本文より長くなってしまった。

五話更新記念の回、その二

ここは、とある管理外世界のとある場所

カタカタカタ

ここでは一人の男がパソコンを使用し文章を打ち込んでいた。彼は言わずと知れた（少しくらいは名が売れただろう）この小説の作者「超人カットマン」である。

超人カットマン
「さて、再び五話更新したぞ。」

という事で彼はいったん一服しようとした、すると、

???

「それならこのまま一気に最終話まですべて更新してはどうだ？」

背後から声が響いた

超人カットマン
「????」

超人カットマンが振り向くと、背後には全体的に黒い服を着た茶髪の、幼いころの「高町なのは」に似た少女が立っていた。

超人カットマン
「って！お前は星光の殲滅者（シュテル・ザ・デストラクター）じゃねえか！！」

現れたのは、ＰＳＰ専用ゲーム「魔法少女リリカルなのはＡ，ｓ　ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ」に登場するキャラクターの一人「星光の殲滅者（シュテル・ザ・デストラクター）」だった。

シュテル
「それに私だけではない」

シュテルがこう言うと、幼い頃のフェイトにそっくりだが髪の色が違う少女、幼いころのはやてにそっくりだが態度がデカそうな少女が現れた。

はやて似の少女
「デカいのは夢と宝の詰まった女の象徴だけで十分よ。」

この台詞の意味と意義は不明だが、

超人カットマン
「今度は、雷刃の襲撃者（レヴィ・ザ・スラッシャー）に闇統べる王（ロード・ディアーチェ）かい。」

シュテル
「出てきたものに呆れている場合ではない。第一回目で募集した質問が一つきているんだ。待たせた分しっかり答えなさい。」

シュテルはこう言って、どこからか取り出した葉書を読みだした、

シュテル
「支配者、なる人物からの質問です。第四話に登場したシャウトモン×３ＧＭの使用した技「ブリリアンスダガー」「ブレスオブペルーン」がオリジナルな技かどうか聞きたいんだそうだ。」

ロード
「我に黙って支配者を名乗るだと、こやつ。」

レヴィ
「そこ関係ないよ。」

超人カットマン
「とりあえず回答するぞ。元々シャウトモン×３ＧＭは、ニンテンドーＤＳ用ソフト「デジモンストーリ　超クロスウォーズ」のブルー版、データカードダス「デジモンクロスウォーズ　超デジカ対戦」に登場した、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、グレイモン、メイルバードラモンがデジクロスした時の姿だ。そして質問にある二つの技は超クロスウォーズの中に登場する技で、それぞれシャウトモン×３ＧＭがＬＶ４５でブリリアンスダガー、ＬＶ８２でブレスオブペルーンを覚えるんだ。」

シュテル
「さて、これで今回のノルマは達成しましたね。」

レヴィ　ロード
「早？！！！」

超人カットマン
「しょうがないだろ、質問はこの一つだけなんだから。人気ランキングの途中経過をするにも全然票が入ってないし。」

ロード
「おぬしの才能が無いだけであろう。自由に感想をかけるようにしているのにこの体たらくでは。」

超人カットマン
「まあとにかく、今言った通り感想は自由に書けるようになっている。一見さんも十見さんも気軽に感想を書いてくれるとありがたいです。
とりあえず今回はこれで終わりだ。」

シュテル　レヴィ　ロード
「早すぎだぁ！！！」

史上最短を更新した二回目であった

五話更新記念の回、その二（後書き）

？？？

「おはらっきー！ナビゲーターの小神あきらでーす！！」

？？？

「初めまして、白石みのるです。」

あきら

「さあ、今回のらっきーチャンネルにはゲストをお呼びしました。超人カットマンさんです。」

「……」

あきら

「あれれ？カットマンさんが出てきません。」

カットマン

「ちょっとまてぇ！！」

みのる

「ちょっとカットマンさん。出てくるときはもっと穏やかに。」

カットマン

「知るか！と言うかお前らは何をやっているの？！ここはデジモン紹介のコーナーであって、らっきーチャンネルの場じゃねえ。」

あきら

「今回は特例と言う事で、番組同士を共演させようという事になっ

たんですよ。」

カットマン
「ああ、そうなの。」

みのる
「そういう訳なんです。」

あきら
「そういえば作者さんは、らき☆すた、のアニメを全話完見したんですよね。」

カットマン
「まあ、一応。」

あきら
「カットマンさんは、あきらの事をどう思います？」

カットマン
「はい？？？？」

みのる
「ですから、あきら様はカットマンさんに自分の事を聞きたいんですよ。」

カットマン
「そうだな、たった五分くらいの出番であれだけのインパクトを残せるんだから凄いと。」

あきら

「ふぅーん、たった五分ねぇ。」

カットマン
（あれぇ？）

みのる
（ヤバイ、あきら様が不機嫌になってる）

みのる
「いや、でも一話のメインキャラとして出ても名前を覚えてもらえない地味なキャラもいるんですから。」

カットマン「そうですよ。長々地味にいくなら瞬間的に派手にいきましょう。」

あきら
「そうですね。私目から鱗が落ちました。」

みのる
「あきら様、目から鱗が落ちる、ってどういう意味か分かってます？」

カットマン
「分かってなきゃ言わないと思うぞ。」

あきら
「あれれ、もうお別れの時間？今回は超人カットマンさんをゲストにお送りしました。それじゃバイニー。」

カットマン

「バイニー？」

みのる
「バイニー。」

幕が下りてから

あきら
「んで、肝心のデジモンの事聞けなかったけど。」

カットマン
「いやいや、あんたが最初に自分についての話をしたからでしょう。
」

あきら
「あれあれぇ、それじゃあ私が悪いって言うのぉ？」

みのる
「あきら様、その辺で。」

あきら
「まあいいわ、とりあえずちゃっちゃと説明して。」

カットマン
（なんかムカつく）

カットマン
「今回のテーマはインペリアルドラモン。インペリアルドラモンは
古代デジタルワールドに存在していたと言われる古代竜型デジモン。
必殺技は高威力レーザーを発射する「ポジトロンレーザー」暗黒物

質を含む火炎を吐き出す「メガデス」だ。」

あきら
「それだけ？」

みのる
「ええと、力が強すぎるため、環境によっては善の存在にも悪の存在にもなるとあります。」

カットマン
「そして、強すぎる力を完璧にコントロールできる姿があると言われている。」

あきら
「っていうか、なんであんたが参加してるのよ。」

みのる
「ああ、さっきカンペを渡されました。」

カットマンは、この後から何やらドロドロした雰囲気になったので、一目散にこっそり去って行った。

第十話　機動六課のとある休日　中編

エリオとキャロからの連絡をもらったタイキ達は、その足で件の現場へと向かった。そこには、体中傷だらけの幼い少女が倒れていた。
「この子が例の…」
タイキが屈んで少女の様子を見ていると、
「傷がひどいっキュ。」
クロスローダーからキュートモンが現れた、
「キズナオール！！」
そして自分の手を緑色に発光させ、触れた場所の傷をふさぎ始めた。
「傷は治したけど、疲れがたまってるみたいっキュ。しばらくは起きないっキュ。」
キュートモンはこう言ったが、命に別状は無いと分かっただけ良かったと、その場にいた面々は思った。
その後、少し遅れてきたスバルとティアナ、機動六課隊舎に残り「インペリアルドラモンの爪の欠片」の調査に専念していたデジモン達も合流し、皆で地下へ突入し、少女が地下に置いてきてしまったレリックを探しに行くことにした。
少女は後からやってきた、なのは、フェイト、シャマルに預け、機動六課のフォワード四人と、クロスハートのデジモン達は地下へと赴いた。
「みんな、短い休みは堪能できた？今からはお仕事モードで行くわよ！！」
ティアナの言葉を受け、一同は張り切って進んでいった。しかし場所は地下道、暗いため足元が危ない、
「チビカメモン、ブルーメラモン、デジクロス！！」
なのでタイキは、クロスローダーよりリロードしたデジモンをデジクロスさせた、
「コウランプ、チビカメモン！！」

クロスローダーの光が収まると、頭のヘルメットと背中の甲羅が光るようになったチビカメモンが現れた。
そのままチビカメモンを先頭に進んでいったとき、
「タイキ、向こうの角に誰かがいる。」
突然ワイズモンがクロスローダーの中から言った。
「え？」
「まさかお化け？」
皆が緊張状態に包まれる中、件の角から現れたのは、緑色の体をした頭のデカい妖怪、では無く、
「あ、タイキ殿。」
以前ホテル・アグスタの警備に言った時、召喚魔法を使う魔道士を探しに行ったモニタモン達だった。
「モニタモン、なんでお前達が？」
と、タイキが彼らに訊ねると、
「前に追うように言われた魔道士らしき人物がここに来ているんですな。」
と告げ、
「そしてこれが我々が追っている魔道士ですな。」
自分の頭部を構成しているモニターに、黒い服を着た長い紫色の髪の少女、の映像を映した。
「この子が……」
「んで、こいつの名前は分かるか？」
スバル達が少女の顔を覚えている中で、シャウトモンが訊いた。
「遠目だったのでよく分かりませんが、同伴していた人物は皆、ルーテシア、と呼んでいたはずですな。」
「ルーテシアか。」
タイキは彼女を見ながら思った、かつてデジタルワールドで共にバグラ軍と戦った「天野ネネ」の、自分と初めて会ったときの雰囲気と、彼女の雰囲気が似ていると。
「それより、ここからは我々に付いてきてほしい。モニタモンの探

査能力はここでは重宝するだろう。」
ワイズモンにこう言われたモニタモン達は、タイキ達についていく事になった。

その後、再び地下を進んでいる時、
「何か来ますな！！」
突然モニタモンが言った。
そして、怪物が暴れているような騒がしい音を響かせながら、怪物と言うには無理がありすぎる美しい容姿の少女が現れた。
騒がしい音の正体は、彼女が壁を破壊しながら進んできた音である。
「あ、ギン姉！」
スバルが親しい相手に会ったように声をかけた。
「あの、こちらはどなたで？」
初対面のタイキはティアナに訊ねた。
「この人はギンガ・ナカジマ。スバルのお姉さんで、階級も年齢もちょうど二つ上なの。」
と、ティアナは答えた。
「それで、彼は？」
ギンガはスバルにタイキの事を訊いた。初対面なので当然である。
「俺は工藤タイキ。」
「俺はシャウトモン。」
「バリスタモン。」
「ドルルモンだ。」
「チビカメモン、カメ。」

「モニタモンですな。」
「ワイズモンだ。」
とりあえずその場にいる面子は全員簡単に挨拶した。

ギンガと合流した面々は、ひときわ広い場所へとやって来た。
「この辺りに大きいエネルギーの反応がありますな。」
辺りを見回したモニタモンは皆にこう告げた、
「となると、レリックはここに。」
ドルルモンがこう言った途端、
「カメー！！」
チビカメモンが大きくふっ飛ばされ、そのまま気絶した。
「何かいるぞ！！」
タイキはみなにこう叫び、チビカメモンをクロスローダーにしまい、
ブルーメラモンを残してあたりを見回した。
「うわぁ！！」
今度はエリオがふっ飛ばされた、
「どうやらタイキ、奴は素早く動き回ることに優れた奴のようだ。」
ワイズモンはこう分析した、
（動きが素早いと明るくても捕まえることは難しい、どうすれば）
タイキがこう考えている間にも、謎の襲撃者は次々と皆に襲い掛かっている。
「タイキ、このままじゃやられちまうぜ！！」
シャウトモンが叫んでいるのを見たタイキは、
「閃いた！！」

一つ作戦を思いついた、
「シャウトモン、ドンドコモン、デジクロス！！」
タイキはクロスローダーを掲げて叫んだ。シャウトモンが光に包まれ、クロスローダーから飛び出た光と一つになると、太鼓のような姿をしたシャウトモンが現れた。
「ドンシャウトモン！！」
ドンシャウトモンは両手に持ったバチで自分の頭をリズムにのって叩き始めた。
「エリーゼのためにぃ～～～！！」
本人は”エリーゼのために”を演奏しているつもりなのだろうが、彼の演奏はリズムはあれど優雅さの欠片も無い騒がしいものである。そのうちに、タイキ達のいる空間に黒い影が現れ、しまいには停止し黒い昆虫のような生き物が現れた。
「あ、アイツは！！」
クロスローダーの中でディアナモンは声を上げた、
「この前骨董品盗んでいった奴！！」
ホテル・アグスタの警備のさいに、一度立ち会った事があるのだ。
「やっちゃって、ガリュー。」
するとガリューと呼ばれた生き物の後ろから紫の髪の少女が現れた。彼女はモニタモンの録画した映像と同じ姿をしていた。
「君がルーテシアか？」
思わずタイキはこう訊いた。改めて見た彼女の雰囲気が、天野ネネそっくりだった為、いわゆる「ほっとけない」が発動したのだ。
「だから？」
ルーテシアがこう言うと、
「なんで君はレリックを求めるんだ！？」
タイキは次の質問をした、
「関係ない。」
しかしルーテシアはタイキの話に耳を貸そうとしない。
そしてガリューも、問答無用と言わんばかりに襲い掛かってきた。

それでも、先ほどのドンシャウトモンの演奏のショックが残っているのか、スピードは間違えなく鈍っている。
「姿さえ見れればこちらのもんだ。」
タイキはこう言ってクロスローダーを掲げると、
「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ディアナモン、デジクロス！！」
と叫んだ。
結果シャウトモン×４は一回り小柄になり、体つきも細くなり頭部は竜のような形に変わり、両足にはグッドナイトシスターズが装備され、スターソードはディアナモンの鎌を取り込んだ形状に変わった。
「シャウトモン×４Ａ（アサシン）！！」
シャウトモン×４Ａはガリューを見据えると、鎌のようになったスターソード「スターハーケン」を弓のように使ってガリューに狙いを定めた。
「ちょ、相手はスピードが速い相手なのに、狙撃しようとしたらよけられる。」
ティアナはシャウトモン×４Ａにこう言ったが、当の本人は落ち着いている。ガリューの爪がシャウトモン×４Ａを切り裂こうとした時、
「遅いうえにかかったな、罠に。」
と言うと、右手に持っている矢と思われる物を逆手に持ちガリューを斬りつけた。ガリュー本人はうまく防いだが、衝撃で大きくふっ飛ばされた。
「これで終わりだ！！」
シャウトモン×４Ａは、ガリューにとどめをさそうと飛び出した。
しかし、スターハーケンがガリューに触れる寸前で、突然発生した大きな炎にふっ飛ばされる事になった。
「ルールー、大丈夫か！！」
続けざまに現れた少女がルーテシアに駆け寄った。大きさはリィン

フォース？と同じくらいだが髪は赤く、そもそも炎を操った時点でリィンとは別物の融合機であることが分かった。
「アギト。」
ピンチにおいての援軍の到着にも、ルーテシアはほぼ無感情で反応した。
「ルールー、レリックはいったん諦めて地上に戻ろう。この状態じゃちょっとやばいし、本局の魔道士もここに向かってる。」
アギトはルーテシアにこう告げて、その場から立ち去ろうとした。
しかし、
「そうはいかん！出番が少ない分活躍させてもらう！！」
ブルーメラモンが二人にめがけて青い炎の塊を投げつけた。
「な！？凍るだと？！」
「凍ってるのに、すごく熱い。」
二人はブルーメラモンの投げつけた「アイスボム」の影響で足元が凍り付いて動けなくなった。
「ナイスですブルーメラモンさん！！」
「あとはアタシらに任せな！！」
そして上層部から、リィンとヴィータが猛スピードで飛んできた。
リィンは自身の能力で絶対零度の冷気を発生させ、ルーテシア、アギトの両名を氷漬けにした。
「よし、これで。」
ヴィータが近づいて確認すると、氷の中は何故かもぬけの空だった。
その上、氷の一部に隙間のような部分が出来ている。
「逃げやがったか？！」
「おかしいですね？ブルーメラモンさんの氷の拘束は完璧だったはず？」
床にあいている穴を覗き込みながら二人が言うと、
「ああ、しまった！！」
突然ブルーメラモンが声を上げた、それは、
「俺の氷は熱に強いが冷気に弱い事を忘れてた！！」

ブルーメラモンの体が青いのは元々、適度な酸素を含んだ健康的な炎により体温が普通より高いからなのだ。そのため炎の動きが安定しているのとブルーメラモンの能力が相まって一時的に凍ったようになったのだが、リィンの本場の冷気で炎が鎮火してしまい、それで出来たスペースを使ってルーテシアとアギトは逃げたのだ。
「面目ないですぅ。」
リィンは、いかにもがっくりきたと言うポーズを取っている。すると突然、タイキ達のいるスペースが大きく揺れ始めた。
「どうやら地上で人工的に振動を発生させ、ここを潰してしまおうとしているようだ。」
クロスローダーより感じる振動から、何かが地上で何かをしていると判断したワイズモンは皆に向けてこう言った。
「レリック見つけましたー！！」
ちょうどのタイミングで、レリックを探しに行っていたスバルとエリオ、キャロも戻ってきた。因みに、灯りはジジモンの杖にフリードが火をつける事でなんとかしました。
「よし、スバル、ギンガ、上に向かってウイングロードを。」
ヴィータはギンガとスバルにこう言った。丁度自分たちがここまで来るのに使用したルートは、若干斜めになっているとはいえ、ほぼ地面と垂直に近いので最短ルートで地上に出られると思ったからだ。
だが、ここでタイキが、
「いや、もしかすると地上に出たところで不意打ちに遭う可能性がある。俺に任せてくれ。」
と、言ってクロスローダーを掲げると。
「今から出すデジモンにみんなで掴まってくれ。」
と、この場にいる皆に告げ、声の限り叫んだ、
「リロード！！」

第十話　機動六課のとある休日　中編（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー。」

カットマン
「今回のテーマはドンドコモン。ドンドコモンは太鼓の形をした楽器型デジモン。得意技は聞いた者のテンションを上げる「ドンドコ音頭」演奏を邪魔するものを衝撃波で成敗する「乱れ打ちラッシュ」だ。」

モニタモンA
「ドンドコモンの太鼓の音は、聞いた者のテンションを上げる効果がありますから、競技会では盛り上がりますが、間違って喧嘩の場にでも現れたら収拾がつかなくなりますな。」

モニタモンB
「頭を叩くわけだけど痛くないのかな。」

カットマン
「そういえば、前回お前らどこにいたんだ？」

モニタモンC

「ルーテシアを追い回してましたな。」

カットマン
「そうなんだ。」

全員
「それじゃあまたね。」

次回予告
戦いの舞台は地上に移行。新しいデジモンの絆のパワーアップと、
メデューサモンのブルーフレア時代の幻のデジクロスが登場する。

次回「機動六課のとある休日、後篇」

第十一話　機動六課のとある休日、後篇

タイキ達が地下で何かを行っていた頃、一足先に地上に出てきたルーテシアはと言うと。傷ついたガリューを帰し、新たに呼び出した黒いコガネムシ型の巨大な虫を使って即席の地震を起こしていた。この衝撃を利用し地下のタイキ達がいるスペースを潰してしまおうと言うのだ。

黒いコガネムシ「地雷王」も元気に活動している時、ふと地下から振動が発生した。

「???」

ルーテシアが環境探査の魔法で振動の正体を確かめようとしたら、地面から巨大な手が生えてきた。手と言っても、皮膚は緑色で見ただけでも頑丈そうなのが分かり、爪が三本生えていて、両側に突起物が広がっていた。

「うぉおおお!!!!!!」

次の瞬間、緑を基調とした色合いの皮膚を持ち、尾の先に鉄球のような物を付けた巨大なトカゲが飛び出してきた。

「ギガクラック!!」

トカゲは自分の背中に生えている腕を地面に叩きつけて地割れを発生させた。この一発で出てきていた三体の地雷王はバランスを崩した。

「スクラップレスクロー!!」

次に、自分の腕を使って地雷王の一体を掴むと、勢いを付けて別の地雷王の元へ投げつけた。

「地雷王!」

ルーテシアは、偶然うまく態勢を立て直す事に成功した地雷王の自身の力を与えた。地雷王は角を使って攻撃を繰り出すも、

「メガトンハマークラッシュ!!」

尾についている鉄球の一振りで、逆に地雷王へ攻撃を弾き返した。

突然の事態にルーテシアが動揺していると、
「よくやった、グラウンドラモン！」
グラウンドラモンの後ろ足の裏からタイキ達が現れた。あの地下スペースでグラウンドラモンをリロードした後、グラウンドラモンが地上まで穴を掘り、タイキ達はそれに捕まってきたのだ。
「あいつら、もう出てきやがった！」
ルーテシアの傍にいたアギトが悔しがった時、突然アギトは何処からか発生したバインドに拘束された。ルーテシアも驚いたが、その後すぐに自分も同じように拘束された。
「もう逃がさないよ。」
拘束されたルーテシアの喉元にエリオが槍を突き立て、スバルやティアナが逃げられないように囲い込んだ。ガリューはすでに帰還しており、地雷王も先ほどグラウンドラモンがボコボコにしたので、事実上二人は掴まった事になる。
機動六課の面々が二人を拘束する光景を、役目の無かったタイキ達は後ろで見ており、
（相も変わらず見事の手並みだ）
と、思った。

一方、現場からさほど遠くない別の場所。ここには二人の少女が立っていた。
「どお、ディエチちゃん。視界は良好？」
髪を二纏めにし、メガネをかけた少女が、隣で大砲のような物を構えている少女に訊いた。
「うん、空気も澄んでて障害物もない。よく見えるよ。」
ディエチと呼ばれた少女は機械を操作しながら淡々と言った。

「まあ問題ないと思いますけど、いざって時のためにちゃんと待機していて下さい。」
次にモニターを開くと、通信先にいる人間に言った。
「はいはい、分かりましたよ、クワットロ。」
通信相手のメガネ少女に、通信を受けた少年は答えた。
「ところで、ルーテシア殿は捕まったみたいですよ。」
少年は、こうクワットロと呼んだ少女に言った。実際に現場では、ルーテシアとアギトの二人が管理局員に捕まっていた。
「どうする？ちょっと拙くないか、連中が捕まると。」
少年がこう言うと、
「そうですね。ちょっとお嬢様に知恵を貸しましょう。」
クワットロはこう言うと、
「ディエチちゃんはそのまま”あれ”に狙いを定めていて下さい。」
と、ディエチに告げると、通信を聞かれないように繋げる事ができる裏ワザを使ってルーテシアにこう言った。
「お嬢様、今から私のいう事を繰り返してください。」

そして問題の現場では、
「…いいの？…」
今まで黙っていたルーテシアが口を開き、皆に対してこう言った。
「大事なヘリをほっといていいの？」
当然これはクワットロがルーテシアに言わせている台詞である。最後に、
（最後にそこのチビにこう言って下さい。あなたはまた、護れないかもね）

と、告げた。チビと言うのはヴィータの事である。
「あなたはまた、護れないかもね。」
言われるままに、同じ台詞を言った。
「テメェ！それはどういう！？」
ヴィータは頭に血が上ったのか、ルーテシアに掴みかかって行った。
ほかの面々がそれを止めている時、タイキはと言うと、
「ヘリをほっとく？」
周りを見ると、ついさっき救助した少女を乗せ、またシャマル達も乗っているヘリが飛んでいるのが見えた。さらに見渡すと、ちょうど同じくらいの高さのビルが目に入った。
（まさか？！！）
タイキはルーテシアの言葉で分かった、敵はヘリを何らかの方法で攻撃するつもりだと。ヘリに爆弾を仕掛けたとは思えないので、恐らくは飛び道具だろうと推理した時。
「俺をリロードしろ。」
「そしてグレイモンとメイルバードラモンと私をデジクロスさせて。」
グレイモンとメデューサモンが言った。
「お前ら、あのデジクロスは二度とやりたくないんじゃなかったのか？」
と、メイルバードラモンが訊いたら。
「「今は四の五の言ってられない！！」」
グレイモンとメデューサモンは二人同時にこう言った。
「分かった、グレイモン、メイルバードラモン、メデューサモン、デジクロス！！」
タイキはクロスローダーを掲げ、声の限り叫んだ。その瞬間、タイキが見たビルから一筋の光がヘリめがけて飛んで行った。
「何ぃ！！？」
現場の機動六課の面々は驚いた。空でガジェットを相手にしていたなのは、フェイトも一応気づく事が出来たが、今から向かってもほ

ぼ間に合わないタイミングだった。
やがて光がヘリに到達し、大きな爆発が発生した。この一発でヘリは大破した、皆がそう思った瞬間、無傷のヘリが煙の中から現れた。ヘリの前には、青を基調とした鎧を身に着け、大剣を装備した竜人型のデジモンが盾を構えていた。
「これぞ、マルチグレイモン！！」
メタルグレイモンの火力と機動力に、メデューサモンの身軽さと武術を合わせた「大武人形態」のデジクロス。マルチグレイモンが現れたのだ。

「な、何あれ？」
レーザーを発射したディエチは驚きの声を上げた。しかし、クワットロは、
「大丈夫よディエチちゃん、こういう場合のために”彼ら”がいるんだから。」
まったく気にしていないのかこう言って、
「キサキさん、お願いします。」
モニタを開いて、通信先の相手に言った。
「了解、リロード！」
モニタからはこんな言葉が返された、

「レーザーを発射した相手はタイキ殿たちのいる場所から八時の方

向ですな。」
ビルの上で行動するディエチ、クワットロの様子を映しているモニタモンはタイキに告げた。
「ヴィータ、今すぐ隊長二人に連絡してくれるか？！」
タイキはヴィータにこう告げた、しかし、
「……」
ヴィータは難しそうな顔をして考え込んでいる。でも、すぐにタイキに言われたことに気づいたのか、
「分かった！」
と言うと、空の制圧を素早く済ませ、大急ぎでこちらに向かっているなのは、フェイトにモニタモンが中継しているビルの場所を伝えた。
「何かきますな！！」
突然モニタモンが叫んだ。見ると、マルチグレイモンの護るヘリめがけて、赤い羽根の生えた巨大な翼を持つ巨大な鳥と、オウムのような姿だが両手がある鳥型デジモン「パロットモン」が飛んできていた。
「ヘリには羽根一枚付けさせねえ！！」
マルチグレイモンはこう叫ぶと、向かってくる二体のデジモンに向かって飛び出していった。
「あの赤い鳥は「アクィラモン」じゃ、飛ぶスピードも速い強敵じゃぞ。」
クロスローダー内のジジモンがこう告げた時、そのアクィラモンはマルチグレイモンの振り下ろした大剣を足で受け止め、ついでにマルチグレイモンの動きを止めてしまっていた。その隙に手の空いているパロットモンがヘリに向かっていった。
「閃いた！！」
タイキはその中で、一つ対抗策を思いついた、そして、
「ドルルモン、デジトランス！！」
と、クロスローダーを掲げて叫び、

「ティアナ、クロスミラージュと融合させるぞ。」
と、ティアナに告げた。
すると、引金を引くデジモンのいない状態で「ドルルキャノン」の姿になったドルルモンは、ティアナの持っていた銃と融合し、クロスミラージュはドルルモンの姿を模った大砲のような形に変わった。
「クロスバスター！」
ティアナは上空のパロットモンに狙いを定め、引金を引いた。クロスミラージュから発射されたドリルのようなエネルギー弾は、寸分の狂いもなくパロットモンの翼を打ち抜いた。
「ディバインバスター！！」
続いて駆け付けたなのはが、ダメ押しと言わんばかりにパロットモンを砲撃した。
墜落していくパロットモンに、アクィラモンが目を取られた時である。
「ハーケンセイバー！！」
同じく駆け付けたフェイトの投げつけた斬撃を足に受け、剣を掴む足の力が弱まった所で、
「ドラモンキラー！！」
マルチグレイモンは思いっきりアクィラモンを斬りつけた。

「あらぁ、ちょっと旗色悪いですね。」
ビルの上から様子を眺めていたクワットロは、唇をかみしめながら言った。なので、次の対策を考えようとした時である。
「雷電閃！！」
「デス・ザ・キャノン！！」
突如上空から巨大な落雷と弾丸が落ちてきた。見ると、二人の上空

から、右腕に巨大な銃を装備し、背中に黒い大きな翼の生えた、目が三つある背の高い男「ベルゼブモン」と、それに掴まって黒い忍装束を着た、顔がテレビのようになったデジモン「ハイビジョンモニタモン」が降りてきた。
「奴らですな！！」
「ああ！！」
ベルゼブモンとハイビジョンモニタモンは、着地するや否や素早い動きで、ベルゼブモンはディエチを、ハイビジョンモニタモンはクワットロを捕まえた。
「観念してもらうぞ！！」
「逃がさないですな！！」
しかし、その後すぐに驚くべき事が起こった。突如現れた高速飛行する何かが、捕まえた二人を連れて行ったのだ。
また、ルーテシアの掴まっていた現場でも、ルーテシアとアギトが消え、尚且つレリックの入れ物が奪われる、という大騒ぎが起こっていた。

そして、事件の現場より少し離れた場所では、
「トーレ姉さま、助かりました。」
クワットロが自分をここまで運んだ短髪の女性に言った。
「まったく、キサキがうまくカバーしてくれたから良かったものの、あのまま捕まったらどうなった事か。」
トーレと呼ばれた女は、クワットロにこう言ったが、
「まあまあ、こうしてレリックが調達できたんですから。」
水色の髪の少女がこう言って、持っていた箱を開けた。しかし、中

には何も入ってなかった。
「何も入ってませんね。」
「そんなはずはない、ちゃんと確認したのに。」
仲間たちから、何とも言えない目で見られた少女は、自分の見た映像をもう一回検めて見ることにした。
映像を見てるうちに、トーレが突然、
「レリックはここだ。」
バリスタモンの腹部を指さして言った。
「え、そこの熱反応は動力部の熱じゃ。」
少女がこう言うと、
「よく見ろ、こことここと、二つも反応もあるだろう。」
頭と腹部の両方を指さして、トーレは説明した。この手の機械は腹部にはあまり重要なパーツを使わず、人間のように頭に思考を司る部分を入れるものであり、そもそも腹部はスピーカになっているのでそこまでの熱は放出しない、と。

そして問題の現場では、ヴィータが本部へ今回の事の報告を行っていた。そんな中、
「タイキ、モウダシテイイ？」
突然バリスタモンがタイキにこう訊いた、
「ああ、そうだな。もう周りに奴らはいないし。」
タイキがこう言うと、バリスタモンの腹部が開き、てっきり持って行かれたと思われていたレリックが出てきた。
「え、なんでレリックがあるんだよ？」
ヴィータがこう訊くと、

「最初はキャロの帽子の中に隠そうと思ったんですけど。探知されても他の何かと判断されるだろうから、ってバリスタモンの中に入れておいたんです。」
タイキに変わりティアナが説明した。
「でもまあ、みんな無事でよかっ……」
突然、タイキが倒れた。その場にいたみんなは、一部を除いて一様に驚いた。ヴィータは、どこかやられたのか、と大慌てだが、
「やっぱり午前中だけでラグビーとバレーをこなして、すぐさまこの任務じゃあ体力が持たないか。」
今日一日タイキに付き添っていたディアナモンは、半ば予想が済んでいたようで呆れながら言った。
仕方ないので、タイキはこのままヘリに乗せて機動六課隊舎まで帰し、彼の部屋で休ませておくことになった。

その後ヴィータと新人四人は、外回りもかねて歩いて帰ることになったが、その途中、突然大きな音と悲鳴が聞こえてきた。その方向を見ると、
「おい！今すぐ金持って来い！！でないとこのガキの命はねえぞ！！！！」
覆面を被った男が、傍にいる子供に凶器を当てて民家に立てこもっていた。
その子供の母親と思われ女性が必至になって助けを求めているが、皆一様に、
「無理ですよ、管理局に頼んでください。」
とか、

「急ぎの用があるんです。」
とか言って、素早くその場からいなくなってしまう。薄情ではあるが、ある意味では普通の反応である。
この様子を見ていたヴィータは、
「薄情な奴らだな、こうなったらアタシが。」
と、いの一番に飛び出そうとした。しかし、
「やめておきなよ。」
突然現れた少年に止められた。
「君の服装から考えて大方、管理局だその子を放して大人しく出て来い、って言って、出てこなかったら実力行使でどうにかするつもりなんでしょう。そんな事すれば人質の子供はただじゃ済みませんよ。」
言ってしまえば、ヴィータは見た目が幼いので、少年は気を使って止めたつもりなのだろう。と言っても、彼にもこの事態をどうにか出来るとは、皆にも思えなかった。
（これがいわゆる”男の娘”か。）
彼の容姿は、その場にいた者が全員こう思うほどの、華奢な体付きと色白で可憐な顔立ちをしており、ぶっちゃけると女の子にしか見えない。そんな彼の表情には、絶対の自信が満ちていた。そして、
「あなたがたのやり方では埒が明きません、ここは俺に任せてください。」
少年はヴィータ達にこう言い残し、近くにあった工務店に行くと、
「すいません、ちょっと貸して下さい。」
店主にこう告げて、持っていたコートのような上着に黒いペンキを塗り始めた。ちなみにこの世界のペンキは、色がはっきりして塗った後すぐに乾くばかりか、水で洗えば簡単に落ちてその上他に色が移らない優れものなのだ。
ペンキを塗り終えると、少年はそのコートを羽織り、首から十字架のペンダントをかけた。
「なるほど、尼さんになりすまして近づこうという事か。」

様子を見ていたティアナは彼の行いを分析しながら言った。
「確かにあの姿なら一番警戒されにくいですね。」
エリオも関心しながら言った。
そのうちに、白いフードを被り見た目は完璧に尼さんになった少年は、近くのコンビニからお菓子やら弁当やらを沢山持ってくると、民家の前に立った。
「私は尼です。ご覧のとおりあなたに食べ物をお持ちしました。」
少年はこう言って胸の前で十字をきると、持ってきた食べ物が入ったかごを見せながら言った。
「……そうか、入りな。」
男は少し考え込むと、少年にこう告げた。
そして、少年はゆっくりと民家の中に入って行った。

「やった、一つ目の問題はクリアだ。」
その様子を見ていたスバルがこう言うと、
「あとはどうやってあの子を救出するかですね。」
キャロがこう言って、隣のヴィータを見た。しかしヴィータは難しい顔をして考え込んでいた。
（今になって思えば、アタシはほんとに短慮すぎる）
今起こっていることも、冷静に言えば彼の言うとおりだった。あのまま自分が行っていれば、彼が言うとおり「管理局だ、その子を解放しろ」とでも言っていたはずだ。その結果頭に血が上った男は子供に危害を加えていただろう。
他にも、先ほどの現場でもそうだった。ルーテシアの言った言葉の意味を冷静に考えていれば、自分たちだけでもあの自体をどうにかできたはずなのだ。今回はマルチグレイモンがいたから良かったも

のの、もしマルチグレイモン、そもそもあの場にタイキがいなかったらどうなっていたか。ヘリを砲撃され、救出した少女、シャマル、ヴァイス、三人の命が失われていただろう。
考えてみれば、次々に反省すべき点が浮かんできた。
「あの、ヴィータ副隊長？」
今になって、キャロが顔を覗き込んできた事に気が付いた。
「彼、民家の中に入りましたよ。」
エリオにこう報告され、
「とにかく、何があってもいいようにいつでも突入できるようにしておけ。」
みんなにこう指示し、アイゼンを構えた。

そして、民家の中の少年は、問題の子供と男がいる部屋に着いた。
「よし、持ってきたものはそこに置いておけ。」
男にこう言われたので、言うとおり指定された場所にかごを置いた。
その時、うっかりペンキを塗り忘れた部分があらわになった。
「テメェ！だましやがったな！！」
その途端男は凶器を持って少年に飛びついた。しかし少年は少しも慌てず、着ていたコートを男に投げつけた。
外で待ち構えていたヴィータ達の耳に、中で何かが暴れているよう

な音が聞こえてきた。
「ああ、ばれちゃったの？」
スバルが驚くと同時に、
「お前ら、突入するぞ！！」
と、ヴィータは叫んだ。
すると、窓ガラスが割れて覆面を被った男が飛び出し、その後から少年が飛び出してきた。少年はそのまま空中で男を捕まえると、両腕を後ろから掴んで思いっきり引っ張った。
男は今の一撃で両肩がはずれ、受け身が取れないまま地面に落ちた。
その後、人質となっていた子供も入口から出てきた。
「よかった、子供にけがはないみたいですね。」
様子を見るにとどまったスバル達は、皆一様に胸をなでおろした。
「あれ？あいつどこ行った？」
ヴィータは慌てて周りを見回したが、肝心の少年の姿はどこにもなかった。

次の日、ミッド全域で発刊されている新聞は、皆一様にこの記事が載っていたという。

第十一話　機動六課のとある休日、後篇（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン
「今回のテーマは、この小説のクロスハートのオリジナル構成員ナンバー3「グラウンドラモン」だ。グラウンドラモンは翼が変化した巨大な手を持つ地竜型デジモン。必殺技は背中の腕で相手を押しつぶす「スクラップレスクロー」尾の先端についているハンマーで相手を殴る「メガトンハンマークラッシュ」全身を地表にぶつけて地割れを発生させる「ギガクラック」イメージCVは「中井和哉」さんだ。」

モニタモンA
「背中の腕は、高速で地面を掘り進むためのものですな。」

モニタモンB
「さらに、鱗にはファンロン鉱が含まれ、とても頑丈ですな。」

モニタモンC
「どうやってクロスハートに入ったの？」

カットマン
「設定の上では、デジタルワールドのドラゴンランド出身。ドラコモンと一緒に穴を掘っていた所を見つかり、ドルッピクモン討伐後にクロスハートに入ったんだ。ちなみにその後の戦いで、思っていた以上に強かったことに皆驚いたんだとか。」

全員
「それじゃあまたね。」

次回予告
機動六課に査察が入ることになった。はやて達はなんとかタイキの存在をごまかそうとするも、厄介な相手が査察に現れた。

次回「事を知る者」

ふと思いついた話（前書き）

他の小説作品を見ている時に思いつきました。
後悔はしていない、はず。

ふと思いついた話

その女は、朦朧とした意識の中で、自分に必至で呼びかける少女を見ながら思った。自分は馬鹿らしい事をしていたな、と。ただ自分の愛娘に会いたい、ただそれだけで一人の少女の人生をメチャクチャにし、あげくの果てには一つの世界の存亡を危ぶめた。万が一このままアルハザードにたどり着けても、そのまま自分は死を迎えるだけであろう。
落ちたら最後、二度と上がれない虚数空間に落ちながら、最後にこう思った、
（フェイト、これからは幸せになってね）
彼女の名はプレシアと言った。この後から有名になる「プレシア事件」の首謀者である。
この時彼女は気づいていなかった、偶然開いた異空間の扉の中に落ちて行ったことを。

「あーあ、お腹空いたな。」
やわらかい日差しの降り注ぐ森の中を、変わった格好をした一人の少女が歩いていた。スクール水着のような服の上に豚を彷彿させる着ぐるみのような装備を身に着けた彼女はデジモンであり。名前は「チョ・ハッカイモン」である。
お腹が減るとすぐに狂暴化する性格を変えるため日々修行を重ね、今では腹八分目までは我慢できるようになっている。

彼女は偶然、倒れている人影を見つけた。
（だいぶ脈がうすい、息もかすかだし、人間の世界での不治の病にかかってるな。）
倒れている女の脈拍や呼吸を確かめながらチョ・ハッカイモンは思った。そして周りを見回すと、特殊な液体で満たされ、中に少女が一人浮かんだケースが転がっているのを見つけた。
「こんなかの子供はもう死んでるな。でもなんでこんなとこに？」
チョ・ハッカイモンは一応考えたが、何も浮かばないので、
「しょうがない、サンゾモンさんの所に持っていこう！」
と言う事になり、倒れている女と謎のカプセルを担ぎ上げたチョ・ハッカイモンは、駆け足で遠くに見える寺院のような建物へ向かっていった。
彼女が担いでいったのは、元いた世界では死んだと思われているプレシア・テスタロッサだった。

チョ・ハッカイモンにより担ぎ込まれたプレシアは、その後しばらくしてから目覚めた。驚くことに今まで死に掛けだったとは思えない程に気分は清々しく、所謂”生き返ったような気分”だった。
「お目覚めになりましたか。」
自分の寝ている布団の傍に座っていた、僧服を身に着けた美しい女性が訊いた。
「…ええ、まあ、」
プレシアは簡単に返した。そして、ここはどこで、自分はいったいどうなったのか、と考えた。すると、
「申し遅れました、私は「サンゾモン」ここはデジタルワールドの

「シュラインゾーン」です。」
プレシアが訊くよりも早く、サンゾモンが答えた。
（でじたるわーるど？しゅらいんぞーん？）
聞いたこともない単語を沢山並べられたプレシアは混乱した。元々自分は「ジュエルシード」を使って次元震を発生させ、その時の衝撃で空間に穴をあけ「アルハザード」へ行こうとしたのだ。
「ああ、それについてはこれから詳しくお伝えします。まずは…」
相手が混乱していることを悟ったのか、サンゾモンは詳しい説明を行おうとした。その途端、勢いよく扉が開き、誰よりもプレシア本人が驚く人物が入ってきた。
「ママー！！」
元気よく入ってきたのは、綺麗な長い金髪の髪を二纏めにした少女。見た目はフェイトと瓜二つな彼女の名は「アリシア」かつての事故で死んだ、フェイトの姉である。
「え、アリシアなの？なんで？」
プレシアは目を疑った。もう二度と見れないと思っていた愛娘アリシアが元気に動き回る様子を自分は見ているのだ。これは夢なのではないかと思い何回か自分の手の甲を抓ってみたが、紛れもなく現実に起こっている事だった。
ふと傍にいるサンゾモンを見ると、
（あ、えーと、これから詳しく説明します）
と言いたげな顔をしていた。
「ああ、ここにいやがった。」
続けて、全身黒い毛で覆われた、サルのような男が部屋に入ってきた。プレシアが、豊臣秀吉はこんな感じの人だったんだろうな、と考えていると。
「どうしたのですか、ゴクウモン？あなたにはアリシアの面倒を見るように言ったはずですが。」
怒っている感じはないが、それでも自分に後ろめたい事があれば気圧されてしまいそうな口調で、サンゾモンは入ってきた男に訊いた。

「どうしたもこうしたも、どこで聞きつけたのか母親が起きたって聞いた途端、会いに行く、って言って聞かなくて、こんなに早くここを嗅ぎつけるとは。」
ゴクウモンと呼ばれた男は、息を切らしながらサンゾモンに言った。
「おじさんだらしないなぁ。」
アリシアがゴクウモンにこう言うと、
「あんまりおいたがすぎると、おっちゃん怒っちゃうぞ。」
と、返された。その途端、
「それはやだ！！」
アリシアは即答に近いタイミングでゴクウモンに言った。
プレシアは、アリシアの様子を見れたのは良かったが、話が進まないので、
「アリシア、ママはこれからこの人と話があるの。だからしばらくはこのおじさんと一緒にいてちょうだいね。」
と、アリシアに言い聞かせた。
「……分かった、行こうおじさん。」
アリシアはしばらく考え込むと、しぶしぶ了承したようで、ゴクウモンと部屋から出て行った。
「おじさんを困らせないようにね。」
プレシアは最後にこう言っておいた、
「さて、それでだけど。」
プレシアがサンゾモンに言うと、
「分かりました、ではこれからこの世界について説明しますね。」
サンゾモンはデジタルワールドの説明を始めた。

デジタルワールドとは、人間がインターネットを普及させるより前から存在する、あらゆる事物がデータで構成された世界であり。人間のインターネットは、デジタルワールドに存在する”使われていない場所”を利用した物であること。
元々は人間界同様に一つの世界だったが、しばらく前にバラバラに

分解し、今では土地の種類ごとに分かれた状態になっており、ここには寺やそれに準ずる施設が集まっているため「シュラインゾーン」と呼ばれていること。

「それは分かったけど、どうして私の病気が治っているの？それにあの子が生き返ってる理由は？」

次にプレシアはこう訊いた。

「私のデジコアには、あるゆる難病を完治させ永遠の命を与える力があるのです。あなた様とアリシアに少し分け与えたのです。」

おかげで少し寿命が縮みましたけど、とサンゾモンは笑顔で言った。

「最初は勝手なことをしてしまったかと思ったのですか、」

サンゾモンはこう言っているが、プレシアに取っては願ったり叶ったりだった。元々、彼女を生き返らせるためにアルハザードを目指したのだ。結果的にたどり着いた場所は違ったが、結果オーライと言う事になる。

しかし、問題はこの後である。彼女は最後に自分に「妹がほしい」と言った。彼女にとって妹に当たる人物がいて、自分がその子にひどいことをしていたと知った時、彼女はどう思うだろうかと。

「よろしければ、私が話を聞きますが。」

サンゾモンが話しかけてきた。

プレシアはふと外に目をやった。外では、ゴクウモンと一緒にバスケットボールのコートと思われる場所でサッカーボールで遊んでいるアリシアが目に入った。

「ええ、聞かなければ良かったと思わないならね。」

プレシアはこう告げて、これまでの事を簡潔に話した。

ある時、死んだ娘を蘇らせようと、本人の遺伝子を培養し一人の少女を生み出した。見た目や声は一緒だったが、性格や癖はまるで別人だったために、彼女を娘と扱わず、日々虐待と言っても過言ではない接し方をしていた事。

そして、失われた技術が多く揃うと言われる世界アルハザードを目指し行動を起こしたが、結局最後はこれまでひどい扱いをしていた自分の娘に止められてしまい、その後虚数空間に落ちて今に至る事を。

プレシアが話す間、サンゾモンは嫌な顔をせず最後まで聞いた。そして、彼女が話し終えると、

「そうなのですか。」

と、言った。そして、

「大丈夫でしょう。あなたがその事をアリシアに話した後、機会があればその娘も同じように娘と扱ってあげれば。あなたが目覚めるまであの子と何回か話ましたが、アリシアはとても聡明で寛容の心を備えた方だと分かりましたから。」

と、プレシアに言った。

「そう、機会があるならね。」

プレシアがこう呟くと、

「そういえば、これからについて何かあては？」

と、サンゾモンが訊いた。当然ながら、今のプレシア母娘にこれからのあてが有るはずはない。

「最近はバグラ軍なる組織がデジタルワールドの各地を侵攻していますし、よろしければこちらにとどまって下さりませんか。」

サンゾモンはプレシアにこう告げた。なので、プレシアはアリシアと一緒に、元の世界に戻る算段が付くまで、シュラインゾーンにとどまることになった。

その後、プレシアはデジタルワールド内で科学者となった。バグラ軍に対抗する手段を模索するため、お忍びで各地を回り古文書などを調べ、ちょうどデジタルワールドにタイキ達がやってくる少し前にデジクロスについて発見し、それを可能にする機械「クロスローダー」の仕組みを考え出した。しかし何かの皮肉か、その技術は何故かバグラモンの手に渡り、結果的に「ダークネスローダー」制作の参考になってしまったらしい。
他にも、シュラインゾーンの中では医者としても活躍し、多くのデジモンから「プレシア先生」と親しまれるようになった。

アリシアは、ジェネラル兼戦士としてシュラインゾーンで育てられた。何故かと言うと、サンゾモンのデジコアの力で復活した彼女は、少しばかりであるがサンゾモンの力が使えたので、それを皆の役に立てたいと皆に言ったのだ。言うまでも無くプレシアは反対したが。それでも、アリシアは日々努力を続けてたくましく成長していった。

「えーと、これは5の√8だよね。」
「そうじゃぞい、でもどうせなら10の√2の方が正しいんじゃマキ。」
プレシアから怠るなと言われた勉強については、かつて人間の子供と一緒にデジタルワールドを旅したことがあるというデジモン「ボコモン」から教わり。

「えーと、目ばかりを頼らず心の目を頼る。」

「そうそう、その間にも状況把握は怠るなよ。」
武術に関しては、ゴクウモンやサゴモンの指導を受けた。
そして、彼女に取ってパートナーと呼べるデジモン「ギルモン」に出会った時、シュラインゾーンに危機が訪れた。

これまではデジタルワールド内で唯一平和だったシュラインゾーンだったが、ある時バグラ軍の将「タクティモン」が大軍を率いて攻めてきたのだ。軍の中にはドルルモンもいた。
ゴクウモンを始めとする、戦闘能力のあるデジモン達が必至で応戦したが、あっという間にバグラ軍の兵士達にやられてしまった。
「うわぁぁぁ！！」
「ちっ、チョ・ハッカイモンでもだめか。」
たった今、皆の中でも特に若く力も強かったチョ・ハッカイモンがドルルモンにやられた。
「どうしよう、とんでもない事態に、」
アリシアは心の中で思った。自分もこれまでずっと戦闘訓練を重ねてきたが、教え主であるデジモン達がやられた以上、自分が勝てるどうりは無い。ギルモンも力自体は強いが、それでも日頃から実践を繰り返すデジモンには勝てないだろう。
「悪しき者たちよ、ここは御仏に護られた神聖な場所です。」
すると、突然どこからかサンゾモンが現れ、その途端バグラ軍の兵士達が何かを避けるように動き始めた。サンゾモンの「無限弾幕心経」である。これにより、バグラ軍の兵士の目には、多数の数珠が襲い掛かってくるように見えているのだ。
「猪口才な。」

しかしタクティモンは平気なようで、持っている刀を地面に突き立てた。その瞬間、大きな衝撃波が発生し、サンゾモンは大きくふっ飛ばされた。
その様子を見ながらアリシアは心の中で怒っていた。ここのデジモン達は何もしていない、ただ普通に平和に暮らしていただけなのだ。それなのに勝手な理屈をつけて攻撃をしかけてくるバグラ軍に。
（この力、前にも）
アリシアの隣のギルモンは、アリシアの中から溢れる力を感じながらこう思った。
「アリシア、一緒に戦おう！！」
ギルモンはアリシアにこう告げた、
「アリシアが一緒に戦おうと思えばできるはずだよ。」
アリシアは、ギルモンの言葉を聞きながら思った。自分だって戦士なのだから、戦わずしてなんとすると、
「うん！行くよギルモン！！」
そして、母親のプレシアの作ったクロスローダー初号機を掲げた、

「大丈夫か？」
「早く安全な場所へ。」
ふっ飛ばされたサンゾモンを担ぎながら、プレシアと隣の紫の人型のドラゴン「ストライクドラモン」は言った。
「にしても、あれは何だ？」
ふと、遠くの戦場を見たストライクドラモンはプレシアに言った。
その場所からは、とてつもない光が発生していた。

（アリシア）
様子を見ながらプレシアは思った。

「うわぁぁぁ！何が起こったんだ！！」
ゴクウモン達は勿論、バグラ軍側も驚いた。アリシアが不思議な機械を掲げると同時に、彼女とギルモンを巨大な光が包んだ。そして、その光が一つになると。
「ギルモン、超進化！！」
ギルモンは背中には真紅のマントを身に着けた騎士の姿に変わった。
「デュークモン！！」
その様子を見ていたタクティモンは、
「何？！一瞬で進化した？馬鹿な、私がこの姿になるのにどれほどの年月を費やしたか。」
と、驚いた。
「うおぉぉぉ！！」
デュークモンは右腕に装備した聖槍「グラム」を構えて突進した。
「くっ！」
タクティモンは自分の刀「蛇鉄封神丸」で受け止めた。
「な、なんて力だ。」

遠くで様子を見ていたゴクウモン達は、
「すごいな、あのデュークモンとか言う奴、タクティモンと互角に戦うなんてな。」
と、思っていた。
「というか、アリシアはどこいった？」
周りを見渡しながら、黒い河童のようなデジモン「サゴモン」が言った。
その時である、突然巨大な岩が降ってきた。
「えええぇぇぇぇ！！？？」
デュークモンとタクティモンの戦いの衝撃で飛んできたことは簡単に予想できたが、それでも皆驚いた。
岩が地面に落ちる瞬間、デュークモンの槍が飛んできて岩を砕き、細かくなった岩をデュークモンの盾「イージス」が防いだ。
「大丈夫か？」
その場に居合わせた皆にデュークモンはこう訊くと、すぐさまタクティモンに向かって行った。
「あいつ、もしかしてアリシアか？」
皆一様にこう思った、
そういえば、人間とデジモンが合体することで、今までにない力が生まれたという伝説があったっけ、と

「ファイナルエリシオン！！」
デュークモンはイージスを構えると、そこから聖なる光を迸らせた。

「壱の太刀！！」
タクティモンは自分の刀を地面に突き立て、発生させた衝撃で光のエネルギーを切り裂いたが、軌道をそれた光は自軍の兵士達の元へ飛んで行った。
「ロイヤルセイバー！！」
「鬼神突！！」
デュークモン、タクティモンは決着を付けるため、それぞれの得意技をぶつけ合った。そして、二つの影が通過した後、タクティモンは背中に装備した銃を使って、花火のようなものを打ち上げた。
「信号弾か！黒、白、黒、一時撤退だ！！」
上空を見ていたドルルモンは、自軍の兵士達に叫んだ。そして、兵士達を逃がしつつ後退を開始した。
最後にタクティモンは、鎧の傷が付いた部分を押さえながら。
「この痛み、決して忘れぬ。」
こうデュークモンに言い残して、その場を去って行った。
「やったか。」
デュークモンがこう言うと、デュークモンが光に包まれ、中からアリシアとギルモンが出てきた。ギルモンはともかく、アリシアは疲労困憊のようで、出てくると同時に倒れた。
「まったく、大した奴らだな。」
二人の元へ駆け付けたゴクウモンは言った。
「とにかく、今は休ませてあげよう。」
ギルモンをチョ・ハッカイモン、アリシアをサゴモンが担いで、皆はサンゾモンのいる寺へ戻って行った。

この後、シュラインゾーンのコードクラウンは「ダメモン」に盗ま

れてしまったが、相変わらず平和なゾーンとして存在し続けた。
バグラ軍統合後は「サイバーランド」の一部になったが、プレシアがサンゾモンの力を再現する結界を開発し、寺の存在を「スプラッシュモン」や「ドリッピン」達にばれないようにしていた為、唯一平和な場所となった。
その後、彼女たちもタイキとある事件に関わることになるが、それはまた別の話。

ふと思いついた話（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー―！！」

カットマン
「さて、今回のテーマはグレイモン。グレイモンは恐竜型のデジモン。必殺技は、灼熱の火炎を浴びせる「メガフレイム」頭の角で突進する「ホーンストライク」しっぽの刃物で相手を斬る「ブラスターテイル」だ。」

モニタモンA
「とても狂暴性が高く、同族のデジモンですら食い殺す狂暴なデジモンですな。並大抵のジェネラルでは使役するのは不可能ですな。」

モニタモンB
「ちなみに、かつて登場したオレンジ色のグレイモンと区別をつけるため、ゲームではオレンジ色の方は「グレイモン　レジェンド」と呼ばれていますな。」

モニタモンC
「レジェンドと今のグレイモン。どっちが強いのかな。」

全員
「それじゃあまたね。」

第十二話　事を知る者

機動六課のフォワード四人が、一度に二つの事件に立ち会った日の夜の事である。
「さて、あれとこれも買ったし後は、」
夜の闇のように黒い髪を長く伸ばした、少女のような容姿をした少年、以前ヴィータ達の前に現れた少年が買い物袋を持って人通りの少ない通りを歩いていた。
袋の中身を確認し、いざ家へ帰ろうとした時、
「プロレスラーのドラゴンマスクとお見受けします。」
突如頭上から声が聞こえた。
「あなたで確かめたいことがあります。」
そこにいたのは仮面を付けた少女だった。
「……よく分かりましたね、公式的なデビューはしていないのに。」
少年は少し考え込んだ後、こう言った。マスクを付けて戦うプロレスラーにとって、素顔が知られるのは恥であることを考えた上である。
「それで、確かめたいことって？」
少年は買い物袋を適当な場所に置くと、少女にこう訊いた。
「あなたと私、どちらが強いかです。」
少女はこう答えると、少年に装備を付けるように言った。しかし、
「そんなものは無いよ。」
少年はこう言って、構えを取るだけだった。
「っていうより、まだ子供じゃん。なんでこんな事をしてるの？」
少年が少女にこう訊ねると、
「強さを知りたいんです。」
少女はこう答えた。
「ああ、そうです…か！！」

少年はこう言うと、ほぼ全力に近い初速で少女に近寄り、キックの連打を放った。しかし、少女は見事なフットワークでそれをかわした。
（凄いな、僕の不意打ちを軽くかわすなんて）
「強さを知りたいってどういう意味だ！！」
少年がこう訊くと、
「言葉通りです、そして私はもっと強くなりたい。」
と、少女は答えた。
「だったらこんな問題行動してないで、真面目に練習してればいいじゃん！！」
少年のいう事はもっともである、だが、
「私の戦う意味は、表舞台にはないんです。」
少女はこう言って、鋭い突撃を放った。
（ちっ、速い）
それでも少年は、相手の攻撃の威力を逆に利用し、少女を投げ飛ばした。
「列強な王達をすべて倒し、このベルカの地に覇を唱えること、それが私の戦う理由です。」
投げ飛ばされた後、受け身を取った少女はこう言った。
（もしかしてこいつは？）
少年はこう考えると、
「改めて訊くけど、お前は”覇王イングヴァルト”か？！」
と少女に言った、
「はい。」
と、少女が言うと、
「なら竜王エイリーン、推して参る！！」
少年はこう言って、少女に飛びかかって行った。少女は迎撃しようと構えを取ったが、少年の方が途中で倒れてしまった、訳ではない。前転で少女の足の間をくぐると、腰を捕らえブリッジの容量で投げるプロレス技「ジャーマンスープレックス」をお見舞いした。

「このままでは終わりません。」
しかし覇王を名乗った少女も負けてはいない、竜王を名乗る少年をバインドで捕らえると、
「ベルカ時代の戦いはまだ、私の中では終わってないんです。」
こう言って、渾身のパンチを放った。
「覇王断空拳！！」
パンチは少年の腹部に直撃し、少年は大きくふっ飛ばされた。しかし、大技を喰らった後激しく動いた反動か、少女も気を失って倒れた。
「あーあ、ジャムパンつぶれちゃった。」
少年は大きくダメージを負ったようだが、腹部に仕込んだジャムパンで衝撃を和らげたようだ。少年が少女に近づくと、
「指一本触れさせないぞ！！」
建物の影から、耳がやたらと大きい白い生き物が出てきた。
（これは、テリアモンか）
少年は謎の機械を生き物に向けてこう言うと、とある住所を言って。
「そこにいけば、うまく保護してもらえますよ。お前みたいな生き物について詳しい奴がいるからさ。」
と、その生き物に言い残して、買い物袋を持って去って行った。その後、白い生き物は少女を担いで、言われた住所に向かっていった。

次の日である、
「まったく、昨日はあれ以来大きな事件が無かったから良いものの。」

タイキは朝一番からヴィータに説教されていた。昨日、いきなりぶっ倒れたことについてである。
「ヴィータ副隊長、そのへんで。」
新人四人も止めようとしているが、ヴィータは聞こうとしない。
「体の調子をしっかり整えられないようじゃ……」
時間的に、説教開始から３０分になろうとした時である。
「あの、ヴィータちゃん。」
なのはがやって来た、
「あ、なのは、どうした？」
と、ヴィータが訊くと、
「実はタイキ君に会わせたい人がいるんだけど。」
なのははこう答えた。

なのはがタイキを連れて、問題の人物のいる部屋にやって来た。
「でもなんで俺に？」
こういうのは普通、部隊長である八神はやての役目じゃないのか、とタイキが訊くと、
「その人に同伴しているのがね、タイキ君に見てもらった方がいいタイプだから。」
なのはがこう言って扉を開くと、今まで寝ていた問題の人物は起きていた。そして、タイキと目が合うや否や、
「あー！！」
と、タイキと二人そろって叫んだ。
「工藤タイキ！！」
「えーと、パインアップル？」

「アインハルトです！！」
この様子を見ていたなのはは、
「あのタイキ君？もしかして知り合い？」
と、タイキに訊いた。
「えーと、この間出た格闘技の大会で俺に負けたらしく。それ以来雪辱を果たそうとこうして……」
タイキが答えて、
「っていうか、なんでここにいるんだ？」
と訊いた。
「僕が連れてきたんだ。」
すると、アインハルトの寝ていたベッドの影からやたらと耳の大きい生き物が出てきた。
「え、デジモン？」
「ちょ、テリアモン。」
タイキもアインハルトも驚いた、
「これで分かったでしょう、タイキ君に合わせた理由。」
なのははこう言って、制服のポケットから薄緑色のクロスローダーを取り出した。
「え、何時の間に？」
何時の間にクロスローダーを取られたのかと、アインハルトは驚きを通り越して慌てた様子になっている。

一方、部隊長の八神はやてはと言うと、
「うー、どうしよう。」
頭を抱えて困っていた。隣のフェイトも難しそうな表情をしている。

何故かと言うと、明日やってくる査察をどうするかで悩んでいるのだ。
「どうしよう、うちはただでさえツッコミどころ満載なのに。」
はやての悩みの種はこれだ、自分たち機動六課はおろか下手すると管理局全体の戦力と同等の力がある軍隊を所有するタイキをどうやって誤魔化すかである。精鋭の集まりとはいえ、そんな規格外の戦力を持ち合わせていては、明らかな大目玉になる。しかも、その査察をよこすのはかのレジアス中将である。恰好の情報になってしまうだろう。
「うーん、何とかして正当な理由でタイキをここから遠ざけられればいいんだけど。」
フェイトがこう言った。
(事件を起こすわけにはいかないよね。そんな事したら査察が延期になる上、さらに大目玉だ)
フェイトがこう思っていると、
「フフフ。」
はやてが突然笑い出した。
(まったく、このタヌキ)
フェイトは心の中でこう呟いた。
「うち、ええ事思いついたで。」
はやてがこう言うと、
「ダメです!」
即答のタイミングでフェイトがこう言った。
「なんでや?うちはまだ何も言ってないで。」
はやてが文句を言うと、
「大方自分たちで事件をでっち上げてそれの対処にタイキを向かわせるか、自分がタイキをデートに連れて行くとかいうんでしょう。」
フェイトはこう言い放った。はやては少し考え込むと、
「なんでばれたんや?」
と言った。

（っていうか、当たったー？！）
フェイトが心の中で呆れていると、
「フェイトちゃん、今大丈夫？」
なのはから通信が入った。通信の内容は、昨晩保護した少女についてである。
なのはから、名前はアインハルト・ストラトス、ベルカ時代の王様「覇王イングヴァルト」の末裔であること、デジモン持ちである事、タイキと少なからず関わりがある事を訊いたフェイトが、
「分かった。」
と言って、通信を切った途端、
「閃いた！」
まるでタイキのようにこう言うと、ダッシュで部隊長室から出て行った。

そして、アインハルトは今も同じ部屋にいた。
（私は何をしてるんだろう。やらなきゃいけない事が沢山あるのに）
アインハルトがこう考えていると、
「もーまんたい。」
頭上のテリアモンがこう言った。
「ところでテリアモン、あなたが良く言う”もーまんたい”ってなんなの？」
折角なので、テリアモンの口癖について訊いてみた。
「気にするな、気楽に行こう。」
テリアモンがこう言うと、扉があいて八神はやてが入ってきた。

「気分はどうや？」
はやては部屋に入るや否やこう訊いた、
「まずますです。」
アインハルトがこう答えると、
「単刀直入に言うな、図々しいかもしれへんけど、今回の事を見逃してあげるから、うちの頼み聞いてくれんか？」
はやてはアインハルトにこう言った。
「それでなんですか？」
とりあえずアインハルトはこう答えた。このままいても事態は何も変わらないので、変化を求めてである。
「実は明日な…して、……してほしいんや。」
はやては自分のお願いを耳打ちで伝えた。その途端アインハルトの顔全体が真っ赤になったのは言うまでもない。
はやては、明日一日タイキとデートしてきてほしい、と言ったのだ。

そして次の日、いよいよ機動六課に査察が来る時間になった。当然今機動六課隊舎にタイキはいない、アインハルトが（半ば強引に）デートに連れてったからである。
「こないなぁ。」
はやては玄関に立ったまま、かれこれ３０分待っていた。因みに時間では、本来の時間を１５分過ぎている。
やがて、コートを着込み、帽子を被った少年がやって来た。
「初めまして、八神はやて部隊長ですね。自分は今回の査察を担当します、クラウド・クラウディウスです。」

少年はうやうやしく敬礼すると、
（本当はそちらの粗探しにきたんですけどね）
はやての手を取りながら、はやてにしか聞こえない小さい声でこう言った。
（なんやこいつ）
はやてはこう思った。自分自ら今回の目的を話すのは、何か裏がありそうだと考えたが、それを出すわけにはいかず。
「ところでお一人なんですか？」
と、訊いた。
「ああ、他の連中は道に迷ったようで。」
クラウドはカラカラと笑いながらこう言った、そして、
「まあそちらも忙しいでしょうし、こちらとしても早く帰りたいからさっさと済ませましょう。」
と、はやてに言った。
（ほんとうになんなんや、こいつ）
はやては完全に調子を狂わされた。

クラウドは、機動六課隊舎内を回りながら考えていた。
今回はレジアスより、絶対に教会やほかの連中を叩ける材料を持って来い、と言われているのだ。
（悪いけど、あんたの思い通りにはいかないぜオッサン）
クラウドが心の中でこう思っていると、ふと一つの部屋が目に付いた。
「あの、ところでこちらは？」
と、はやてに訊くと、
「ああ、ここは実験室です。今は使用中で、事件の重要なサンプル

を調べてるんですよ。」
と、はやては答えた。
「その重要サンプルが何か教えては……もらえませんよね。」
クラウドは少し考えてこう言った、
「まさかとは思いますけど、この世界に存在しない生命体の体の一部とか言いませんよね？」
その途端、はやての表情が一瞬凍りついた。だがすぐに、
「まだ捜査中の段階なので、詳しい事の説明はできないんです。」
と、クラウドに言った。

因みに、クラウドの言ったことはあまり間違っていない。実験室内ではワイズモンとルーチェモンが、インペリアルドラモンの爪の欠片を調べているのだ。
「これは、」
爪の欠片を調べていたワイズモンは何かに気が付いた。
「これは特殊な力で一時的に増強された爪だ。おそらく。」
ワイズモンはこう分析したが、
「だが、いったいどんなデジモンが何の力を受けたんだ、これはタイキやキリハとは違う。」
最後にこう言った。

「それじゃあ、今日はこれで失礼します。」
査察も終わり、クラウドは最後はやてにこう言った。

（俺の本当の名はグランドラクモン。デジモンだ。今後ともよろしく）
そして、その場から去ってしばらく後、地上本部に連絡した。
「首尾はどうだ？」
「最悪に決まってるだろ。何もなかった。」
「何もないわけはないだろ。なにか怪しい捜査をしていたとか、」
「なかったよ。」
実際はバリバリあったが、とりあえず黙っておいた。
「んじゃ、俺はこのまま帰りますわ。」
「んな、ちょっとまt。」
相手の都合などお構いなしに連絡を切ると。ある場所へ向かっていった。

「それで、どうだった？」
査察が終わった後、フェイトははやてに訊いた、
「何だかな、完全に調子を狂わされた。なんなんや。」
はやては頭を抱えながら言った。
「とりあえずこちらの弱みは握られなかったはずやけど。実際はどうやろ、完全にこちらの事情を見透かされていた。」
はやては、査察中次々と痛いところをついてくるクラウドの様子を思い出しながら言った。

「さて、それだけど。」
クラウドは、繁華街にある中華店の一つに入ると、あらかじめ待ち合わせていた相手の席に座った。相手は、以前竜王を名乗ってアインハルトと戦った少年だった。
「そちらはどうだった、連中の内部情報は分かった。」
少年がかなり大盛りのラーメンをすすりながらクラウドに訊いた。
「まったくもってメチャクチャな部隊だよ。部隊長は経験浅い若者で、隊長も移籍じゃなくて貸出、部隊長の保有する戦力を除けば後は新人だけ。しかも期間限定のインスタント部隊。」
「いわゆる使い捨て？よくまあ部隊長もやる気になったな。少し問題起こせば即切り捨てられるのに。」
クラウドの説明を聞いた少年はこう言った。
「まあ、こいつ自信これも望んだ結果だと思うぜ。」
クラウドはこう言ったが、その後、
「しかしまあ、ろくな事は起こらないだろう。」
と言った。

第十二話　事を知る者（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー―！！」

カットマン
「さて、今回のテーマはメイルバードラモン。メイルバードラモンは戦闘機のような姿をした猛禽型デジモン。必殺技はエネルギー弾を発射する「プラズマキャノン」上空から敵に襲い掛かる「ナイトホーク」尾で攻撃する「トライデントテール」だ。」

モニタモンA
「普通のデジモンよりも頭がいいため、ただ格闘技が得意なデジモンよりも強いと言われていますな。」

モニタモンB
「常に冷静な性格で、上空から敵を狙う戦法が得意ですな。」

モニタモンC
「デジクロスを行うことで、メタルグレイモンの鎧を構成しますな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告
機動六課の査察中、タイキとアインハルトが何をしていたか。
次回、第十三話「タイキの初デート？」

第十三話　タイキの初デート？

その日、タイキはアインハルトと一緒に街中を歩いていた。その理由を説明するには、昨日の晩にさかのぼる。

昨日の夜七時頃の事である。タイキが自室に戻った時、彼の部屋に机の上に紙が置いてあった。そこには、「用があるので七時半に宿舎の前にきなさい　アインハルト」と書かれていた。
なので、タイキが言われた通りの時間に宿舎の前に行くと、顔を赤くしてブツブツ何かを言っているアインハルトがいた。
「あの、アインハルト？」
タイキがこう訊くと、
「アインハルトで…ああ、合ってるか。」
アインハルトはタイキが来たことに気が付いたようだ。
「タイキ、明日なんだけど、私と……」
アインハルトは単刀直入に言おうとしたが、重要な部分をいう事を憚られてしまった。
（ええいアインハルト頑張りなさい！あなたは覇王なの、これくらいできずにどうする）
そして、心の中のアインハルトに叱咤されていると、
「あのさ、明日何？」
と、タイキが訊いた。
「……明日私とデートしてください！！」
次の瞬間、アインハルトは何かを捨てたような勢いでタイキにこう言った。その瞬間、顔全体が真っ赤になったが、
言われたタイキも、

は、何言ってんのこいつ、
と、言いたげな表情になっている。
「えと、あの、別に何か邪なことがあるわけじゃないんです！実は、」
アインハルトは大慌てで事の次第を説明した。

次の日に機動六課に査察が来るうえに、査察をよこすのは機動六課を目の敵にしている地上本部総司令レジアス・ゲイズなので、タイキの存在が公になると部隊の存亡が危うくなるので、タイキには明日一日正当な理由で町に言っててほしい事を
以前の休みのときは、タイキは全然休みらしくなかったので、この日だけのんびり遊んできてくれとも言っていた、とも伝えた。

「なるほどね、確かにワイズモンからレジアスについては聞いてるよ。でもなぁ。」
タイキはこう言ってアインハルトを見た。口に出しては言えないが、自分がアインハルトを連れて町をうろついていたら色々まずいんじゃないか、と思ったのだ。
「その点については問題ありません。」
タイキの考えを察したのか、アインハルトは、
「武装形態。」
と言って、自分の魔力を高めた。すると、アインハルトの容姿がタイキと同い年くらいに変わった。
「この姿なら問題はないでしょう。」
確かにこれくらいなら問題はない。
「とにかく、明日は午前九時にここへ来ること、分かりました！」
アインハルトはこう言うと、そのまま去って行った。タイキはアインハルトの語気に圧されて、断ることができなかった為、明日一日のアインハルトとのデートが決まったのだ。

そして今に至る、
「居づらい。」
タイキは心の中で思った。建前の上ではデートなのに、さっきから何も会話が無いのだ。
「なあアインハルト、デートはいいけど、予定は決まってるの？」
タイキはとりあえずアインハルトに訊いてみた。しかし、アインハルトは何も答えなかった。何故なら、
「何しよう。」
アインハルトも今回の事を勢いで決定してしまった為、今日一日何をして時間をつぶすか考えていなかったのだ。
それでも、タイキと一緒でさっきから何も会話が無いのはつらいと感じたのか。
「タイキはデートの時何をするのかってわかりますか？」
と訊いた。
「えーと、服や入って服見たり、シネコンで映画見たりするんじゃない。後は見晴らしのいい展望台とかに行って色々話したり。」
タイキはとりあえず自分の知識にある、デートという行動でよく行う行動を言ってみた。
「じゃあ、それで行きましょう。」
アインハルトはタイキが言い終わるや否やこう言った。
（え？）
タイキは驚いた、まさか今回何するか一切考えてなかったのか、と。
「ちょうどあそこに服屋さんがありますね。」
アインハルトの指さす方向には、そこまで大きくない地元の人がよ

く来るようなブティックがあった。

「しかし、我らはなんでこんな事を。」
タイキのデートする様子を、まるで浮気の調査をする探偵のように調べる緑色の影があった。タイキがこの世界に来るにあたって、天野ネネのクロスローダーから移籍したモニタモンである。
「仕方ありませんな。はやて殿に頼まれたのですから。」
「そうだね。」
三人はそれぞれ、映像録画用カメラ、集音マイク、手帳を持っているが、やる気はまるで無いようで全然使っていない。
「それにしても、本来デートという行動には甘ったるい雰囲気が付くものですが、あそこまで清々したデートはありますかね。」
タイキとアインハルトのやり取りは、若いバカップルのような雰囲気は一切なく、いうなればもうすぐ結婚二十年を迎える夫婦のようだ。
「これはどうでしょうか？」
「いや、こっちの方が似合うんじゃないか。」
このやり取りにも、本来なら騒がしさが付くものだが、二人は落ち着いた雰囲気で品定めをしており。若者が着るような派手なデザインの物ではなく、落ち着いた色合いの素朴な服ばかりを見ている。
「あの二人はあんなんでいいのでしょうか？」
モニタモンの一人がこう言ったが、残るモニタモンは何も答えなかった。
最後に、モニタモン達はそろって大きなため息をついた。

時計が十二時を指そうとした時である。何故か二人の腹が同じタイミングで鳴った。
「ハハハ、飯にするか。」
と、タイキが言うと、
「それじゃあ、あそこに行きましょう。」
アインハルトはこう言って、海沿いに立つ小さなイタリアン料理の店を指さした。
「おお、イカ墨パスタがあるじゃねえか！」
何故かシャウトモンがクロスローダーから飛び出し、メニューの書かれた看板を見ながら言った。
（そういえばアイツ、前に一回人間界に来たけど、そこでイカ墨パスタ食い損なったんだよな）
タイキは昔を思い出しながら思った。そういえばこの時、シャウトモンはオメガシャウトモンに進化できるようになったんだ、と。
「アインハルト、僕もお腹空いたよ。」
そして、アインハルトのクロスローダーからもテリアモンが飛び出した。
「ちょ、テリアモン。」
アインハルトは突然の事に驚いたが、
「いいじゃん、皆で入ろうぜ。」
タイキはこう言って、店の扉を開けた。

「しかし何なんでしょうか、あのまるで友達同士で来たような雰囲気は。」
デートの様子を遠くから見ていたモニタモン達は、近くのコンビニで買ったジャムパンを食べながら様子を窺っていた。
タイキは普通に大盛りのイカ墨パスタを食し、シャウトモンは念願のイカ墨パスタだったらしく、
「うめぇー！！」
と、叫びながらぱくついている。
アインハルトとテリアモンはトマトソースのパスタを食しており、時折行儀の悪いテリアモンを注意している様子は、さながら姉と弟のようだった。
「しかし我々の食事ももうちょっとどうにかならなかったんですか？」
モニタモンの一人が訊くと、
「こんな場所じゃ普通に幕の内弁当は食べられないでしょう。」
別のモニタモンが言った。彼らは電柱の上にしがみついており、通りかかる人は皆、
「何だこいつら？」
と言わんばかりの表情になって通り過ぎていく。
（すげぇハズイ）
モニタモン達は一様にこう思っていた。

食事を済ませたタイキ達は、海のよく見える公園にやって来ていた。
「そういえば、アインハルトはどうやってテリアモンと出会ったんだ？」
海を眺めながら、タイキはアインハルトに訊いた、

「テリアモンとの出会いですか。」
アインハルトは、ちょうど今から一年前の事を思い出しながら言った。

テリアモンは、自分が家で特訓していた時に、突然家のコンピュータからクロスローダーを持って現れたのだ。クロスローダーがあればデジタルワールドに帰る事もできたはずなのに、テリアモンはあえてそれをしなかった。彼は、
「アインハルトがかつての友達に似ている」
とアインハルトに言ったのだ、

「かつて世界の危機になった時、最後まで助けようとしたけど結局倒すしかなかった友達がいたのだと言うんです。それが私の記憶の中にある”ある人物”の記憶と似ていて。」
アインハルトがここまで話したところで、
「ある人物って？」
タイキが再び訊ねた、
「私の先祖である「覇王イングヴァルト」の事です。」
と、アインハルトが答えると、
「お前の先祖って王様だったのかよ！」
シャウトモンが驚きの声を上げた。デジタルワールドの王を目指す彼にとって、王様の話はきになるのだろう。
「はい、私は断片的ではありますが、その覇王の記憶を受け継いでいるんです。」
アインハルトは、途切れ途切れではあるが、うまくつなぎ合わせれば自分の記憶として思い出せる、とも言った。
そして、覇王イングヴァルトの話を始めた。

かつて、この世界がミッドチルダと呼ばれるようになるより遥か前、シュトゥラの王家の跡継ぎとして生を受けた「クラウス・G・S・

イングヴァルト」は、列強の王達を制することで無双の強者となり、政の面でも民を思いやる善政者として歴史に名を残すことになった。それでも、彼が望むものは手に入らなかった。

「その、覇王が最後まで手に入れられなかった物ってのは……？」
シャウトモンがこう言うと、
「本当の強さです。大切な者を守れる強さ。」
アインハルトはこう言って、
「彼には同じように武の道をたどる友がいたのですが、その人は自らの運命で命を落とし。何の皮肉かそのために彼は強くなったんです。」
と、説明した。
「だから、自分の拳を受け止められる相手を探して。」
と、タイキが言うと、
「はい、もう守るべき民も国も無い今、強さを知るにはそうするしか。」
と、アインハルトが言った。
「何も一人ですることは無いと思うぜ。困ったなら周りを頼ってもいいじゃん。」
シャウトモンはアインハルトにこう言った。
「実際テリアモンは、お前に頼ってほしいはずだぜ。」
シャウトモンがこう言うと、テリアモンは一回頷いた。
「それに、俺たちだっているんだから。」
タイキからこう言われた時、アインハルトの中で何か熱いものがこみ上げてくる感じがした。その時である、
「おーい、タイキー！」
遠くから声がした。見ると、白いスポーツバッグを持った少年がこちらに手を振っていた。
「ああ、ケビン！！」
彼は、かつてタイキにバレーボールの試合の助っ人を頼んだケビン

だった。
「お前はこんなとこでなにしてんの？」
ケビンに訊かれたタイキは、
「ああ、散歩だよ。」
途轍もない適当さを誇る答えを出した。
「そうなんだ、また何かあったらよろしくな。」
ケビンはタイキにこう言うと、早く帰らないと弟にテレビを取られて録画したドラマが見れなくなる、と言いながら去って行った。
（誰からも頼られ、誰であっても必要に応じて頼る、か）
タイキの様子を見ながらアインハルトは思った。

そして、機動六課に今まさに査察が入っている時も、二人はあちこちを回って色々楽しんでいた。
最後に、タイキが行きたいと思っていた中華飯店で夕食を取ることにした。
「あの、今日はありがとうございます。」
アインハルトは顔を赤くしながらタイキに言った。
「いいよ、俺も楽しかったし。」
タイキは笑いながらこう言うと、
「それでだけど。」
突然真剣な口調で言った。
（え？）
アインハルトは驚いた、そしてタイキは、
「これからの事なんだけど。」
と、アインハルトに言った。

（え、ええ？）
アインハルトは顔中真っ赤になりそうなので、とりあえずうつむいたままになった。
「これからとても厳しい戦いが始まると思うんだ、だからアインハルトにも力を貸してほしんだ。」
しかし、予想に反してタイキはこうアインハルトに言った。
（なんだ、そんな事か）
アインハルトは、若干がっかりした所もあったが、
「分かった、協力するよ。」
と、タイキに言った。
（格闘技に関してだけじゃない。ここで引き下がったら一生彼には勝てないかも）
アインハルトは心の中でこう思ってもいた。しかし、自分の協力を取り付けられたのがよほど嬉しかったのか、喜んでいるタイキを見ながら思った。
（覇王の力、しっかり役に立ててくださいね）

第十三話　タイキの初デート？（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「さて、今回のテーマはチビカメモン。こいつは普通より小柄で、ヘルメットも目を覆ってないから「チビ」と呼ばれているけど。実際のカメモンはサイボーグ型のデジモン。必殺技は「メットタックル」「コーラガード」だ。」

モニタモンA
「マウスのような形をした甲羅は頑丈で、どんな攻撃でも防げますな。」

モニタモンB
「普通のカメ同様に手足を甲羅にひっこめることができますが、頭は入れられないのですな。」

モニタモンC
「頭隠して尻隠さず？」

カットマン

「ちなみに、亀の甲羅は骨が変化した物であって、間違ってもあの敵キャラクターみたいに脱げたりはしないんだ。」

全員
「それじゃあまたね。」

次回予告
なのは、フェイト、はやてと共に聖王教会へやって来たタイキは、これからの運命を決める予言、そして機動六課設立の理由を耳にする。

次回「戦いの予兆」

五話更新記念の回　その三

ここは、ミッドチルダのとある場所。

カチ、カチ、カチ

一人の少女が、パソコンのディスプレイにかじりついていた。

???

「キリエ、まだ見てたの？」

すると背後から、赤い髪の少女が話しかけた。

???

「何度見たって同じだよ、私たちはどの話にも出ていない。」

少女はこう言って、キリエと呼んだ少女を見た。少女の手は震えていた。そして、

キリエ

「なんじゃこれはー？！！」

と叫んだ。後ろで少女が驚いているのに気が付くと、

キリエ

「アミタ！一体どうゆう事よ？！」

と、アミタと呼んだ少女の胸倉に掴みかかりながら言った。

アミタ
「知らないよ、いったいどうしたの？」

アミタがこう言うと、

キリエ
「ちょっとこれ見てよ。」

キリエはアミタをパソコンの前に座らせた。

アミタ
「ああ、私たちが出た最初の五話更新記念の回のＰＶで出てた台詞だね。あなたがたのやり方じゃ埒が明きません、ここは俺に任せてください。」

キリエ
「違う、そこじゃなくて。」

注目する点を間違えているアミタを制して、何話か戻すと。

キリエ
「ほら、この話からアインハルトが出てる。」

アミタ
「それが？」

キリエ
「それがじゃないよ。これは元々「Ｓｔｒｉｋｅｒｓ」を原点にした話なのに、なんで四年後の「Ｖｉｖｉｄ」のキャラクターが出てきてるのよ！！」

アミタ
「知らないよ。」

キリエ
「こうなったら四の五の言ってられない、今すぐカットマンの家に行きましょう。」

こうして、キリエ・フローリアンとアミティエ・フローリアンはこの小説の作者の元へ向かっていった。

そして、ここはとある管理外世界のとある場所。

「よし、五話更新できたっと。」

パソコンの前でキーボードを叩いていた男が肩を伸ばしながら立ち上がった。彼は言わずと知れた（知られてるのかな？）この小説の作者「超人カットマン」である。
思えばこの時、ボディをがら空きにしていなければKOを取られることはなかったのに。

？？？

「チェスト！！」

突然現れた桃色の髪の少女の渾身の飛び蹴りを、カットマンはモロに腹に喰らった。

カットマン
「って、また来やがったかキリエ・フローリアン。」

アミタ
「ピンクの不肖の妹が迷惑をかけました。」

キリエ
「どうしたもこうしたも無い。何なのよこの小説にアインハルト・ストラトスが出てるって？」

カットマン
「つーかお前、そこまで出たいの？この小説に。」

キリエ
「べ、別にそういう訳じゃないんだからね！！」

アミタ　カットマン
（ツンデレのつもりかお前）

カットマン
「というか、お前らひどい目に合う役しかないぜ。」

キリエ
「酷い目に合う役って何？悪役？」

カットマン
「こんな感じ。」

ゲームの世界で大騒ぎ

アミタ
「ああ、さっきの戦闘で体力使いすぎた。」

アナウンス
「布団で寝れば体力を回復できます。」

アミタ
「そうなんだ、それじゃあお休…」

グキ（寝違えた音）

その瞬間、アミタの体が棺桶になった。

アミタ
「なんでぇ！？」

アナウンス
「あーっと！優勝候補のアミティエ選手死んでしまった。どうやら寝違えたショックで体力がなくなってしまったようです。」

フレイムウィザーモン
「いや、どんだけ痛いんだよ！？」

キリエ

「ざまぁないわね、この間に私はやるべきことをやるから。」

キリエが進もうとした瞬間である。偶然近くにある看板に足をぶつけ、その瞬間アミタ同様棺桶になってしまった。

キリエ
「だからなんでぇ？！！」

アナウンス
「あーっと、ここでもう一人の優勝候補キリエ選手も死んでしまった。どうやら看板の角に小指をぶつけ、体力がなくなってしまったようです。」

フレイムウィザーモン
「いやだからどんだけ脆いんだよ！！」

終わり

キリエ
「銀〇ですか？！そりゃ声優が一緒な人いますけど。」

カットマン
「ああ、そうそう、質問が来てたから答えないと。」

アミタ

「こんな新参者の作品に質問する人っていたんですね。」

カットマン
「そういう事を言わない。今ではもうお馴染みとなっている「鳴神ソラ」さんからの質問だ。」

「ディアナモンへ、タイキと出会う前にジェネラルはいたのか？
ｂｙタクティモン」

カットマン
「と言う訳で、実際に訊いてみましょう。」

アミタ
「訊こうって、本人どこにもいないじゃん。」

カットマン
「えーと、これで良しと。」

プルルルル……ガチャ

ディアナモン
「はい、もしもし。」

アミタ
「電話なの？！」

カットマン
「超人カットマンと申します。タクティモンさんが、タイキと会う前にジェネラルはいたのか、と質問されているのですが。」

ディアナモン
「ジェネラルですか？私の場合はジェネラルではなく、バグラ軍の地方司令官の部下だったんです。まあ困った人で色々苦労したんですけどね。って言うより、タクティモンがそんなぬるい質問をしt…」

ガチャ

カットマン
「よし、今回のノルマ終わり。」

アミタ
「早いよ、っていうかさっきディアナモン最後に何か言いかけてなかった？！」

カットマン
「気のせいじゃない？」

アミタ
「いやいや、違うから。絶対最後にぬるい質問してきたんです…」

ドカーン

キリエ
「まったく、本来は私が用があって来たのに、アミタの分際で出しゃばりやがって。」

カットマン
「お前も張り切ってるな。」

キリエ
「当然よ！この間は途中で拘束されて、そのまま焼豚みたいに持ってかれちゃったんだから。」

カットマン
「と言っても、今回はこれで終わりなんだけどね。」

キリエ
「だから早いよ。もっと何かないの？」

カットマン
「無い！」

キリエ
「まったく、ところでクラウドっていったい何者なの？グランドラクモンとかなんとか言ってたけど。」

カットマン
「それはじきにわかること、グランドラクモンを説明するとすれば「魔王の中の魔王」人で表せば「ＢＡＳＡＲＡ」ゲームの松永久秀だね。」

キリエ
「織田信長じゃないんだ？」

カットマン
「それでは閉店ガラガラ。」

キリエ
「っていうか待て、さっきも言ったけどなんでこの……」

そして、キリエに撃たれたアミタが目覚めるまで、この二人は喧嘩していた。

五話更新記念の回　その三（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン
「気を取り直していきましょう。テーマはブルーメラモン。ブルーメラモンは火炎型デジモン。必殺技は相手を凍らせる炎を投げつける「アイスボム」だ。」

モニタモンA
「超高温の体を持つのに技は殆ど冷凍系ですな。」

モニタモンB
「青いのは、空気を沢山含んだ健康的な炎だからですな。」

モニタモンC
「ところでなんで我らがここに？この前は何かの番組とコラボしてたじゃん。」

カットマン
「ああ、スタッフが、勢いに乗ってついやってしまった、今は反省してる、って事になってこうなったんだ。」

全員
「それじゃあまたね。」

第十四話　戦いの予兆

機動六課に査察が来た次の日の事である。
「突然だけど、すぐに出かけられる準備をしておいて。」
朝一番、タイキは起きるや否やはやてにこう言われた。なので、いつでも出かけられる準備をして部隊長の部屋に行くと、はやてともう一人、フェイトも一緒だった。
「とりあえずいつでも出かけられる準備はしたけど、どこかに行くんですか？」
部屋に入り、タイキが訊くと、
「これから聖王教会の本部に行くんや。そこで重要な話をするからタイキ君にも来てほしいんや。」
はやてはこう答えた、
「重要な話って？それならなおの事、」
タイキは、なおの事部外者当然の自分が参加するのはまずいのでは、と言おうとしたが、
「これからの動きにかかわる重要な話なんや、それにタイキ君に訊きたいこともあるし。」
はやてはこう言って、
「なのはちゃんはさっき帰ってきたはずやけど。」
と言って、なのはと連絡を取ろうとした。しかし、回線がつながった時、聞こえてきたのはなのはの声ではなく、子供が元気に泣きじゃくる声だった。
見ると、アインハルトと同様に両目の虹彩の色の違う幼い少女が、なのはにしがみ付いて泣いていた。当のなのはは困りきっており、周りにいるフォワードの四人も困っていた。
まさしく、迷子を見つけたはいいが、その子から家の場所も自分の名前も分からないと言われたお巡りさんのようだった。
（あれ、あの子は確か）

タイキはその様子を見ながら思った。そういえばこの間救出した女の子だ、と。

（うう、どうしよう）
自分の目線の先には泣きじゃくる女の子。なのはは今猛烈に困っていた。
「行っちゃやだー！！」
彼女はそう言って自分にしがみついている。
何故こんな事になっているかと言うと、病院に行って彼女を連れてきたは良いものの、自分に懐いてしまったようで全然離れてくれない。なんとかスバル達に面倒を見てもらおうと思ったが、四人がかりでもまるで太刀打ちできていない。
「ああもうヴィヴィオ、お願いだから泣かないで。」
なのははこう言いながら思った、泣く子には勝てないと言うが本当だ、と。
すると、扉が開いて、はやて、フェイト、タイキが現れた。
「エースオブエースでも勝てない相手がいるんやね。」
なのはは面白がっているはやて達に、
（なんとかして）
と、念話で訴えた。
様子を見ていたタイキは、
（それなら）
と考え、

「リロード！」
クロスローダーを掲げると、手始めにキュートモン、チビカメモン、スターモンズ、バステモンを出した。
「あれをどうにかできる？」
タイキは泣きじゃくるヴィヴィオを片目で見ながら、キュートモン達に訊いた。
「任せるっキュ！」
キュートモンはこう言って、先陣切って向かっていった。
「泣いたらダメだっキュ。」
キュートモンはヴィヴィオを撫でながら言った。
「そうだぜシスター！そしたら俺たちも悲しいぜ！」
続いてスターモンズもやって来た、少しばかり低くなっているとはいえ、相変わらずテンションが高い。
「僕たちヴィヴィオと友達になりたいんだカメ。」
チビカメモンも加わったところで、ヴィヴィオは泣き止んだ。最後にバステモンが、
「別にヴィヴィオはなのはさんに迷惑をかけたいわけじゃないんでしょう。でもなのはさんはこれから大事な用事があって出かけなくちゃいけないの、でもヴィヴィオが泣いてるとなのはさんはいつまでも出かけられないし、この子たちは悲しい。だからなのはさんが帰ってくるまでお姉さん達といい子で待ってましょう。」
とヴィヴィオに言ったら、しぶしぶと言った感じだったが、ヴィヴィオは了承した。
と言うことで、タイキはクロスローダーの中のデジモンの中で、今の四体とドルルモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、ピノッキモン、スパーダモン、ルーチェモン、ワイズモンをお守り係りとして残していくことにした。
また、バリスタモンはメンテナンスを行う為、グラウンドラモンは眠いという事で、機動六課の隊舎に置いて行った。

「それにしても、ええ物見せてもらったわ。」
ヘリに乗って移動する最中に、はやてがなのはに言った。
「もう、笑いごとじゃないよ。」
なのはにとっても困る事である。これから里親を探さないといけないというのに、このままではそれをヴィヴィオが了承してくれそうにないからである。だからと言って、無碍に突き放すのもどうかと思われるが。
「せっかくだし、なのはさんが直々に里親になればいいんじゃ。」
クロスローダーの中のスパロウモンが言った。
「無理に引き離す必要も無いと思うよ。」
なのは本人は、
「帰ったら私がもう少し話してみるよ。今は周りに頼れる人がいなくて、不安なだけだと思うから。」
と、言った。

そして一同は、聖王教会の本部へとやって来た。
「うおお！すげぇ！！」
周りにそびえる教会を模した建物を見ながら、シャウトモンはクロ

スローダーの中で感嘆の声を上げた。
「確かにすごいな、教会をイメージして作ってるだけあって、なかなか凝ってる。」
タイキも周りを見ながら感心していると、
「こっちやー！！」
遠くではやて達が呼んでいたので、先を急いだ。
そして、教会の建物でも特に警備の固い施設「教会騎士団本部」のとある部屋にやって来た。
「どうぞ。」
二回ノックをすると、中から落ち着いた女性の声が聞こえてきた。
「失礼します。」
とりあえず、まずはなのは、はやて、フェイトが入った。
「高町なのは一等空尉です。」
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。」
仮にも上官に会うということで、二人は真面目な挨拶を行った。そして、最後に入ってきたタイキは、
「そいで、彼が民間協力者の工藤タイキ君。」
と、はやてが紹介した。
「いらっしゃい、それに初めまして。私は教会騎士団騎士、カリム・グラシアです。」
そして、四人を出迎えた修道服を身に着けた金髪の女性カリムに案内された席には、先客だろう黒い服を身に着けた男がいた。
「それで、この人はクロノ・ハラオウン提督。フェイトちゃんの義理のお兄ちゃんなんや。」
彼の事は、はやてが紹介した。
クロノと呼ばれた男は一回咳払いをした。余計なことを言うな、と言いたいのだろう。
しかし、いつまでも世間話のようなことをしていても何も起こらないので。
「とりあえず、今回はこれまでの活動のまとめと、今後の話、それ

と改めて機動六課設立の本当の意味を話すな。」
と、はやてが言った。
そして、部屋のカーテンが閉まったところで、話が始まった。
「知ってのとおり、六課設立の表向きの理由は、ロストロギア、主にレリックの取り締まりと、独立性の高い少数部隊の試験運用。」
まずは、クロノが口を開いた。
「後見人は僕と騎士カリム、それと僕とフェイトの母で上官の「リンディ・ハラオウン」非公式とはいえ三提督の後ろ盾もある。」
（少数部隊、それも試験運用でここまで贅沢な後ろ盾。一体なんで）
ここまでの話を聞いて、タイキは思った。
「これについては、私の能力と関係があります。」
すると、おもむろに立ち上がったカリムがこう言って、持っている紙の束の帯をほどいた。
「私の能力、プロフェーティン・シュリフテン。」
すると、彼女の周りを束になっている紙が回り始めた。
「これは最短で半年、長いときは数年先の未来の出来事を詩文形式で記録した予言書を作成する能力。二つの月の魔力がそろわないと発動させられないため、年に一度しかページを作ることができません。」
そして、その中のうち三枚が、なのは、フェイト、タイキの元に飛んできた。とりあえず、そこに書いてある事はちゃんと意味はあるのだろうが、タイキにしてみれば完全にチンプンカンプンである。
「書いてあることは古代ベルカ語で、解釈によっては違う意味になることがあるので、的中率は割とよく当たる占い程度。」
カリムはあまり便利な能力ではないと言ったが、
「それでも、聖王教会や管理局の大物達はこの予言に目を通す。」
と、クロノが補足した。ある意味では事件の予防策の一環らしい。
「ちなみに、地上本部の指導者はこの能力がお嫌いや。」
と、はやても付け足した。その指導者の事を知るタイキとその仲間たちは、

（確かに）
一様にあの強面を思い出しながら思った、
「そして、ここからが重要な部分だ。その予言書にある事件が書き出されてる。」
クロノがこう言うと、カリムは一枚の予言書を手に取り、その内容を読み上げた。
「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の元、聖地よりかの翼が蘇る。死者たちが踊り、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、それをさきがけに、あまたの海を守る法の船も崩れ落ちる。」
ここまで聞いた時、皆は思った。それはまさか、と。
「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と、そして、管理局システムの崩壊。」
タイキはここで気が付いた、これに抗するため機動六課があそこまで贅沢な後ろ盾になったんだと。そして、
（しかし、死せる王とか、かの翼って？）
と、考えていると、
「ですが、ちょうどタイキさんとはやてが出会ったころに、新しい予言が追加されたんです。」
カリムはこう言うと、別の紙を取ってその内容を音読した。
「偽りの竜王の元、異世界の獣が世界を駆け、破滅の炎が森羅万象を焼き尽くす。」
ここまで聞いた時、タイキとデジモン達は気が付いた。
「それってまさかＤ５じゃ？！」
かつて、バグラモンがコードクラウンの力を使ってあらゆる世界を破滅させようとした事を思い出したのだ。
「Ｄ５とは？」
と、クロノがタイキに訊ねた。知らないのは当然である。
「ＤＩＭＥＮＳＩＯＮ（次元のパワー）、ＤＥＬＥＴＥ（で消去し）、ＤＥＡＤＬＹ（あらゆるものを破滅させ）、ＤＥＳＴＲＵＣＩＯ

N・DAY（破壊する日）、これを略してD5と言うんです。」
タイキはこの場にいる皆に、実際に人間界でこうなった時のことを話した。あらゆる生命体は活動を停止し、建造物は荒廃して、あのまま自分たちがバグラモンを止められなかったら、あらゆる次元世界が滅んでいただろうと。
「私達の知らないところでそんな事があったなんて。」
なのは達は驚いたが、一番驚いたのはカリムだった。何故なら、その事件は自分の能力で予言されていたのだという。
「というのは後回しにして、この予言には続きがあるんです。」
カリムはこう言って、続きを読み始めた。
「絆の将と魔王が手を与し時、真なる竜王と二人の王の元、偽りの竜王の野望打ち砕かれる。」
「つまり、俺がここに呼ばれたのも。」
ここまで聞いたタイキは気づいた、ここにいる皆は「絆の将」を自分の事だと思っているのだと。
「そうや、絆の将はタイキ君やと思ったからや。ところで、魔王と真なる竜王、二人の王に心あたりはある？」
はやてがタイキに説明を行うと同時に訊ねた。
そして、魔王が誰なのかを考えた時、この場にいる人間の目がすべてなのはに集まった。
「ええ？！ひどいよみんな！」
彼女は九歳のころから悪魔と呼ばれていたのだ、大人になったのだからそろそろ魔王に昇格する所だろうと考えたらしい。
（とりあえず、ベルゼブモンとルーチェモンは魔王型のデジモンだけど、竜王はともかく二人の王って何者だ？）
タイキも考えてみたが、自分の知り合いに該当する人物は一人もいなかった。それでも、分かったことが一つだけあった。
「つまり機動六課は、実際にこの予言の中に書かれていることが起こった時、すぐに対処できるように一年限定で？」
と、タイキは訊いた。ここまでの話を整理した結果、この結論に至

ったのだ。
「そうや、それでやけどな。きっとこれからは今まで以上に厳しい戦いになると思う。そもそも君たちにとっては蚊帳の外やけど。でも私たちはこの世界を守りたいんや。だからこれからも機動六課に協力してくれへんか？」
はやては真剣な口調でタイキに言った。勿論、ここでのタイキの返答は決まっている。
「ああ、誰かが傷つこうとしてるなら。俺はほっとけない。」
「そう、ありがとうな。」
そして、この場での話はお開きとなった。

ちなみに、彼らが機動六課の隊舎に帰った時、隊舎が3割ほど壊れていたという。

第十四話　戦いの予兆（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン
「さて、今回のテーマはナイトモン。ナイトモンは鎧を身に着けた戦士型のデジモン。必殺技は持ち前の大剣を振る「ベルセルクソード」だ。」

モニタモンA
「途轍もない重さの鎧を身に着けながら、それでもなお巨大な剣を振り回す怪力の持ち主ですな。」

モニタモンB
「一説では強すぎる力を制御するために重い鎧を身に着けてるらしいですな。」

モニタモンC
「鎧の中は汗臭そうだな。」

全員
「それじゃあ、またね。」

次回予告

ある日の事、突如機動六課を竜王を名乗る少年「キサキ」が襲撃する。そして彼とタイキの全面抗争となる。

次回「絆の将と暴君の激突　タイキＶＳキサキ」

実はのお話（前書き）

ここで、あの日機動六課隊舎で何があったか説明しておこう。

実はのお話

ある日、さまざまな機械が並ぶ工場で、なのはがドライバーを片手に何やら作業していた。
「さて、調子はどうバリスタモン？」
と、なのはに訊かれたバリスタモンは、ぶんぶん腕を振り回すと、
「ダイブイイカンジダ。」
と、答えた。因みになのははこれでも生粋の機械オタクなのである。魔法と出会った記念すべき九歳の時にはすでに、普通にはんだごてを使いこなしていたほどだ。精密機械の精密部分でなければ彼女でも十分に修理可能である。
「にゃはは、でもこの手の機械に関しては、シャーリやヴァイス君の方がもっと上手に修理できるんじゃないかな。」
なのははこう言った、だが、
「それはダメですよ。私はともかくヴァイスさんには前科がありますから。」
どこからか現れたシャーリが、なのはにこう言って説明を始めた。
あの日、何があって隊舎が壊れていたのかと。

はやて、フェイト、なのは、そしてタイキが聖王教会本部へ行った後の事である。スバル、ティアナが通常の仕事班、エリオ、キャロ、そして学校が終わり機動六課隊舎にやって来たアインハルトがヴィ

ヴィオの世話を担当することになった。
コンピュータ室で仕事をするスバル達はと言うと、
「……よし、終わり！」
「早？！！！」
ワイズモンと共に、この間の事件の調査資料を纏めていた。
「ほら、少しこっちに回しなさい。手伝うから。」
ティアナは割と容量がいいが、スバルはこの手の仕事が苦手らしく手間取っている。
「それにしても、途轍もない力を発揮しながら魔力の反応が一切ないなんて、やっぱこいつら……」
スバルがまとめている資料を見ながらぶつぶつ言っていると、ティアナのデコピンが飛んできた。
「別にこいつらの正体がなんであれ、あんたが気にする事じゃないでしょう。」
ティアナはこう言って、作業を再開した。
（一体どういう事だ？）
同じように作業しながら、二人のやり取りを聞いていたワイズモンは、パネルを叩きながらこう思った。

そして一方、ヴィヴィオの世話をしているエリオ、キャロ、アインハルトはと言うと、
戸惑いながらも積み木を積み上げるヴィヴィオを見ながら、アインハルトは思った。

（真紅と深緑のオッドアイ。この子、あの人に良く似ている）
彼女の中にある、元祖覇王こと「クラウス」の記憶の中に、彼女にそっくりな女性の記憶があるのだ。
「ねーねー、アインハルト。」
突然、テリアモンがアインハルトを呼んだ。
「？！どうしたの？」
と、アインハルトが訊くと、
「ヴィヴィオが積み木を全部積んじゃった。」
テリアモンはこう言って、不安定ながらも微動だにしない積み木の塔を耳で指した。そして当のヴィヴィオは、積み木が飽きたのか絵を描いている。
その様子を見ながら、アインハルト同様にエリオにも気になることがあった。
（普通に生まれた子供にしては人格がはっきりしすぎてる。きっと自分の元になった人物の記憶があるんだ）
これまでにヴィヴィオの様子を見て、エリオは彼女の意思がはっきりしていることを不自然に感じたらしい。
（きっとどこかで続いているんだ。プロジェクトフェイトは）
エリオがこう考えた時、
「あの、エリオ君？」
キャロが心配そうな顔で、自分の顔を覗き込んできた。

そして、ここからが重要な話である。丁度冒頭でなのはがバリスタモンの修理をしていた場所。ここではヴァイスがバリスタモンの修理をしていた。
「すげぇな、こんなにハイテクながら俺の技術で十分修理可能なんてな。」
事実、デジタルワールドではタイキの仲間である「剣ゼンジロウ」がバリスタモンの修理をしていたのだ。常日頃から機械いじりをしているヴァイスの手にかかればすぐに修理できるだろう。
「ん？なんだこれ？」
ふとヴァイスは、意味不明なパーツを発見した。そしておろかな事に、そのパーツに触ってしまった。その瞬間、
「ガギュイイイイン！！！！」
という意味不明な騒音が発生し、工場が爆発した。

所変わって、エリオたちは何をしていたかと言うと、お外で遊んでいた。ルーチェモンが転がしたボールをヴィヴィオが受け取り、投げ返す遊びをしているのだ。
その様子を、遠くからドルルモン、ナイトモン、バステモンが見ていた。さらに、少し離れた場所ではグラウンドラモンが昼寝をしていた。
「何事も無くて良かったですね。」
バステモンが様子を見ながら隣にいる二人に言った時である。
「ガギュイイイイイン！！！」

という騒音と共に、機動六課隊舎の一部が壊れた。
「何事だ！」
と、ドルルモンが叫ぶと、第一級警戒態勢を知らせるブザーが鳴った。

「第一級警戒態勢、しかもここでって、どんだけ危険なのよ！」
「ティア、そんな事より早く！！」
書類仕事をしていたスバル、ティアナ、ワイズモンがエリオたちに合流した時、青と黒を基調としたボディに、両腰にマシンガンのような物、腹部にスピーカーのようなものを付けた、クワガタのような機械が歩いてきた。
スバル達が、新種のガジェットか、と身構えると、
「あれはダークボリューモン！なんであの姿に！！」
デジモン達は一様に驚いた。何故バリスタモンがあの姿になっているのかと。
「ええ？あれバリスタモンなの？」
機動六課の面々ももちろん驚いた。しかし、
「どのみち、奴をほっとけばこの隊舎はおろか周囲一帯があっという間に壊滅する。」
ルーチェモンはこう言って、普段の天使のような姿から、背中の羽が半分天使で半分悪魔の貴族のような姿に変わった。
「ルーチェモンがフォールダウンモードになるなんて、相手は強いです。」
バステモンは皆にこう言って、ヴィヴィオを庇うようにして後ろに

下がった。
「とにかく、みんな行くわよ！！」
と、ティアナが啖呵を切ると、
「マッハキャリバー！！」
「クロスミラージュ！！」
「ストラーダ！！」
「ケリュケリオン！！」
「「「「セットアップ！！」」」」
四人はバリアジャケットを身に着けた姿になった。
「武装形態。」
アインハルトも、自分の魔力を高めることで、今の姿から一気に十六歳くらいの姿に変わった。
「なんとかしてすぐに止めるぞ！！」
ドルルモンは皆にこういうと、
「ドルルトルネード！！」
尾のドリルを使って竜巻を発生させた。それに続いて、
「メテオスコール！！」
スターモンの指示の元、沢山のピックモンが襲い掛かり、
「ウルトラソニックウェーブ！！」
キュートモンは破壊力のある特殊な音波を口から発射し、
「チェックメイト・インパクト！！」
ナイトモンはポーンチェスモンズと一緒に突撃し、
「ブルーブレイブ！！」
スパーダモンは持っている短剣から青い斬撃を発射し、
「ブレイジングファイア！！」
テリアモンは口から高熱のエネルギー弾を放ち、
「デッドオアアライブ！！」
ルーチェモンは二発のエネルギー弾を投げつけ、
「覇王流、旋翔波！！」
アインハルトは、覇王流に伝わる気弾攻撃を行い、

「ディバインバスター！！」
スバルは右の拳から一筋の閃光を放ち、
「クロスファイヤーシュート！！」
ティアナは分身すると、分身たちと一緒に弾丸の雨を放った。
「エリオ流、グングニル！！」
エリオはメデューサモンがデジクロスした際に使う必殺技を自分なりのやり方で行い、
「フリード、ブラストフレア！！」
最後にキャロが、フリードの火炎の威力を上げて攻撃した。しかし、
「ガギュイイイン！！」
ダークボリューモンは平気なようで、
「アルティメットスピーカー！！」
腹部のスピーカーから攻撃力のある音波攻撃を行った。
「くそ、このままじゃやられる！！」
と、ドルルモンが叫ぶと、アインハルトは思い出した。この日、タイキからいざっていう時の為のデジクロスを教えてもらっていたことを。
なので、自分の緑のクロスローダーを掲げると、
「キュートモン、ドンドコモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、バステモン、チビカメモン、ワイズモン、デジクロス！！」
と、叫んだ。本来はジジモンが対応すべきポジションはワイズモンを代用した。
「グレイテストキュートモン！！」
キュートモンは甲冑を身に着け、下半身が太鼓のようになり、さらに途轍もなく巨大化した。
「デジトランス、ルーチェモン、ドルルモン、スパーダモン、スターモンズ！！」
そして、ルーチェモンをスバルのマッハキャリバーと、ドルルモンをティアナのクロスミラージュと、スパーダモンをエリオのストラーダと、スターモンズをキャロのケリュケリオンと合体させた。

結果、スバルのバリアジャケットはダークスーツのようになり、ティアナの銃は大砲のように、エリオの槍は西洋風の形状に、キャロのバリアジャケットは星の模様のちりばめられた物に変わった。
「グレイテストソニックウェーブ！！」
一連の行動が終わると、最初にグレイテストキュートモンが動いた。自分の口と太鼓から破壊力のある音波を放ったが、
「アルティメットスピーカー！！」
ダークボリューモンの攻撃にかき消され、さらにグレイテストキュートモン本人にも被害が現れた。
「キュー！！」
グレイテストキュートモンの唯一の弱点、打たれ弱い事を突かれたグレイテストキュートモンは倒れた。
「行くわよドルルモン！！」
ティアナはクロスミラージュと一体化しているドルルモンにこう語りかけると、
「ドルルキャノン！！」
ティアナの弾丸のスピードと正確性、ドルルモンの突貫力を得たエネルギー弾を放った。
「われが求めるは流星、我が願いを届けたまえ。」
キャロが祈りをささげると、空から隕石のような火炎弾が降り注いだ。
「エリオ君！！」
「行くよ！ストラーダ！スパーダモン！！」
キャロの合図を受けたエリオは、槍を構えて突撃した。さらにキャロの支援も受けたその姿は、さながら大気圏に突入するスペースシャトルだった。
エリオの一撃でダークボリューモンは吹っ飛ばされた。
「スバル！決めて！！」
スバルはティアナの合図を受けると、持ち前の俊敏性でダークボリューモンとの距離を縮めて、

「パラダイム・ロスト！！」
かの暗殺拳の必殺技のごときスピードで連続パンチをお見舞いした。しかし、ダークボリューモンの固い装甲の前には、まるで効いていない。
「遊ビハ終ワリダ、アルティメットスピーカー、レベルＭＡＸ。」
ダークボリューモンの腹部に途轍もない力が集まり始め、皆がもうダメだと思った瞬間、突然上空が暗くなり、落下してきた巨大な何かにダークボリューモンが潰された。
「うるせえんだよ！！！！！！！！！！」
落下してきた何かはグラウンドラモンだった。あれほど騒がしかったので起きたようだ。その場にいた皆に怒鳴ると、そのまま元いた場所へ戻って行った。
「……」
その場に取り残された面子は、グラウンドラモンの怒りのすさまじさに驚き、しばらくは何も話せなかった。ヴィヴィオも、今にも泣きそうなのだが、何かがつっかえているようで泣かなかった。
（ああ、これが所謂泣く子も黙るってやつか）
（グラウンドラモンの昼寝だけは邪魔しないようにしよう）
皆がそろってこう考えていると、
「あ、あのー。」
背後から遠慮しがちに呼ぶ声が聞こえた。見ると、ユーノ・スクライアがやって来ていた。
「なのはに頼まれていた資料渡しに来たんだけど。なのはは……」
ユーノは、機動六課の隊舎が少し壊れていることに触れないようにこう訊いた。
「えーと、なのはさんは今聖王教会の本部に行ってます。」
と、スバルが行った後、
「とりあえず、どこか安全な場所を知りませんか？この子を避難させたいんで。」
ルーチェモンが天使の姿に戻り、ユーノに訊いた。この子は勿論ヴ

ィヴィオの事である。
「……それじゃあ、無限書庫にでも来ますか？」
と言うユーノの提案で、ワイズモンとルーチェモンはヴィヴィオを連れて、一時無限書庫に避難することになった。
ちなみにこの後、ダークボリューモンは機動六課のメカニックスタッフが全総力を費やしてバリスタモンに戻しました。そして、ヴァイスに”バリスタモンのメンテナンス永久禁止令”が出されたのは言うまでもない。

そして、無限書庫に行ったワイズモン達は、
「うおおおお！本がこんなに、夢のようだ！！！！」
ワイズモンは、無限書庫内の大量の本を見てテンションがおかしくなっていた。
「ここにはさまざまな世界の古今東西の本がそろってるから、調べ物をするとき便利なんですよ。」
ユーノはルーチェモンに無限書庫の説明をした。
「そうなんですか、でもこれでは目的の本を探すのだけで時間が無くなってしまうのでは？」
ルーチェモンは、シャウトモンを連れてきたら、入った途端にぶっ倒れるだろうな、と思いながらユーノに言った。すると、
「ここでの本の探し方は変わっているのですよ。見たい本のジャンルやタイトル、作者を想像するだけでその本が入った本棚がやって来ます。」

ユーノが補足説明をした。なので、ルーチェモンは政治に関する本の事を考えた。すると、どこからか政治の本で埋め尽くされた本棚が出現した。
「確かに、これは便利だ。」
と、ワイズモンが関心していると、大量の本を見ているが、それも理解できる内容ではないため、手持無沙汰なヴィヴィオが目に入った。
「とりあえず、私はヴィヴィオに絵本を読んであげているとしよう。ルーチェモンは、」
「僕は調べたいことがあるんで、終わったら変わりますよ。」
こう告げると、二人は別れた。ワイズモンは適当に絵本を見繕うと、ヴィヴィオの所へ持って行った。
ルーチェモンは、
「覇王イングヴァルトについて書かれた本はと？」
覇王について書かれた本を探した。すると、出てくるわ出てくるわ、小説や歴史読本、研究記録がところせましと並んだ本棚が沢山やってきた。その中でも、
「これは、覇王本人の書いた本。」
覇王イングヴァルトの書いた自伝を見つけた、その内容を速読で読んでいると、一つの項目にたどり着いた。そこには、イングヴァルトと一緒にヴィヴィオと同じ色の双眸異色の女性が写っている挿絵が入っていた。
「聖王オリヴィエか。」
ルーチェモンは、ワイズモンの持ってきた絵本を真剣に見ているヴィヴィオを見ながら思った。
（まさかね）
ルーチェモンは、ヴィヴィオは聖王と関係があり、それが何か大きな事件につながるんじゃないかと考えたのだ。しかし、そこに書かれていることがどれだけ本当かは分からないが、最後の聖王には生涯配偶者はいなかったと書かれていた。

実はのお話（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン
「さて、今回のテーマはルーチェモン。ルーチェモンは天使の姿をしたデジモン。パワーアップすると「フォールダウンモード」、さらにパワーアップすることで「サタンモード」になる強力なデジモンだ。必殺技は七つの光弾を投げつける「グランドクロス」この技はセラフィモンの「セブンヘブンズ」と互角の威力があると言われている。」

モニタモンA
「天使型の時は飛び道具を使いますが、堕天した姿になると格闘技を使うようになりますな。」

モニタモンB
「さらにサタンモードになると、本体は外側の肉体が抱えている「ゲヘナ」の中に移動しますから、並みのデジモンでは勝てないですな。」

モニタモンC

「魔王の中ではほぼ最強クラスですな。」

カットマン
「因みに、グランドクロスは天文学の用語で、特定の惑星が十字を描いて配置される状態を表すんだ。この並びは昔から不吉だと言われているんだ。」

全員
「それじゃあまたね！！」

第十五話　絆の将と暴君の激突　タイキＶＳキサキ

タイキ達が聖王教会の本部に行った次の日、目覚めたなのはは気が付いた。自分の寝ているベッドにヴィヴィオとフェイトと一緒に何かがいる事に。
見ると、青色と白色の体に小さい角を持った竜のようなデジモンが寝ていた。
「ねえ、起きて。」
なのははヴィヴィオ達を起こさないように配慮し、慎重にそのデジモンを揺り起した。
「うう、もう食べられないよ。」
そのデジモンは寝言でこう言った。仕方ないので、なのははうまくそのデジモンをベッドから引きずり出し。鼻をつまんだ。結果、三秒ほどでそのデジモンは起きた。
「うう、なんだぁ。」
そのデジモンが頭を振りながら言うと、
「別に何かしようとかいう訳じゃないの、ただあなたが何者が訊きたいだけ。」
なのはは優しい口調で言った。万が一敵の鉄砲玉だった場合、かなりの命拾いをした事になる。
「俺はブイモン。ところでここはどこ？」
ブイモンと名乗るデジモンはこう言って、
「ところで、俺の持ってきたクロスローダーしらない？」
と、なのはに訊いた。
「え？そんなものは見ていな……」
なのははそういって周りを見渡し、ヴィヴィオの所を見た時、目が点になった。ヴィヴィオが赤と青のツートンカラーのクロスローダーを持っているのだ。
「あ、俺のクロスローダー。」

その事に気が付いたブイモンは、ヴィヴィオを起こさないよう慎重にクロスローダーを取り上げようとしたが、クロスローダーは手から離れなかった。
「ダメだこりゃ、完全にこの子のになってる。」
ブイモンはこう言って、ヴィヴィオの元から離れた。困ったなのはは、少し考えてから。
「仕方がないし、フェイトちゃんが起きるまでここに居て。」
ブイモンにこう言うと、新人たちの訓練に向かっていった。

そして、新人四人とタイキ達の集まった訓練場では、
「本日より、ナカジマ陸曹が機動六課に協力してくれる事になりました。」
なのはが、皆にギンガが機動六課に来ることを紹介した。皆が簡単に挨拶した後、ギンガも一緒に訓練を開始した。
スバルとギンガ、シャウトモンはヴィータから、ティアナとキャロはなのはから、エリオはナイトモンと一緒にシグナムと訓練を行っている。
最後に、隊長チームとフォワードチームで模擬戦を行い、結果的には隊長チームが勝った。そして、フォワードたちが今回負けた理由を話し合っている時、ヴィヴィオがブイモンと一緒に訓練場にやって来た。
「あ、ヴィヴィオー。」
と、なのはが呼んだ時である。ヴィヴィオが転んだ。傍にいたブイモンはすぐに起こそうとしたが、なのはが目配せする事で止めると、
「ヴィヴィオ、自分で立ってここまで来てみよう。」

と、ヴィヴィオに言った。ヴィヴィオ自信は半ば嫌そうだったが、頑張って立ち上がろうとしている。しかし、結局いい所でまた倒れてしまった。
「ママ。」
ヴィヴィオは涙ぐみながらなのはを見ている、
「うん、ママはちゃんとここにいるよ。」
いずれにしてもなのはは、この場でヴィヴィオが自分で立てるようになるのを待つらしい。
「ダメだよ、ヴィヴィオはまだ小さいんだから。」
でも最終的には、傍にいたブイモンがヴィヴィオを立ち上がらせた。
「もう、ブイモンはヴィヴィオに甘いよ。」
「なのはが厳しすぎるの、厳しくするのはもっと後でも十分だと思うよ。」
なのははブイモンに文句を言ったが、ブイモンは見事に切り返した。
（でも良かった、ヴィヴィオ、ブイモンと仲良くなれたんだ）
それでも、なのはは心の中でこう思った。思えば、昨日もデジモンを見てあまり驚くそぶりを見せなかったので、この手の適応力があるようだ。
（というか、ママって？）
様子を見ていた連中は一様にこう思った。彼らは昨日の夜、なのはがしばらく自分がヴィヴィオの親代わりになるとヴィヴィオに告げた時、ママと呼んでいい、となのはに訊ね、それをなのはが了承した一連の行動を知らなかったのだ。

その後、アインハルトもやって来たところで、再び訓練を再開した。

スバルはアインハルトと格闘技のスパーリングをやっている。エリオはスパーダモンの変化した槍を持って、ナイトモンと接近戦の訓練をしている。ティアナはリボルモンと早撃ちの勝負をして、キャロはシャウトモンとの連携の練習をしている。そしてギンガは、
「タイキ君、ちょっとスパーの相手してくれる？」
と、タイキに声をかけた。
「え？いいですけど。」
そしてその後、タイキがアインハルト戦でも見せた天賦の才と言ってもいいほどの格闘術を見せ、ギンガから自分の流派に弟子入りするようにと、散々勧められたのはいい思い出である。
「みんなの調子はどうかな、フェイトちゃん？」
なのはは、テリアモンとブイモンと遊んでいるヴィヴィオを横目で見ながら、隣にいたフェイトに訊いた。
「いい感じだと思うよ。間違えなくみんな強くなってる。」
「それにデジモン達との連携も取れるようになったし。これなら何の問題もねぇよ。」
フェイトと一緒にヴィータがこう答えた時である。突然訓練場に、隕石のような勢いで何かが落ちてきた。
「なのはさん！訓練場に巨大な魔力反応が発生しました！！」
ロングアーチスタッフの連絡を受け、みんなでその場所を見に行くと、まるで未来からきた殺人ロボットのように一人の少年がその場にいた。ただし、ちゃんと服は着ている。
「あーあ、転送装置を使ったけど肝心の着地に大失敗とかありかよ。」
少年は、少女のような可愛らしい見た目には似合わない、乱暴な口調でこう言った。
「あー！！あいつは！！」
砂煙が収まり、少年の姿が明確に見えると同時に、ヴィータは声を上げた。何故なら、彼は以前ヴィータ達が出くわした立てこもり事件の現場に登場し、見事な手並みで事を収めた少年だった。また、

アインハルトと路上喧嘩を行った少年も彼である。
「あの時の！！」
ヴィータがこう叫んだと同時に、
「えーと？誰？」
少年はこう言った。
「つーか！人に名を聞くならまず名乗れ！！」
ヴィータは、自分の事を知らないと言われ腹が立ったのか、乱暴な口調でこう告げた。
「俺はキサキ、えーっと、竜王とでも名乗っておこうかな。」
少年はその場にいる皆にこう言った。その瞬間、タイキ、なのは、フェイトは驚いた。カリムの予言の中に、真偽二つの勢力で出てきた「竜王」が目の前に現れたのだから。
「転送装置の着地に失敗したって言ったよね、何しに来たのか”お話”聞かせてもらえる？」
なのはが少年「キサキ」にこう訊いた。
「そうだね、”ふくしゅう”かな。」
キサキはこう言って、今にも走り出そうとする陸上選手のような態勢になった。
「気を付けて下さい。来ます！！」
アインハルトが皆に合図すると同時に、キサキは飛び出した、訳ではない。飛び出すと見せかけて、すぐさま立ち止まったのだ。このフェイントで、この場にいる全員の間合いがくるった。
キサキは、右手の人差し指と中指を立てて挑発を行った。これを見て、
「馬鹿にしてんのか！！」
一番最初にヴィータが飛び出した。ハンマーを構えて突進して言ったが、
「この間も言いましたよ、頭に血が上った状態での行動は成功しないって。」
キサキはこう言うと、ヴィータのハンマーを回避する動きと同時に

掴んで、巧みな動きでヴィータに隙を作り、渾身の蹴りをお見舞いした。
「うわぁぁ！！」
ヴィータはうまく防御することが出来たが、それでも凄まじい衝撃を受け大きくふっ飛ばされた。
「次！！」
キサキはお化けと火の玉を合わせたような魔力弾を一瞬で作り上げると、渾身の力を込めて投げつけた。しかし、魔力弾は見当違いな方向へと飛んで行って爆発した。
「あれ？」
これには、その場にいる者は全員、当然キサキも驚いた。
「はあ、驚いた。」
なのはの傍でヴィヴィオを守っていたブイモンはため息をついてこう言った。しかしなのはは、
「当てることが出来なくてもあんな複雑な魔力弾を一瞬で作り上げるなんて。」
キサキの芸当に驚いていた。
「でもとにかく、早く何とかしないと！！」
スバル達はこう言って、キサキに飛びかかって行った。
「四人同時ね。いいよ、来なよ。」
キサキはこう言うと、最初に柔道の要領でスバルを投げ飛ばし、続いて遠くから銃撃を行おうとしていたティアナを、素早い動きでスープレックスで投げ飛ばし、エリオをヴィータにやったのと同じ要領で転ばせた後、上空を飛んでいた巨大フリードを地面に激突させた。
「飛竜の焼印押し！！」
その様子を見ていたタイキは、
（なんて奴だ、仮にも普段から戦闘訓練を積んでる魔道士四人を一度に相手して無傷、その上息も上がってない）
と、思っていた。

しかし、問題のキサキは、
「あーあ、やっぱ手を抜いてればこの程度か。」
と、言い放った。
（どういう事だ？ただの見栄ならいいけど）
キサキの言葉を聞いたタイキがこう思っていると、キサキは腰から水色のマイクのような機械を取り出した。
「あれって！クロスローダー？！」
皆が驚くと同時に、
「リロード！エクスブイモン！スティングモン！」
キサキはクロスローダーを掲げて、こう叫んだ。すると、クロスローダーから発せられた光の中から、頭に大きな角を生やし、腹部に「X」のマークが付いた水色の竜型デジモンと、深緑色の昆虫のような姿のデジモンが現れた。
「え？スティングモン？」
現れたデジモンに、タイキ達は驚いた。スティングモンとは以前会ったことがあるのだ。
「む、君たちは俺を知っているのか？済まないが、俺は君たちとはあったことがない。」
スティングモンはタイキ達にこう言った。驚くタイキ達に、
「タイキ、アイツはきっと私たちがハニーランドであった個体じゃない。きっともっと他のデジモンよ。」
メデューサモンが言った。
「んで、今回の相手は奴らなのか？キサキよ。」
そしてエクスブイモンがキサキに訊くと、
「ああ、それに今回は本気だしてもいいぞ。奴らを相手にするとなると、お前らだけじゃ少なすぎるかもしれないしな。」
キサキはこう答えた。
「そうか、そういう訳じゃ。観念して私と戦いなさい。」
エクスブイモンはこう言うと、腹部のXマークから光線を発射した。
「エックスレイザー！！」

皆はそれを間一髪で回避すると、最初にシャウトモン、バリスタモン、スパロウモンが向かっていった。
「ラウディロッカー！！」
「アームバンカー！！」
シャウトモン、バリスタモンは得意の打撃技でエクスブイモンに襲い掛かったが、エクスブイモンはそれを簡単に受け止めた。
「ナンテイウ馬鹿力ダ。」
「まさかこの程度ではなかろう？」
「当然だ、このまま終わると思うなよ。」
また、スティングモンとスパロウモンの方は、
「うう、速いうえに硬い。」
スパロウモンは自分の攻撃が当たらず、当たってもそんなに効いていないために困っていた。
「お前も凄いよ。ここまでのスピードは到底追いつくやつはいるまい。」
スティングモン自身も、スパロウモンの素早さには苦戦しているようだが。
そして、ジェネラルは本陣で傍観していた訳ではない。キサキは戦いが始まるや否や、真っ先にタイキに襲い掛かった。
タイキ自身、戦闘中にジェネラルへ直接攻撃をするジェネラルに出会ったのはこれが初めてなので、対応にてこずった。
五発目の蹴りをなんとか回避したところで、シグナムが助太刀に入ってくれた。
「少なくともタイキは礼節をわきまえた人物だが、お前は違うようだな。」
と、シグナムがキサキに言うと、
「恋愛と戦争にはあらゆる戦法が使える、って言葉知ってます？」
キサキはこう言って、シグナムと距離を取った。
（あの子はここに来た理由を復讐って言ったけど、タイキに何か恨みでもあるのか？）

クロスローダーの中にいるジジモンは、タイキと繰り広げたこれまでの冒険を思い出していた。しかし、キサキと言う名の人間は、彼の記憶のどこにもなかった。
（それにしてもあ奴、誰に復讐しに来たんじゃ？）
ジジモンは心の中でこう思った。

そしてエクスブイモン達と戦うタイキ達は、いったん相手との距離を取った。
「あはは、お主たちやっぱ強いなあ。気にいったよ。」
エクスブイモンはシャウトモン達にこう言ったが、当のシャウトモン達は、
（強いだと、あれだけやりあって息も上がらず、汗もかいてないなんて）
「奴らの実力は俺たちより上か？」
と、みんなで考えていた。そんな中、
「キサキ、でいいんだよね。」
なのはが前に出て、キサキに声をかけた。
「一体誰が目的でここに来たの？」
対するキサキは、
「ここに来たのはただの景気付け、俺の討伐対象はもっと大規模ですよ。」
と、答えた。その後、
「さてと、ここからが本気だ！！」
と叫んで、クロスローダーから赤い翼を持つ巨大な鳥「アクィラモ

ン」、白い猫のような生き物、古代に生きた草食恐竜のような生き物、背中に六枚の翼を持つ天使型デジモン「エンジェモン」を出現させた。
「な！テイルモンにアンキロモンだと？！」
「それにあのアクィラモン、この間ヘリを襲撃した奴だ！」
「しかもこの布陣は。」
タイキ達クロスハートの面々は皆驚きの声を上げた。そんな中で、キサキはクロスローダーを掲げると、
「エクスブイモン、スティングモン、デジクロス！！アクィラモン、テイルモン、デジクロス！！アンキロモン、エンジェモン、デジクロス！！」
と、叫んだ。結果、体中を武装した竜型デジモン、白と赤の混ざった羽を身に着けた人型デジモン、土偶のような形のデジモンが現れた。
「パイルドラモン！！」
「シルフィーモン！！」
「シャッコウモン！！」
これにあわせタイキも、ディアナモン、メデューサモン、グレイモン、メイルバードラモンを出すと、
「グレイモン、メイルバードラモン、デジクロス！！」
グレイモンとメイルバードラモンをデジクロスさせた。その後、
「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、スパロウモン、スパーダモン、デジクロス！！」
元々出ていたシャウトモン達もデジクロスさせた。
「メタルグレイモン！！」
「シャウトモン×５Ｓ！！」
そして、それぞれのデジモンが向かい合ったところで、再び戦いが始まった。

シャッコウモンとメタルグレイモンが組み合い、それに続いてシルフィーモンがディアナモン、メデューサモンと交戦を開始した。また上空では、シャウトモン×５Ｓの剣と槍の攻撃に、パイルドラモンが両手のスパイクで対応している。
その様子を見ながら、ティアナは思った。
（どうしたのかしら？シャッコウモンはともかく、パイルドラモンとシルフィーモンはあまり派手な事をしていない）
シャッコウモンとメタルグレイモンの戦いである押し合いでは、両者ともに一歩も譲らず、メタルグレイモンが飛び道具を使おうとしても、シャッコウモンが目から発射する光線で阻止するという五分五分の勝負を繰り広げているが、シルフィーモン、パイルドラモンの戦いは、相手の攻撃を防ぐか避けるかどちらかしか行っておらず、シャウトモン×５Ｓやディアナモン、メデューサモンはやりづらそうなそぶりを見せている。
そんな中、キサキはどうしていたかと言うと、
「悲しみの声は天を侵し、怒りの血は大地を蝕む。」
古代ベルカ語で、こういう意味になる言葉を紡いでいた。
「我が暴威はケイリスを包み、我が怒りは戦乱を惑わす。」
古代ベルカ語が分からないタイキ達やなのは達は、何言ってんだ、と思っていたが、アインハルトは、
「この言い回し、まさか！」
唯一古代ベルカ語が少しわかったので、彼の言っている言葉の意味が分かった。
「ゆえに我は狂王、なれば我は暴君。竜王エイリーンの名の元、卿

が絶望の底に沈む事を所望す。」
キサキがここまで言ったとき、場の空気が変わった。
「気を付けて下さい！彼は…！！」
と、アインハルトが言った時、キサキはクロスローダーを掲げると、
「パイルドラモン、シルフィーモン、シャッコウモン、デジクロス！！」
と、叫んだ。結果、巨大な翼を六枚持ち、白い色をした聖竜型デジモンが現れた。
「セイントドラモン！！」
そして、変化はキサキにも現れた。体中の彼方此方が変化を始め、次の瞬間、光輝く青い竜になっていた。
「な？変身した？」
「あんな魔法、今まで見たことが無い。」
ヴィータとシグナムがこう言うと、
「今は失われた魔法の一つです。古代ベルカ時代、ケイリスという国に君臨していた暴君、通称「竜王」はあの魔法のために竜王と呼ばれているんです。」
アインハルトが、自分の中にある覇王の記憶を頼りに皆に説明した。
「あの姿になればあらゆる身体能力が強化されま……」
アインハルトがこう言った瞬間、竜となったキサキの姿が消え、アインハルトがふっ飛ばされた。
「あのスピード、フェイトの三倍はあるな。私にも見えなかった。」
シグナムはこう言うと、愛用する剣レヴァンティンを鞭のような形状に変化させ、振り回した。
「よし、広範囲に攻撃すれば速いほど回避が難しくなる！！」
ヴィータがこう言った時、キサキはレヴァンティンを掴むと、投げ縄のように振り回した。結果、レヴァンティンはシグナムの体に巻きついた状態になった。
「さてと、このまま引っ張れば身体的にいろんな意味で拙い事に。」
キサキが面白そうに言うと同時に、

「ハーケンセイバー！！」
フェイトの投げつけた斬撃が飛んできた。キサキはそれを紙一重で避けると、上空へあがりフェイトと戦い始めた。

「スリービクトライズ！！」
「アロー・オブ・アルテミス！！」
「スレイ・エレイン！！」
「ギガデストロイヤー！！」
四体のデジモンは、セイントドラモンに渾身の攻撃を放った。だが、
「ホーリースパーク！！」
セイントドラモンの体から迸る聖なる電流に阻まれ、攻撃は一発も当たらなかった。
「アラミダマ！！」
続いて、目から発射した光線で、ディアナモン、メデューサモン、メタルグレイモンを倒してしまった。
「ビクトリーブレイブ！！」
シャウトモン×５Ｓは一瞬の隙を付いて、槍で突こうと突進した。
しかし、攻撃は簡単に防がれてしまった。
「テメェ、ほんとにデジモンかよ！」
「それもそうじゃ、それに私に手こずっていては、私の仲間のもっと強い奴も勝てんぞ。」
シャウトモン×５Ｓの言葉に、セイントドラモンはこう返した。

そして、超高速の空中戦を繰り広げるキサキとフェイトは、
（凄いスピード、まともにやっても勝ち目は無い）
フェイトはソニックフォームとなってキサキと戦っている。しかし、
「いいんだ、そんな状態で俺の攻撃を喰らえば一撃必殺だよ。」
キサキはフェイトにこう言って、口から青い炎を吐き出した。至近距離からの攻撃だったため、フェイトは炎に巻き込まれ、墜落した。
「リロード！ベルゼブモン！！」
その様子を見ていたタイキは、ベルゼブモンをリロードしキサキに当たらせた。これまでやったことが無い、人間にデジモンをあてがうのには抵抗があったが。
「デス・ザ・キャノン！！」
ベルゼブモンは「ベレンヘーナ」から発射される固い弾丸をキサキに打ち込んだが、キサキは右手から発生させた光の剣ですべての弾丸を斬り落とした。そして、長い尾の一撃でベルゼブモンを叩き落とした。
「ベルゼブモンでもダメか。」
タイキがこう言った時である。突然キサキが動きを止めた。
「あ、あれ？」
見ると、キサキの体に罅のような物が発生していた。
「ちぇ、残念、もう五分か、あと十秒は持つと思ったんだけどな。」
キサキはこう言って、人間の姿に戻った。その時、彼の体は傷だらけになっていた。
「セイントドラモン！終わらせろ！！」
キサキにこう言われたセイントドラモンは、シャウトモン×５Ｓにめがけて突進した。

「ホーリーインパクト！！」
その時、セイントドラモンは「ホーリードラモン」を思わせるドラゴンの幻影を身に纏っていた。
「コスモビクトリー！！」
シャウトモン×５Ｓも、左手の槍を突き出して突進した。
結果、両者共に胸に大きな傷を作って終わる事になった。
「飽きたし帰るぞ！！」
キサキはこう言って、タイキ達の前から去ろうとした。
「待て、お前は何のために復讐を？！」
最後にタイキがこう訊くと、
「それはいずれ分かるよ。それに、次は俺に絶対勝てないと思い知るがいい。」
キサキはこう言い残して、セイントドラモンと共にこの場から去った。

「しかし、なんだったんだあいつ？」
ヴィータがこう言うと、
「どこまでも分からないやつではあるな。」
シャウトモンがこう言った。
（なんだあいつ、まるでダークナイトモンみたいな奴だな）
「でもどういう事だ、次は勝てないって？」
タイキがこう言うと、
「もしかしたら、彼がホテル・アグスタの襲撃、リリスモン襲撃時

の救援を行った人物だと考えると。」
と、ティアナが言った。その時、この場にいる皆が凍り付いた。
「そうじゃん、インペリアルドラモンやセラフィモン、ガイオウモンがまだいるじゃん。」
この時キサキがまるで本気じゃなかった、と考えると、物凄く恐ろしい事である。それよりも、
「訓練場がメチャクチャに。」
メチャクチャになった訓練場を見ながら一様に思った。
（今度請求しとこ）
と。

第十五話　絆の将と暴君の激突　タイキＶＳキサキ（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン
「さて、今回のテーマは「ポーンチェスモン」ポーンチェスモンはネット上のチェスゲームのデータから生まれたパペット型デジモン。必殺技は持っている槍で敵を突く「ポーンスピアー」円形の盾で敵に体当たりする「ポーンバッククラー」だ。」

モニタモンＡ
「味方と一緒になって組む「ピラミッドフォーメーション」を行うと、大抵の敵は攻撃を躊躇いますな。」

モニタモンＢ
「出世一番に考えていますから、口癖は「前進あるのみ」味方は全員ライバルですな。」

モニタモンＣ
「ちなみに、クロスハートに所属するのは白いポーンチェスモン。いつでも先制攻撃が出来ますな。」

全員
「それじゃあまたね。」

次回予告
ついにやって来た管理局の意見陳述会。警備にかり出された機動六課の面々やクロスハートの面々、陳述会に臨む者たちや裏で動くものたちが何をしていたか。

次回「嵐の前の静まり」

第十六話　嵐の前の静まり

ここは、ミッドチルダのとある場所。ここでは紫髪の女が、目の前で正座しているミイラのような少年に説教をしていた。
「まったく、あなたの仲間に犠牲者が出てこなかったから良かったものの。いつも勝手な行動をするのは控えろと……、話を聞いてます？」
目の前の少年はうつむいたまま、
「よし、そこだ。ここから…」
と、呟いている。女が目を凝らして見ると、少年の耳にイヤホンが付いていた。
「何を聞いて……？」
女はこういってイヤホンを取り上げた。すると、
「ただ今ゴール！！順位は一位から五番、七番……」
と、聞こえてきた。
「って！ボートレース聞いていたんですか！！」
女はこう言った後、
「そして結果は？」
「当然大当たり……しまった。」
少年は墓穴を掘った。
「別にボートレースを見たり聞いたりするなとは言いません！だからと言ってお金かけたり、ましてや説教の途中で聞いてるなんて……」
女がこう言うと、少年がブツブツ言っているのが聞こえた。
「けが人を長時間正座で座らせて説教なんて、ウーノは鬼です、オニババ。」
「な！それが説教されている人間の言うセリフですか！！」
とうとう女の我慢も限界か、と思ったところで、
「まあまあウーノ、彼もそれ相応に反省しただろうし、このまま続

けられてキサキにやる気をなくされては困る。」
一人の男がウーノをなだめた。
「あ、ドクター。ですが…。」
ウーノは何か言い返そうとしたが、
「しかし気になる、君の戦闘機人としてのシステムをいつも点検していて思うのだが、何故キサキと接するときだけ君は感情的になるんだい？」
ドクターことジェイル・スカリエッティにこう訊かれたウーノは黙ってしまった。
「まあ、君が彼をどう思おうがどうでもいいけどね。それよりあれはどうなっている。」
スカリエッティがこう言うと、
「はい、すでにほとんどの準備が整っています。」
ウーノは普段通りの淡々とした口調に戻って言った。
「そうか、間もなく私の悲願も達成する。」
スカリエッティは、目の前にある大量のレリックを見ながら歓喜のあまり叫んだ。一方ウーノは、
「あ、逃げられた。」
フラフラと部屋から逃げていくキサキの背を見ながらこう言った。
でも追いかけようとは思わなかったらしい。

また、同じ場所のべつのスペースでは、
「へえ、すごいっすね。あんなにたくさんあった余分なデータが一瞬で全部なくなるなんて。」

赤い髪の少女「ウエンディ」が、自分の前でパネルを叩きながら作業する、悪魔のような姿のデジモンに言った。
「まあな、俺たちのようなデジモンにとってデータは何にも勝る栄養源だからな。まあ、デジノワがあれば一切の文句はないんだが。」
デジモンはこう言って、パネルを閉じた。
「はあ、やっと逃げられた。」
すると同時に、キサキがフラフラな足取りでやって来た。長時間正座させられた為、足取りが覚束無いらしい。
「まったく、今日もたっぷり絞られたようだな。」
眼帯を身に着けた少女「チンク」がキサキに言った。
「笑いごとじゃないっての。」
キサキは、今までその場にいたデジモンをしまいながら言った。そして、
「そういや、ドゥーエやクラウドから連絡は来てない？」
と、その場にいる皆に訊ねた。
「いえ、来てませんよ。」
クワットロがパネルをいじりながら答えた。
「ええ、こんな大事なことが近づいている時に？」
キサキはこういうと、
「そりゃ、あっちはあっちで今度の意見陳述会の事で忙しいのは分かるけど。」
とも言った。

「ハックシュン！！」
一方管理局地上本部では、今まさにクラウドがクシャミをした。

「どうしました、お風邪ですか？」
目の前のピンク色の髪の女が、心配そうな顔でクラウドを見た。
「いや、どっかで誰かが俺様の噂をしているようで。まあ、誰がどこで何を話しているか大体想像つきますけどね。」
クラウドはこう返すと、
「さて、表向きの会話はここまでにして、裏向きの話ね。」
と、目の前のピンク色の髪の女性に言った。
「ドゥーエさんはどう見ます、今度の意見陳述会。もしも連中の介入がなかったらどうなると思います？」
「それは分かりませんね。レジアスには最高評議会が付いてますからね。」
「最高評議会か。時代遅れな頭脳がどれほど通用するんだか？」
二人がここまで言ったところで、レジアスから連絡があった。クラウドを呼んでいると、
「と言う訳で、行ってきます。」
「お気をつけて。」

「で、なんですか？」
「何ですかではない！！」
部屋に入るや否や、レジアスは怒り心頭な様子だった。
「お前は最近勝手な行動が増えているそうだが、いったいどういうつもりだ？」
レジアスがクラウドにこう訊くと、
「別に俺がどこで何をしてたっていいじゃないですか。」
クラウドはこう返して、
「あなたも最近となっては、随分聖王教会や機動六課を悪く言っているようですが、何かされました？」

と、訊きかえした。
「仕方ないだろう。今では優秀な人材のほとんどは空の連中に持っていかれて、地上の戦力は手薄だ。そんな中であんな少数部隊の試験運用。しかも聖王教会の後ろ盾があるとまで言われれば、こちらに喧嘩売ってんのか、って気にもなる。」
レジアスがこう言った後、
「聖王教会と言えば、オッサンは予言見ました？」
クラウドはこう訊いた。
「オッサン言わない。それに中将はその手のスキルが嫌いなお方ですから。」
しかし、クラウドの質問に答えたのは、レジアスではなく秘書のオーリスだった。
「そうなんですか、そこにオッサンの最期が書かれてましたよ。現世の竜王、憎しみの炎を迸らせ、大地の指導者焼き尽くす、って。」
クラウドはこう言ってやった、因みにこれは、製作者本人が見逃していた予言である。
「フン、竜王は大昔の暴君だ。末裔がいたとしても何ができる。」
レジアスはこう吐き捨てた。
（まあ、あいつらならやりかねねえな）
クラウドは心の中でこう思い、笑いをこらえた。

そして、肝心の機動六課では、
「さて、今回の任務は今度の意見陳述会の人員警護。」
隊長たちが集まり、新人他、クロスハートのメンバーに任務の内容を告げていた。この場には、民間妙力者のアインハルトや、ブイモ

ンをパートナーにしたヴィヴィオもいる。因みにヴィヴィオはこれまでの訓練の中で、デジクロスができるようになっていた。
「まずは私とヴィータ隊長、フォワード四人とタイキ達で行くよ。」
なのはは後ろのヘリを指しながら、この場にいる皆に言った。
「それなら、リロード！！」
タイキはこう言って、クロスローダーからグレイモン、メイルバードラモン、メデューサモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、グラウンドラモンを出した。
「皆はここに残って、いざって時の警備をしてくれるか。」
「任せろ。」
「ばっちり守っといてあげる。」
タイキはここの防衛を行うのが、シャマル、ザフィーラ、アインハルト、ヴィヴィオ、テリアモン、ブイモンだけでは少ないと思ったのか、自分のデジモンの一部を残していった。

そして、現場へ向かう途中、
「ところで、ヴィヴィオはどうするの。」
ふとスパロウモンがなのはに訊いた、このまま里親探しを続けるのか、と。
「確かに、せっかくならこのまま自分の娘にすればいいんじゃないか？」
それに合わせて、ドルルモンもこう言った。
「うーん、厳しく接してるつもりなんだけど。」
なのはは困った顔でこう言うと、
「それでも受け入れ先は探すよ、あの子が幸せになれるような。」

皆にこう言った。
「でも絶対納得しないと思いますよ。」
「まあ確かに悩むよな、たった十九年生きただけで子供持ちなんて。」
最後にシャウトモンがこう言った。
（いや、そういう事じゃなくて）
その瞬間、この場にいる皆がこう思ったのは言うまでもない。

なのは達が現場に向かった後、隊舎に残ったアインハルトはヴィヴィオに、
「ところで、ブイモンを始めてみた時どう思いました？」
と訊いた。
「え？かわいいなって。」
ヴィヴィオは無垢な笑顔でこう答えた。かわいいと言われ、ブイモンは、
「せめてカッコイイって言ってよ。」
と言っていたが、
「あの、変な生き物だと思わなかったんですか？」
「ううん、前にももっと違うけどこんな感じの生き物に会ったことがあるから。」
ヴィヴィオの純粋な答えを聞いたアインハルトは、
（やっぱり彼女は聖王の）
と思った、そして、
「静かですね、まるで嵐が来る前のような。」
空を見上げながら思った。自分が本気で力をふるう必要が出てきそ

うだ、と。

おまけ

「おねえちゃんのいじわる！！」
シャウトモンが、まるで幼い少女のような声を上げた。
「あはは、似てる似てる。」
「次はタイキの番だぜ。」
シャウトモンは笑っているタイキを見て言った。彼らは今、モノマネ大会をやっている。（暇なので）
「ああ、それじゃあ……」
タイキがモノマネをしようとすると、
「言っておくけど、真実はいつも一つ！、は無しだからね。」
と、ティアナが言った。
「すねちゃま。ってのはダメ？」
デジモン達やフォワード四人は最初、ネタが分からなかったようだが、
「ああ、なるほど。」
少し考えたら気が付けた。
「じゃあスバルな。」
タイキが順番をスバルに回した。
「それじゃあ、掃除しなさいボケガエル！！」
スバルは渾身のモノマネをしたが、
「なんかスバル自宅でよく言ってそう。」

シャウトモンにこう言われてしまった。
「うう、自身あったのにな。じゃあキャロ。」
スバルは少しテンションを下げながらキャロに回した。
「こういうのは、ありきたりなのをやると受けないんですよね。」
キャロはこう言うと、
「吹き飛べ！炎竜軍配撃！！」
普段のキャロからは想像できないような、低めな声を出した。
皆は一時呆気にとられていた、
「全然違和感がない。」
と、
「じゃあエリオ君。」
やりたかったモノマネを成功させたキャロは、ご機嫌な様子でエリオに順番を回した。そして、しっかり五対五に分かれた黒い長髪のカツラを被ると。
「スバルさん、僕以前から気になっていた事があるのですが。」
スコップを持ってスバルに言った。
「なんでリボルバーナックル片手にしかないんですか？そういうの凄いイライラするんですけど！！」
そしてスバルに喰いかかった。
「なんでだ？この状態のエリオは何か気に喰わん。」
特別審査員と参加しているヴィータはこう言った。因みにヴィータは一番最初にスパーダモンのモノマネを完璧にやってのけた。
「となると、最後はティアナさんですね。」
エリオはカツラを外しながら言った。
「頑張ってティア、オオトリだよ。」
スバルがこう言うと、
「ねえスバル、あなた最近私に黙って色々してるよね。何してるのかな、かな？」
ティアナはうつむき気味にこう言った。
「え、ティア？」

スバルが顔を覗き込むと、
「ドルルモンも、最近は私を差し置いて現場指揮をしたりしてるけど。私邪魔かな、かな？」
今度はドルルモンに話のベクトルが向いた。
「え？いや、そういう訳じゃ……」
ドルルモンがこう言うと、
「嘘だ！！！！！」
ティアナは声の限り叫んだ。
（なるほど、上手ですな）
唯一ネタの分かったモニタモンズは、クロスローダーの中でこう思った。

その時、別な場所にいたなのはは、突如悪寒を感じた。
「どうしました、マスター？」
レイジングハートは、なのはに訊いた。
「うん、なんかこれまで感じたことのない恐怖が。」
なのははこう言って、見回りに戻った。

そして、また別の世界でも、
「はっくしょん！！」
一人の少年がくしゃみをした。

「アニキ、どうしたの？」
隣を歩いていたオレンジ色のトカゲのような生き物が訊くと、
「いや、なんかこれまで感じたことのない恐怖が。」
アニキと呼ばれた少年はこう言った。
「へえ、君が恐怖を感じるなんて珍しいね。」
「ふん、黙ってろトーマ。」
少年は自分の前を歩く金髪の少年の言葉に素っ気なく返した。

第十六話　嵐の前の静まり（後書き）

カットマン
「カットマンと。」

モニタモンズ
「モニタモンズの。」

全員
「デジモン紹介のコーナー―！！」

カットマン
「今回のテーマはバステモン。バステモンは獣人型デジモン。必殺技はベリーダンスを行い相手を惑わせ、操る「ヘルタースケルター」踊りながら敵に近づき吸血する「ヴァンパイアダンス」だ。」

モニタモンA
「ネコの女神と呼ばれ、派手好きでズル賢い性格のデジモンですな。」

モニタモンB
「アニメでは猫のような振る舞いが多いですな。聞くところによると、一日十六時間は寝ているとの事ですな。」

モニタモンC
「ところで、今回のエピソードの最後のおまけはなんなんですな？」

カットマン
「調子に乗ってついやってしまった。今はいろんな意味で”こうか

い”している。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

ファンの皆様、お待たせしました。ディアナモンとメデューサモンのクロスハート加入の経緯が今明らかになります。まずは最初にディアナモンのエピソードを語ります。

次回「ディアナモンの過去。テクノゾーンの美しき殺人姫」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5138w/

デジモンクロスウォーズ　絆の将と魔道の戦士

2011年12月26日22時50分発行